

神道龍騎の暗殺教室

空はあんなに青いのに・・・

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は力なり。この言葉をモットーに生きていた少年神道龍騎は、柄ヶ丘中学に通う文武両道の生徒だつたが・・・。

これはとある少女との出会いから始まつた1年の闘いと恋の物語。

目

次

第1章 1学期の時間

1.	龍騎の時間	1
2.	編入の時間	
3.	鳥間の時間	
4.	登校の時間	
5.	再会の時間	
6.	名前の時間	
7.	英語の時間	
8.	体育の時間	
9.	旅立ちの時間	
10.	謝罪の時間	
11.	下校の時間	
12.	テストの時間①	
13.	テストの時間②	
14.	テストの時間③	
15.	修学旅行の時間①	
16.	修学旅行の時間②	
17.	修学旅行の時間③	
18.	修学旅行の時間④	
19.	転校生の時間	
20.	転校生の時間 2時間目	
21.	球技大会の時間①	
22.	球技大会の時間②	
23.	才能の時間	

216 202 193 176 165 154 142 131 115 107 96 87 78 70 61 52 43 37 27 18 12 7 1

24. ビジョンの時間

25. 期末の時間①

第1章 1学期の時間

1・龍騎の時間

突然ですが皆さんにはナンパという言葉をどこ存知だろうか。一般的には面識ない者に対して、公共の場で遊びに誘う行為で、その行為を行う者は軟派（なんぱ）と呼ばれているそうな。

しかしながら、草食系男子と言われるよう女性に対しても積極的な男性が多い昨今では、見かける事も多くはないだろう。んつ？何をさつきから一人言を言つてるのかつて？

それは俺に言わせているアホ作者に言つて欲しいものだ。おつと、そういえば自己紹介がまだだつたな。

俺の名前は神道龍騎。柵ヶ丘中学に通う中学生だ。今年の4月に3年生となつたばかりだ。

ヤンキーA 「お姉ちゃん可愛いねえ。俺たちと一緒に遊ばない？」

ヤンキーB 「俺と一緒に楽しいことしようぜ、ぐへへ」

そんな俺が開口一番にナンパについて語つていたのは、いま目の前の光景を目撃しているからだ。ていうか、ぐへへつて。漫画以外にそんな笑い方する奴が現実にいたんだな。

？「ごめんなさい。これから用事があつて・・・」

ヤンキー2人組に絡まれてる女の子は明らかに避けていた。まさりやそうだろうな。ていうかあの制服、ウチの学校の生徒か？でもあんな子学校にいたかな？

ヤンキーA 「いいから来いつて言つたんだよ！」

？「キヤツ!!？」

そんな事を考えていたら、ヤンキーは女の子の手を掴んで連れて行こうとしていた。

？「だつ誰か・・・」

女の子の尻には涙が浮かんでいた。ナンパだけならいざ知らず、手を出したんなら見過す訳にはいかないな。

龍騎「あ～ちよつとお兄さん方。嫌がつてるんだからやめといた方

がいいですよ

ヤンキーA 「あんつ！誰だてめえ？」

女の子を連れていこうとしたところでストップをかけた。

龍騎 「その子と同じ学校の者です、ナンパすんのは結構だけど、力尽くで連れていくのはダサいですよ」

ヤンキーB 「ぐへへ、同じ学校？だからといって人の色恋に口出しすんのは頂けねえなあ。俺たちが色男だからって嫉妬しちゃいけねえよお？」

いや、色恋っていうかぱつと見は誘拐そのものんですけどねえ、ていうか、ぐへへと笑う奴を世間一般では色男とは言いません。

龍騎 「お兄さん方が色男だつたらその子も付いていつたかもしけないっすけど、拒否られてる時点で色男どころか男としても見て貰えないんじゃないっすか」

ヤンキーA 「こんのガキが！黙つて聞いてりやいい気になりやがつて!!」

腕っぷしが強そうなAが右ストレートをかまそうとした、しかし・・・

龍騎 「おせえよ」

ガシツ!!

ヤンキーA 「ぐつ！」

右ストレートよりも速くAの懷に入り込み右手でAの首根っこを掴んだ。

龍騎 「もう一度言う、やめとけ、お前らじやあ俺には敵わねえよ」首を掴まれたAは驚きのあまり、女の子を掴んでいた左手を離してしまった。急に離された女の子は踉跄めき倒れそうになるが、俺は咄嗟に空いていた片方の手で女の子を引っ張りしつかりと抱き寄せた。

龍騎 「大丈夫？もう安心だよ」

？「あつ、はい、ありがとうございます//／＼

龍騎 「つつつ！」

抱き寄せられた女の子の顔を見ると、目尻に涙が溜まつてはいたが、顔はほのかに赤く、しかも位置的に上目遣いになつていた。

ヤンキーA 「余所見してんじやねえぞ!!」

そんな事を考えていたら、首根っこを掴んだAが態勢を立て直し再び殴りかかろうとしていた。

龍騎 「はあ・・・せつかくチャンスを与えたのに・・・」

龍騎もまた女の子を一度離し、態勢を整えた

離された瞬間、女の子はどこか残念そうな顔をしていたのが目の先で捉えたが、今はこっちを片付けないとな。

ヤンキーA 「死ねやあ!!」

Aが再び殴りかかり俺の顔面を捉えようとした瞬間、俺は身体を下に下げた。と同時にAの拳は俺の頭の上を通過した。

龍騎 「そりやこつちの台詞だあ!!」

一度しゃがんだ俺は身体を起こすと同時にAの顎に強烈なアツパーを叩き込んだ。

ヤンキーA 「あべし!?」

Aは素つ頓狂な声を上げると同時に仰向けに倒れた。ていうか、あべしつつて・・・

ヤンキーB 「こんの野郎があ!!」

すると今度はBは鉄パイプを持って殴りかかってきた。そういうえば君居たねえ、忘れてた、いやマジで。

ガンツ!!

? 「キヤツ!?

Bが持っていた鉄パイプは見事に俺を捉えた。否、捉えはしたが、俺は肘で鉄パイプを防いだ。

ヤンキーB 「そ、そんな・・・」

龍騎 「鍛え方が違うんだよ、女を落としたいんなら武道の一つでも極めたからにしなあ!!」

ヤンキーB 「ぐへつ!?

鉄パイプの攻撃を受けた俺は一度身体を回転させ強烈な上段蹴りをBの顔面にお見舞いした。ていうか、鳴き声もぐへつなのか・・・

AもBも完全に伸びているが、またいつ目覚めるとも限らないし、これ以上面倒な事にはなりたくないのやる事はただ一つ

龍騎「じゃあ逃げようか」

ガシツと女の子の手を握るとその場から走り去つた。

龍騎「ここまで来れば大丈夫だろう」

それから5分ほど走った所で安全を確認しつつ俺たちは止まつた。

龍騎「ごめんね、怖い思いをさせちゃつて、怪我はない?」

?「あつはい、大丈夫です。えつと… その… // /

女の子は何やら言いたそうな様子だった。

ああ、そういえば名前を言つてなかつたな。

龍騎「俺は神道龍騎、君と同じ柄ヶ丘中学に通う3年生だよ、君の名前は?」

笑顔で自己紹介を終えると、女の子の顔は更に赤くなつた。さつきまで走つていたのもあるが、蒸氣した顔付きは何処と無くイケない感じがした。イケない感じがどんな感じかつて?それは読者が判断してくれ。

桃花「同じ学校で同じ年だつたんだね!私は矢田桃花、さつきは助けてくれてありがとう!」

彼女は弾けるような笑顔で言つた。

作者（いやあゝ青春ですなあゝ）

何やら聞こえた気がしたが、気にしてたら負けだろう。

龍騎「どういたしまして、困つて居たら助けるのは当たり前だよ、でも同じ学校の同じ学年なのに見覚えがないんだよなあ…」

桃花「あつ、それは私がE組にいるからだと思うな、E組は校舎が離れた所にあるから…」

龍騎 「ああ～なるほど」

E組の名前を言つた瞬間、彼女の顔は少し暗くなつてしまつた。
ちよつと申し訳ない事をしてしまつたな。

龍騎 「ごめん、気にしてる事聞いてしまつて・・・」

桃花 「ううん、知らなかつた事だからしようがないよ、ところで、
さつきの人に鉄パイプで殴られてたけど、怪我はないの？」

龍騎 「うん、ちよつと痛いけど野暮な鍛え方してないから大丈夫だ
よ、その証拠にほら何ともなつて n 「あつ!!」

彼女が驚いた声を出したので何事かと見ていると、僅かではあるが
出血していた。あの程度の攻撃で血が出るとは、俺もまだまだだ
な・・・

桃花 「ちよつと待つてて」

龍騎 「?」

傷を見るや否や彼女は持つていた学生カバンから消毒液とガーゼ
を取り出した。消毒液はともかくガーゼは普通持つてないのに準備
がいいなあ。

龍騎 「大丈夫だよ、これくらい睡つけとけば治るよ」

桃花 「駄目だよ、ちゃんと消毒しないと悪くなつちやうよ」

龍騎 「でも別 n 「駄目!!」・・・はい」

断ろうとした矢先に一喝を受けてしまつた。お淑やかそうに見え
るけど、意外と我はつよいんだなあ

その後、彼女は慣れた手つきで俺の腕の処置をしてくれた。途中近
くにいる彼女の甘い匂いにドキつとしたが、治療してもらつている手
前なので我慢しなくては、頑張れ俺

桃花 「これで良しつと」

そうこうしている内に腕の処置も終わり、近くにいた彼女も離れて
しまつた。少し名残惜しいのは内緒。

龍騎 「ありがとう、もう大分遅くなつてきちゃつたし送つていくよ」

桃花 「そんなんあわざわざ悪いよ」

龍騎 「いいよ、それにさつきの事もあるし」

桃花 「・・・じやあお願ひしようかな//」

龍騎「／＼＼＼・・・お、おう、じゃあ行こうか」

三度赤くなつた彼女の顔、やめてくれ、言い出したこつちが恥ずかしくなる。

その後の帰り道はお互い何とも言えない空氣の中、夕陽に照らされた自分の影を踏みながら帰路へとつく。

桃花「もうこの近くだから大丈夫だよ、送ってくれてありがとう！」夕陽も落ち、辺りに夜を告げる電気が各家につき始めた頃、彼女の家の近くにいたらしい。名残惜しいが仕方がない。

龍騎「わかった、傷の手当ありがとう、また学校で会えたらよろしく」

桃花「うんっ！今日は本当にありがとう！またね！」

そう言つて背中を向けた彼女であつたが、2歩3歩と進み4歩目で止まつてしまつた。

龍騎「？」

何だと思つた瞬間、彼女が再びこちらを振り向き近づいてきて俺の耳元で一言

桃花「あの時はカツコよかつたよ、次会う時は私は龍騎くんつて呼ぶから、龍騎くんも私の事は桃花つて呼んでね／＼＼」

今日一番の真っ赤な顔に染まつた彼女はそのまま一目散に駆け出していく。

2. 編入の時間

——桃花 side——

桃花「……はあ……」

賑やかな昼休みの教室にひつそりと響く少女のため息。

その声の持ち主は、何処か鬱屈な気分で窓から青い空を眺めていた。眩しすぎるぐらいの春の日差しが教室に灯された電灯の必要性を否定する。

普通なら天気がいい日は自ずと気分が高揚するものだが、悩める乙女の問題を解決させるには程遠い。

桃花「……龍騎くん、いま何してるだろう……」

私を悩ます問題の正体は先日、自分を助けてくれた彼にある。

あれ以来、何をするにも手に付かず、気がつけば彼の事で頭が一杯の毎日である。

桃花「……もう一度会いたいなあ」

同じ学校なんだから会いに行けばいいんじやねえ？

と思つたその貴方、事はそう簡単にはいかない。

確かに龍騎と桃花は同じ柵ヶ丘中学には所属しているものの、龍騎たちがいるA～D組と私たちE組とは一種のカースト制度とも言われる絶対的な上下関係がある。E組には成績不振あるいは素行不良の生徒が集められ、他のクラスの見せしめとされている。

自ずとE組以外の生徒たちの間には、E組には行きたくない、自分の下にはE組がいるから大丈夫というような考えが芽生えるのも自然といえば自然であろう。合理的と言えばそうだが、多感な中学生には少々荷が重すぎるだろう。特に蔑まれる側にとつては溜まつたものではない。集会や試験は本校舎で行われるが、E組に向けられるのは蔑みの言葉や罵詈雑言の嵐である。そんな中で彼に会いに行くのは難しいだろうし、彼に迷惑をかけたくない。

まさに、彼女は八方塞がり状態なのである。

桃花「……どうすればいいんだろう」

? 「どうしたの桃花ちゃん?」

そんな事を考えていた自分に声を掛けたのは仲のいいクラスメイトの倉橋陽菜乃だ。天真爛漫で動物大好きつ子でいつも私たちに元気をくれるムードメーカーだ。

桃花 「陽菜ちゃん・・・ううん、何でもないの」

本当は相談したいところだが、したところでどうこうなる話ではないため軽くはぐらかす。

陽菜乃「でも、最近ずっと元気がないよ。さつきの授業中も先生に当てられてるのに上の空だつたじやない」

桃花 「ちょっとと考え事してただけだよ、心配しないで」

友達には迷惑をかけたくない。そんな気持ちが優先してしまい、またまたはぐらかしてしまった。私ってほんと駄目だなあ。

陽菜乃「ううん・・・分かった!でも、本当に困ったのならいつでも言つて!桃花ちゃんの為なら一肌でも二肌でも三肌でも脱いじやうから!」

桃花 「いや、三肌まで脱いじやつたら皮膚無くなっちゃうよ笑」

陽菜ちゃんの言葉に少しだけ元気を貰えた私は笑顔で答えた。やつぱり陽菜ちゃんには頭が上がらないなあ

とはいえ、問題は解決した訳ではない。

何とかしてもう一度彼に会いたい。出来るなら同じクラスで同じ教室で同じ話をしたい。でもそれには私がE組を出るか、彼がE組に来るしかない。

しかし、私はとある事情で簡単にはここを出られない。となれば彼が・・・いや無いか。

現実的に難しい話だが、いまの少女にはそんな事は関係ない。

桃花(神様、もしいるのなら自分勝手な私の願いを叶えてください) 彼女は心の中で神様に祈つた。

神様の仮面を被つた作者(その願い、叶えて進ぜようぞ) キラーン

桃花 「何つ!? 今之声!」

陽菜乃「とつ桃花ちゃん!」

突然聞こえた声にビックリしてつい大きな声が出てしまつた。陽

菜乃を始め教室にいた何人かは何だ? 何だ? と驚いている。

周りには聞こえていないようだ。

陽菜乃「どうしたの突然大きな声出して?」

桃花「陽菜ちゃんいまの声聞こえ? いや、何でもないの」

陽菜乃「・・・桃花ちゃん、桃花ちゃんがどんなになつても私だけはずつと友達だからね」

さつきまで心配そうな目で見ていた陽菜ちゃんの目はなにやら悟りを開いたようにも思えた。

やめて、そんな目で見ないで!

でもさつきの声は絶対聞き間違いじゃない。

桃花「まさか本当に神様? ふふつなんてね♪」

そんな事を呟きながら少女は再び晴れ渡る春の空を眺めた。

——龍騎 side——

時を同じくしてここは柵ヶ丘本校舎。別校舎と同じくこちらも昼休み真っ只中である。勉学に励む学生やストレス社会で頑張る社会人にとつても昼休みはほんの僅かな細やかな憩いの時間である。

龍騎「・・・はある」

桃花の悩みの種である張本人もまた何処か鬱屈な気分で窓から青い空を眺めていた。実は龍騎も絶賛悩み中なのである。しかし、だからといって桃花と同じ悩みだとは限らない。

担任「声に出てるぞ神道! ちゃんと話を聞いているのか!!」

龍騎の現在の悩みの種はノビノビと昼休みを満喫していた所だったのに、職員室へ呼び出されたことにより台無しになつた事である。

龍騎「んつ? あはいはい、床に引っ付いたガムを取る方法でしあつけ? あれは氷を入れたビニール袋を引っ付いたガムに当てるところ着力が落ちて綺麗に取る」

担任「誰もそんな話しとらんわ! 高校生との喧嘩の事だらうが!!」

龍騎「ああそうでしたっけ？」

そうなのである。

龍騎がいま呼び出しを食らっているのは正に先日のヤンキーとの喧嘩の事である。

担任「まったく、お前は勉強はトップクラスだし、運動も出来る、なにすぐ他校の生徒とトラブルを起こす。そして決定打は先日の喧嘩の件だ。うちの中学校の生徒が喧嘩を起こしたと学校に連絡があった。」

んく騒ぎが大きくならないように軽めに（何処か？）終わらしたんだけどなあ

担任「とにかく、俺はこれ以上お前の面倒は見きれん。唐突だが明日からお前をE組に編入する事が職員会議で決まった。これで、漸く俺の目の上のたんこぶが取れるつてもんだ。だが、俺も鬼ではない。もしお前が深く反省し心を入れ替えるなら処分を考ええつ!?俺E組に行けるんですか!?」話を最後まで聞けっ!!

なにやら鬼やら反省やら言っていたが聞いてなかつたのではつとこう。正直のところ、今の本校舎の雰囲気は俺にはどうも合わない。あいつら弱者を痛めつけてそんなに楽しいか?

男に生まれたなら弱きを守り強きを倒せ！つて死んだ爺ちゃんがよく言つてたなあ。

つていうか、E組がどんな所か知らないけど、ここよりはマシだろ。んつ？先生が少し疲れているみたいだな。体調が悪いんなら早退した方がいいですよ。

担任「はあ・・・もういい、俺はお前に最後のチャンスを与えたつもりだが、俺の取り越し苦労だったようだな、これでお前のE組行きは確定だ！後で泣き寝入りしても遅いからな、出て行け！」

龍騎「はくい、んじやまあ失礼します♪」

やつと訪れた開放感からか龍騎は軽くステップを踏みながら職員室を出て行つた。

担任「・・・ガムの取り方にそんな方法が・・・今度やつてみよう」龍騎が出て行つた後、担任がそんな事を呟いていたのは知る由も無

い。

その後、自らの憩いの場としている屋上へと足を運び、ゆっくりと大の字になつて寝転がつた。

龍騎「E組かあ・・・思いがけずに行くことになつたなあ。・・・あの子は元気にしてるかな」

少女が再び空を眺めたのと時を同じくして少年もまた、そんな事を呟きながら晴れ渡る春の空を眺めた。

3. 鳥間の時間

——龍騎 side ——

E組に編入させると言われた日の放課後。

龍騎はいつもの通学路を朝とは逆方向に歩いていた。

龍騎「しかし、クラスの奴らも露骨すぎんだよなあ。俺がE組に落ちたと知った途端、誰も近付いて来やしない。それどころかこっちを見ながらヒソヒソ話しあがつて、言いたい事があるなら直接来いつてんだ」

龍騎は昼休み後のクラスメイトの反応にイライラしながら家路に着いた。クラスのそんな所も学校が気にいらない要因である。

（――龍騎自宅――）

話は変わるが、龍騎の家は学校から歩いて20分程の所にある高層マンションの一室である。

龍騎「ただいま、誰もいないけど」

龍騎はこのマンションで一人で暮らしている。と言つても天涯孤独と言う訳ではない。父親は龍騎が生まれてすぐに亡くなつたため、母親が女手ひとつで龍騎を育てた。

しかし、母親は会社を経営している身であるため、いつも一緒に居るというわけにもいかず、祖父の家で幼少期の大半を過ごした。その祖父も龍騎が中学に上がる頃に亡くなつたため、現在の家に引っ越して來た。

そんな中、母親の会社は順調過ぎる程成長し、今では海外にいくつかの拠点を構えるまでになつた。ところが、母親は根っからの現場主義であるため、社長であるにもかかわらず自ら海外拠点での手腕を遺憾なく發揮している。

そのため、日本と海外の各拠点を行つたり来たりする忙し過ぎる生

活を送っているため、事実上龍騎1人の家と化している。

龍騎「さてと、んじやあ夕食前にやつときますか」

元々2人で暮らすため購入した家のため、間取りは3LDKと1人で暮らすにはデカ過ぎるが、龍騎は使われていない一室を自らのトレーニングルームに改造し鍛錬に勤しんでいる。龍騎が着ていたシャツを脱ぐと、現れたのは中学生とは思えないほど発達した筋肉である。龍騎の格闘能力の高さを物語つている。

トレーニングルームには様々なトレーニング器具と共に【男は力なり】と大きく書かれた掛け軸が掛けられている。亡くなつた龍騎の祖父が書いたものである。

フツと視線をずらすと、その傍には小さな写真立てが1つ。まだあどけない表情をした笑顔の子どもが2人が写つっていた。

龍騎「・・・なあ・・・優香・・・俺はちょっとは強くなれたのかな・・・」

何処と無く寂しげで儂い声で呟いた龍騎。その問いに答える者は誰もいない・・・。

辺りはすっかり暗くなり、各家々では一家団欒で夕食を取つてゐるであろう頃に龍騎の一日のルートイーンのメインは終了する。

龍騎「今日は色々あつて疲れたし軽めに済ますか。」

そう言つてトレーニングルームを後にすると龍騎は風呂場に直行する。そして風呂に入つた後、自分の食事を済まし後片付けをする。これもまた龍騎のルートイーンの1つである。しかし、いつものルートイーンとは少し違う事が起ころる。

ピンポーン

唐突にインターフォンが家中に鳴り響いた。

こんな時間に誰だ？と思う龍騎は応対するため、インターフォンのTVモニターのスイッチを入れる。

龍騎「はい」

？「夜分遅くに失礼。此方は神道龍騎くんのお宅で間違い無いか。」モニターを除くと黒スーツに黒ネクタイ、そして鋭い目付きをした男が立っていた。ヤ○ザの若衆か何かか？

龍騎「はい」

鳥間「私は防衛省の鳥間という者だ。君が今度E組に編入するという情報を聞き話をしに来た」

龍騎「・・・はい？」

いやいやいやっ！確かにE組には編入するよ。するにはするけど、それで何で防衛省の人間が来てんの？E組って自衛隊の秘密基地でも置かれてるのか？

鳥間「ここでは詳しい話は出来ない。すまないが中で話したいから入れてくれないか」

龍騎「・・・はい」

ここでお引き取り願つても良かつたのだが、言われるがまま俺は家に招き入れた。つていうかさつきから「はい」しか言つてねえな俺。つていうか人間つて突拍子のない事が起こると無力になるもんだなあ。トイレで大○している時に急にドアを開けられたような感覚だ。

／＼＼＼龍騎自宅リビング／＼＼＼

龍騎「粗茶ですがどうぞ・・・」スツ

アポ無しで訪問してきたとはいえ、何も出さないのは俺のポリシーが許さない。お盆に乗せた湯呑みを男に差し出す。

鳥間「ああ、ありがとう」

龍騎「いえいえ、ところで鳥間さんでしたつて？防衛省の人が俺に何の用ですか？E組に編入したって話と何の関係があるんですか？」

鳥間「順を追つて説明していくが、その前に月の事件は知っているか？」

龍騎「ええまあ。知らない方がおかしいでしよう」

時は遡ること1ヶ月ほど前。地球から約38万キロ離れた月が突如として謎の爆発を起こし、その約7割が消滅した。

このニュースは世界を駆け巡り、様々な討論番組やSFバラエティなどで連日取り上げられている。

鳥間「実はその犯人がいま君が編入するE組の担任をしている」

龍騎「…What, s?」

はい？どういう事？月を破壊した犯人がE組の担任をしている？

鳥間「心中は察するが続けるぞ。そいつは月を破壊したように、さらには来年の3月には地球も同じく破壊すると言っている」

えつ？何？地球を破壊する？ドラゴン○ールの話？

鳥間「当然そんな事世界の首脳が許す訳もなく、そいつを倒す為にあらゆる術を講じたが、通常の兵器は効かない上にスピードは最高速度マツハ20。最新鋭戦闘機ですらそいつの影も捉える事が出来ない」

うん、やっぱりそうだ、ドラゴン○ールの話をしてるんだ。

よし、そうと決まれば適当に相手をしたところでお帰り頂こう。

鳥間「そしてこれはそいつの写真だ」

そういうと鳥間さんはスーツの懷から一枚の写真を取り出した。
さあどんなワクワクする奴が写つてんのかな？

龍騎「…なにこれ？」

そこに写っていたのはワクワクもカメカメもしないヌメヌメしそうな凡そ人間ではない黄色の生物。多数の触手を生やし黒のアカデミックドレスを着用していた。

龍騎「…えつとお、こいつは地球侵略に来たエイリ○ンかなんかですか？」

鳥間「すまないが、詳しい事は言えない。だがしかし、いま言つた

ことは紛れもない事実。このまま奴を放置すれば来年の3月には地球は滅びることとなる」

とても非現実的な話ではあるが、鳥間さんの目は真剣そのもの。とても嘘を言っているようには思えない。

鳥間「現在君を除いた26名のE組の生徒が奴を暗殺するため行動している。さつそく明日からクラスに合流して欲しい。因みに奴を殺した際の成功報酬は100億円だ」

龍騎「んっ？ いま鳥間さん、暗殺するため行動しているって言いましたよね？ こいつには通常の兵器は通じないんじゃなかつたでしょ？ それなのにどうやつて暗殺するんです？」

鳥間「それについては心配いらない」

そう言うと鳥間さんは脇に置いてあつたアタツシユケースから緑のナイフとエアガンとBB弾を取り出した。

鳥間「これは特殊な素材で出来ており、人間には無害だが奴には効果がある。現状では唯一の奴専用の武器と言える」

そう言われ触つてみると、確かにナイフはグニヤツと曲がり、BB弾も市販の物と大差ない。これなら人間には害は殆どないだろう。

龍騎「話は分かりました。ひよんなことからE組編入する事になりましたけど、是非協力させて貰います！」

俺だつて地球が壊れるのは嫌だし、まだまだやりたい事は沢山あるからな。それにこの鳥間さん。最初は立派な形したサイコ○スかと思つたけど信用できそうだ。

鳥間「その言葉を聞いて安心した。因みに俺もE組では先生として君たちのサポートに回る。出来うる限りのことはすると約束しよう」

龍騎「俺もその言葉を聞いて安心しましたよ。じゃあ明日からよろしくお願ひします、鳥間先生」

鳥間「ああ、こちらこそよろしく頼む。では俺はこれで失礼する。悪いが明日についてはもう一度事前に話しておきたいから早めに登校してくれ」

俺が了承すると鳥間先生は帰つていった。

龍騎（んつ？）E組の生徒が暗殺をしているつて事はもしかしてあの

子も・・・危ない事してなきやいいけど・・・）

そんな事を考えながら龍騎は睡眠の世界へと旅立つていった。

4・登校の時間

——桃花 s i d e ——

ピピピピピッパチツ・・・

桃花「ふああ・・・もう朝か」

部屋に鳴り響く無機質な音が少女を睡眠の世界から現実の世界へと呼び戻す。

街並みを彩った少女の名前にも入っている桃色を帯びた花びらは散り、季節は夏に引っ越すための準備を始めている。

とはいえ時刻は朝6時30分。まだまだ冬の厳しい寒さの名残りを微かに感じさせる。

桃花「ううん、昨日は良く寝れたなあ」

薄い桃色のコットン生地のパジャマに袖を通して両腕を大きく上へと突き上げる。上体を逸らした際に突き出た年齢にそぐわない2つの双丘がなんともe・・・いや、これ以上はやめておこう。

ところで、良く寝れたと呟いていたが、普段から不眠症の気があるという訳ではない。いや、むしろ快眠であった。あの出来事があるまでは・・・

桃花「なんでだろう。今日はとつても良いことが起こる気がするなあ♪」

何の根拠があつて?と疑問に思うかもしれないが、世の中根拠があるというだけでは説明がつかない事など山の様にあるだろう。

少女は朝食の準備が出来ているであろうリビングへ向けて部屋の扉を開いた。

——龍騎 side——

龍騎「ふああ・・・ねむ・・・」

桃花が朝食を取り終え身支度を整えていたそのころ、頭をポリポリと搔きながら龍騎は今日から通うこととなる旧校舎へと続く長い長い山道を登っていた。

龍騎「いくら登校初日だからって早すぎねえかなあ」

龍騎はそう文句を垂れる。

時計の短い針は7時を過ぎ、長い針がもうすぐ真下に達しようとしていた。日直以外の生徒は普通8時頃から登校するものだが、前日烏間先生より少し早めに登校するように指示されたため今に至る。

龍騎「にしても、あの人を疑ってる訳じやないけど、本当にあんな生き物いるのか？」

龍騎の疑問は最もである。

昨夜、烏間先生から見せられた写真に写つていた正真正銘の地球外生命体。地球以外に生物が存在しないとは思わないが、いざ見せられても信憑性に欠けるというものだ。

ドバシユーノ!!

龍騎「!?

そんな事を呟いていると突如として発生した突風と衝撃。龍騎は咄嗟に身構えるとそこに居たのは、

? 「ヌルフフフ。君が今日から編入してきた神道龍騎くんですね？」

目の前に居たのは写真に写つていたおんなじ黄色の地球外生命体だつた。・・・うん、烏間先生・・・ちょっとでも疑つた俺を許して。

? 「私は君の担任となる先生です。」

龍騎（地球外生命体が先生をやつているというのはどうやら本当らしいな。だって、自分でそう名乗つたもん）

そんな事を考えながらも龍騎は自己紹介をする。

龍騎「初めてまして、神道龍騎といいます。思いがけずE組に編入することになりましたが、よろしくお願ひします」

殺せんせー「ええ、こちらこそよろしくお願ひします。それから先

生の事は殺せんせーと呼んでください。生徒たちにもそう言われて
いますから」

そういうと触手をこちらに伸ばしてきたので、俺も右手を突き出し
グニユツと握手を交わす。つていうか握手の効果音がグニユツて…
それにしても殺せんせーねえ…。殺せない先生だから殺せん
せーつといったところか？中々面白いネーミングセンスだな。

龍騎「分かりました、殺せんせー。会つたついでに確認なんですか
ど、本当に殺していいんですね？」

一般的に考えれば、先生と生徒のものは思えない会話である。

殺せんせー「もちろんです！よく学び、よく遊び、よく殺す、これ
が私の先生としてのモットーです。卒業までに殺せるといいです
ねえヌルフフフ」

そういうと殺せんせーの顔は黄色と緑の縞模様へと変化した。

龍騎（なにこの顔・・・？）

作者（原作によると、このように顔が変化した時は相手を舐めきつ
ている時らしいですよ）

龍騎（なるほど、地球外生命体ならではの特性ということか。

・・・うん、なんかムカついてきた。つていうか原作つて何？）

龍騎「その言葉を聞いて安心しました。これで思う存分殺れそうで
す！」

殺せんせー「ヌルフフフ。正直で大いに結構です。では、立ち話も
なんですから君の学び舎となる場へ移動しましようか」

そういうと俺に背中を向けた殺せんせーが山道を登り始めた。俺
はその背中を追いかけるようにゆっくり歩き始めた。

～～～職員室～～～

ガラガラガラツ

決して綺麗とは言えない校舎の中を進み、古びた扉を開けるとそこには既に鳥間先生が座りながらパソコンとにらめっこをしていた。

龍騎 「おはようございます・・・鳥間先生」

鳥間 「ああおはよう。どうした? 元気が無さそうだが」

龍騎 「まあちよつと・・・」

殺せんせー「ヌルフフフ」

龍騎（また舐めた顔しやがつて・・・このタコが）

龍騎がこんな顔をしている理由を語るには時間を少々遡らなければならぬ。

殺せんせーとの初対面から校舎へと向かう途中、龍騎は自分に背中を向ける殺せんせーに攻撃を仕掛けた。といつても、対先生用の武器は手にしていない。つまるところ、龍騎にとつては只の軽い腕試しひつもありであった。

しかし、それを見透かしていたかのようにヌルリと避けた殺せんせーは、龍騎の背後に回ると彼の後頭部にあつた寝癖をヘアウォーターと櫛で直してしまった。それも一瞬で。黄色と緑の縞模様顔というオマケ付きで。

殺せんせー「ヌルフフフ」

龍騎（・・・）イラツ

バシユツ!!ガサガサツ!!

殺せんせー「つつ!?

ほんの軽い気持ちで攻撃を仕掛けたのだが、舐められた態度に気分を害した龍騎。背後にいた殺せんせーに放たれた後ろ回し蹴りが触手を捉える。龍騎に飛ばされた殺せんせーの触手の一部が傍に生い茂る草木に消えていく。

殺せんせー（触手が・・・しかし対先生用の武器は身につけてないはず・・・まさか！）

龍騎「ご明察」

と言うと龍騎が履いている靴の裏を殺せんせーに向けた。そこには対先生用ナイフをカットして貼り付けてあつた。

龍騎「本当はもうちよつとして殺せんせーが油断した頃を見計らつて使うつもりだつたんですけど、ちよつとムカついたんで。俺の方から手を出しといて何ですが・・・あんまり舐めてんじやねえぞ」

龍騎から放たれた悍ましい気配にさすがの殺せんせーの額にも一筋の汗が滴る。

殺せんせー（ヌルフフフ。やはりこの子はただの生徒じゃないようですね）

殺せんせーにも先程の余裕の表情が無くなり、龍騎もまたその表情を見届けると攻撃を再開する。この瞬間、朝日が木々の間から溢れる山道で狩る者と狩らせない者とに分かれれる。

その後も何度も触手に触れそうにはなるのだが、その度に殺せんせーは音速を超える速さで躲していく。

龍騎（マツハ20つていうのは伊達じやねえな・・・こころが潮時

か)

これ以上は時間の無駄か。そう悟った龍騎は攻撃をやめた。

殺せんせー「にゅや？ 龍騎くん、もうよろしいのですか？」

龍騎「ええ、殺せんせーの速さは大体分かりました。これだけでも

大きな成果ですよ」

そう言うと龍騎は地面に置いていた鞄を手に取り再び険しい山道を登り始めた。

殺せんせー（ヌルフフフ。彼がE組に来たのは正解だつたようです
ね）

殺せんせーもそんな事を考えながら足を再び動かし始める。

龍騎（・・・本気じやなかつたとはいえ、破壊出来たのが不意打ちの1本だけとは・・・俺はまだまだ弱い・・・）

時は戻り職員室へ

鳥間「まあ気にする必要はない。それに、そんな簡単に殺されてしまう我々防衛省の面目が丸潰れだからな」

一部始終を話し終えた龍騎に対し、鳥間は溜息をつきながらそう答えた。

龍騎（鳥間先生も色々と気苦労が多いんだろうなあ……なんか、すいません）

心の中で、謝罪する龍騎。

鳥間（しかし不意打ちとはいえ奴の触手を破壊することは……少し確かめる必要がありそうだな）

龍騎（・・・）

そんな話をしているとHRを知らせるチャイムが校舎に響き渡る。

殺せんせー「ニユヤ、もうこんな時間ですか。では龍騎くん。教室へ行きましょうか」

そう言うと出席簿を触手に持った殺せんせーは龍騎を促すように職員室を出ていく。龍騎もその後に続いた。

～～～E組教室手前～～～

殺せんせー「それでは後で呼びますのでここで待つていて下さい」

そういうと職員室と同じく古びた扉を開け中へと入つていった。

殺せんせー「おはようございます皆さん。それでは、出席を取つていきます。・・・赤羽くん・・・磯貝くん・・・」

殺せんせーはどこの学校のどこの教室でも見かける出席確認をしていく。

殺せんせー「・・・矢田さん」

桃花「はーい」

出席確認も終わりに近づいたであろう頃に、あの子の声が聞こえた。

龍騎（良かつた、元気そうだな）

龍騎はひとまず安心した。

殺せんせーへ・・・吉田くん・・・はい遅刻なしつと。素晴らしい！今日も遅刻ゼロで先生嬉しいです！

出席を取り終えて殺せんせーの機嫌の良い声が聞こえた。つていふか遅刻ゼロなだけでそんなに機嫌が良くなるものか？

殺せんせーへさて、今日は朝から皆さんにとても嬉しいお知らせがあります。それは、この教室に新しいクラスメイトが加わります！

殺せんせーが龍騎について話し始めた。何処となく緊張感が増す。殺せんせーへそれでは入ってきてください、どうぞ！

殺せんせーにそう呼ばれると龍騎はゆっくりとした動きで教室の扉に手を掛けた。

「E組教室」

ガラガラガラツ

扉を開け放つとズラッと揃った龍騎と同年代の男女。龍騎は教卓の前へと進みながら教室の奥から順に視線を流していく。

緑の髪をツーサイドアップにした少女

青い髪を独特な形で束ねている少年・・・少女？

金髪に青い目のどこからどう見てもギャル風の少女

黒いカーディガンを着た世の中全てを舐めきっているような顔の赤い髪の少年

順々と視線を流していくと、ある一点で視線が急ブレーキを踏んだ。

龍騎「あつ・・・」

桃花「嘘つ／＼／＼！？」

皆「？」

交差した2人の視線。ほんの数日前に交わらせているはずなのに、
その4つの瞳は何十年ぶりかに再会したかの様な驚きと喜びに満ち
ていた。

龍騎「・・・また会えたね」ニコツ

5. 再会の時間

——桃花 side ——

肌寒かつた春の朝も、1年中休む事なく働き続ける太陽が完全に姿を現わすと今の季節に相応しい心地よい暖かさが活動を始めた多くの人々を包み込む。

そしてそれは白い学校指定の鞄を肩に掛け、髪をボニー・テールに縛つた少女も例外ではない。

桃花 「ううん、今日もいい天気だなあ♪」

快晴というのは、活力にも似た力を人々に与えてくれるが、その中でもこの日の桃花の得た活力は他の追随を簡単には許さないだろう。

陽菜乃 「おっはー！桃花ちゃん」

桃花 「おはよう陽菜ちゃん♪」

何時もの通学路である山道を登つていると、後ろから桃花の親友である陽菜乃が後ろから声を掛けてきた。

陽菜乃 「どうしたの？ 何だか今日の桃花ちゃんテンションMAX！ って感じだよ？」

桃花 「えっ!? そ、 そうかなあ」

自分では自覚してなかつたけど、どうやら今の気分が顔に出ていたみたい。

ちよつぴり恥ずかしい

陽菜乃 「そうだよ、 昨日はあんなに元気が無かつたのに。 何か良い

事でもあつた?」

桃花「いや、そういう訳じゃないんだけどね」

確かに今の私はとても気分が良い。

でもなんで?って言われても説明が出来ないんだよなあ。

桃花「なんて言つたらいいのか分かんないんだけど、何だか今日は
とつても気分が良いの♪」

陽菜乃「ふうん、まあ元気が出たなら良かつたよ!やつぱり私は元
氣一杯の桃花ちゃんが好きだよ!」

本当に陽菜ちゃんは人の心をくすぐる事を言うのが上手いなあ。
あれを自然に出してるんだからもはや才能だよ。

? 「・・・」 ガシツ!! モミユモミユ・・・

桃花「キヤツ///?」

そんな事を考えていたら突然私の脇の間から両手がスッと姿を現
し、指を開いた手が私の胸を強く掴み、そして揉みしだく。

桃花「ちよつ・・・莉桜///?」

莉桜「ふつふつふつお姫様、本日もお変わりの無い見事なお手前で」

桃花が振り返るとそこに居たのはクラスのセクハラ女王こと中村
莉桜であつた。

朝から何とも羨ま・・・んんつ!けしからん光景である。

桃花「ちよつ・・・待つ・・・駄目・・・／＼＼＼

莉桜「おやあお姫様、機嫌が良いとやつぱり感度が良く n 「それ以上は言つちや駄目／＼＼＼!!」

莉桜が何やらとんでもない事を言いかけたので慌てて止める。
ふと周りを見ると岡島くんが目尻を垂らしながら鼻血を出してい
る。

何でこんなことに・・・

莉桜「おお怖い怖い、怒られる前に逃げよつ！」ダツ

そういうと莉緒はニヤニヤしながら校舎に向かって駆け出して
いった。

桃花「もおつ!! 莉緒〜〜〜つっつ!!」

桃花はセクハラ犯の後を追いかける。

陽菜乃「いやあ今日も平和だなあ、待つてよ桃花ちゃん♪」

陽菜乃はフフツと笑うと桃花の後を追いかける。

～～～E組教室～～～

結局教室まで追いかけるもセクハラ犯を確保するには至らなかつ

た桃花。

険しい山道を走つてきたせいかその身体にほんのりと汗が滴る。
そしてそれを再び下品な視線で見る岡島。
あつ片岡さんに殴られたようですね。
さすが凜として説教。

ガラガラガラツ

殺せんせー「おはようございます皆さん。それでは、出席を取つて
いきます」

H Rを告げるチャイムが鳴り終わつて数分後、殺せんせーが入つて
いた。

そして、いつものように出席確認を取つていく。

殺せんせー「はい遅刻なしつと。素晴らしい！今日も遅刻ゼロで先
生嬉しいです！」

と言ふと殺せんせーの顔は赤い朱色を帶びた丸のマークが浮かび
上がつた。

何度も見てるけどどんな仕組みなんだろう？

殺せんせー「さて、今日は朝から皆さんにとても嬉しいお知らせが
あります。それは、この教室に新しいクラスメイトが加わります」

桃花（まだ1学期も始まつて1ヶ月も経つてないのに転校生なん
て・・・もしかして彼が・・・いや、そんな訳ない、やっぱりどこか
変なんだ私・・・）

? 「?」

殺せんせーの言葉を聞いて驚いた様子を見せた後、明るくなり、そ
うかと思えば頭を抱える桃花。

側から見たら非常に忙しない光景である。

その様子を後ろの席で不思議そうに見る黒髪のストレートヘアの
少女。

殺せんせー「それでは入つてください、どうぞ」

ガラガラガラツ

スタッツスタッツスタッツ・・・

桃花（いけないいけない、私ったら。新しく来た転校生に対して顔
も見ずに頭を抱えてるなんて失礼よ。一旦彼の事は忘れて笑顔で迎
えてあげなくちゃ）

そう決心した桃花は気持ちを入れ替えて顔を上げる。しかし、その
決心は無駄に終わる。幸運な意味で。

龍騎「あつ・・・」

桃花「嘘つ///?」

つい数十秒前に否定した桃花の考えは突風の如く消え失せ、今はた
だ龍騎の爽やかな笑顔を見つめるばかりである。

——龍騎 s i d e ——

龍騎「また会えたね」

桃花「龍騎くん／＼／＼!?」

そう言うとあの子は教室中に響く声で俺の名前を呼ぶ。

その反応に皆が？マークを浮かべる。

そりやそうなるわな。

殺せんせー「おや？矢田さんは彼のお知り合いだったのですか？」

桃花「ふえっ！いや・・・なんていうかその・・・／＼／＼

ふと我に返つて恥ずかしくなったのか、顔を赤らめながらモジモジし始めた。

うん、やっぱり可愛い。

そして何かを察したのか赤髪と金髪が悪い顔をしている。心なし
か頭にはバイ〇ンマンみたいな角が・・・、気のせいかしら？

龍騎「あゝ実はこの前ヤンキーに絡まれてるその子を助けたことが
ありますね」

このままじやあ埒が明かないから、彼女の代わりに俺が殺せんせー
の質問に答える。

莉桜「ふくん、なるほどなるほどお。それで矢田ちゃんの機嫌が良
かつたのにも説明がつくねえ」

桃花「ううう・・・／＼／＼

そういうと金髪ギャルがあの子をニヤニヤ見ながら言う。
機嫌が良いって何のことだ？

そういうと周りからは、「ほんとなの桃花ちゃん?」とか、「見せつけてくれるねえ!」とか、「爆ぜろリア充があ!!」とか様々な声が上がった。

そしてハゲ頭の目からは血の涙が出ていた。つていうか血の涙つて本当に出るんだなあ・・・、
写○眼極めた人だけだと思つていたのに。

殺せんせー「ヌルフフフ。これは恋愛小説の新たな題材になりそうです」

隣を見ると殺せんせーが『生徒??メモ その①』と書かれた手帳をピンク色の顔になりながら何やらメモしていた。

うん、今度は何の顔なのかすぐに分かった。

今すぐぶつ飛ばしてやりたい。

殺せんせー「さあ皆さんも聞きたい事が山の様にあると思いますが、先ずは彼の自己紹介から始めましょう。質問はその後で」

そういえばまだ自己紹介してなかつたつけか。短時間で色々な事がありすぎて忘れてた。

龍騎「えーと、じゃあ自己紹介します。名前は神道龍騎といいます。昨日まで本校舎の生徒でしたが、色々あつて今日からE組に入ることになりましたんでよろしくお願ひします」

自己紹介を終えるとパチパチパチと拍手が教室内に響する。

殺せんせー「龍騎くんありがとうございます。では、お待ちかねの質問タイムに入りましょう」

陽菜乃「はいはーい」

殺せんせーが言い終わるとすぐ手を挙げたオレンジのソバージュボブのフワフワした雰囲気の女の子。

陽菜乃「私は倉橋陽菜乃って言いまーす、よろしく。龍騎くんは動物好き〜？」

一番最初の質問がそれかよ！小学生かつ！

龍騎「動物は好きだよ。その中でも俺は犬が好きかな」

陽菜乃「そうなんだ～私も犬だ～い好きだよ♪」

龍騎「へえ～じゃあ一緒だな」

何とも人懐っこそうな子だな。

そう思つているとあの子は俺を見ながら少しムツとしたように見えた。

? 「はい」

次に手を挙げたのは青い髪を独特な形で束ねている大人しそうな子であつた。
そうだ、この子に聞きたいことがあつたんだつた。

渚「僕は潮田渚つていいます。渚つて呼んでね。神道くんh 「男？女？」男だよっ!!」

俺が尋ねると食い気味に答えた。

それも超が付くぐらい。

それを見てニヤニヤと笑う赤髪と金髪のギャル。

渚「もう・・・じゃあ質問するよ。神道くんh 「はーい」 カルマくんつ!?僕の番なんだけど!?」

改めて質問しようとした渚を遮り赤髪が手を挙げた。

カルマ「赤羽業。カルマでいいよ。さつき色々あつてE組に来たつて言つてたけど何したの? 「僕の質問タイム終了!?!」

男女(渚)が何か叫んでいたが聞こえないフリをしよう。
にしてもE組に来た理由か。

あの子を傷つけたくないけどいずれ分かることだし仕方ない。

龍騎「よろしくカルマ。俺のところも龍騎つて呼んでくれ。E組に来た理由だけど、さつき言つたヤンキーとの一件が大きいかな。まあそれ以外に目を付けられる事が多かつたんだけど」

桃花「・・・」

そういうとあの子の顔は急に暗くなってしまった。
申し訳ないことしたなあ。

カルマ「ふーん、で、それでE組に落とされて後悔してんの?」
グイグイとくるなあこいつは。

もうちよつとデリカシーというものを学んだ方がいいぞお前。

龍騎「別に後悔はない。俺もあつちの校舎の奴らにはウンザリしていた所だし、第一困つている子を助けないでいる方が絶対に後悔する。だから俺はE組に落ちたとは思っていない。むしろ来れたことは俺にとつては喜びなんだと信じてる」

桃花「龍騎くん・・・／＼＼＼

先程まで暗い表情だったあの子は俺の言葉を聞いてパアツと明るい表情へと変わった。

うん、やっぱり君は明るい顔のほうが絶対良い。

莉桜「いやあ泣かせる事言うねえ。こりや早く行動しないと手遅れになるかもしれないなあ」チラッ

桃花「・・・／＼＼＼ウツムキ

殺せんせー「ヌルフフフ。まだまだ聞きたい事はあるとは思います
が残念ながら時間が来てしまいました。それでは皆さん！授業を始
めましょう！」

殺せんせーは質問タイムの終了を宣言し、新たに授業の開始を宣言
する。

メンバーを1人加え27人となつた暗殺教室が今日も始まる。

渚「あの・・・僕の質問・・・」
ドンマイ渚！

6：名前の時間

——龍騎 side ——

H R が終わり 1 時間目が開始するまでの僅かな時間。
龍騎の席の周りには男女問わず殺到していた。

因みに龍騎の席は何の因果か桃花の左隣である。

んつ？キノコディレクター？何の事やら・・・

岡島「てめえええ！編入そそうそイチヤイチヤしやがつてえええ！
そんなんにリア充が偉いのかああ！」

開口一番後ろの席のハゲ頭が俺に掴みかかってくる。
つていうか別にイチヤイチヤはしてねえだろ。
あつ背の高いぱつつん髪の女子に引きづられていった。
ナイス！

龍騎「えーと、何なんだあいつ？」

陽菜乃「岡島くんはほつといても大丈夫だよ♪」

ハゲ頭の名前を教えてくれたのはさつき俺に動物は好きかと尋ね
た天真爛漫そうな女の子。
えつと倉橋だつけ？

磯貝「まああれは気にしないでいいよ。あつ俺は磯貝悠馬。クラス
の学級委員をしてるから分からぬ事があれば何でも聞いてくれ。
因みに岡島を引きづつていったのが俺と同じ学級委員の片岡メグだ」

と俺の席の前に座つていた爽やかな男子。

龍騎「ああよろしく頼むよ。それと俺のことは龍騎でいいからな」

磯貝「わかつた！じゃあ俺の事も悠馬つて呼んでくれ」

良かつた、このクラスにもまともな奴が居てくれた。
とりあえずは安心だな。

すると、人を搔き分けてくる奴がいた。

前原「よつ！俺は前原陽斗つてんだ。なあなあ、んなことよりお前
と矢田つて付き合つてんのか？」

龍騎・桃花「!？」

そう言うのはオレンジ色の髪をしたチャラ男。

莉桜「あつ、それ聞こうと思つてたんだよねえ」

と聞いてくる金髪ギヤル。

面倒な奴が隣の席になつたもんだ。
さつきまでの安心した気分を返せ。

龍騎「いや、矢田と会つたのは一回だけで付き合つてはいない…
んつ？」

桃花「…」

俺は嘘偽りなく答えたつもりだが、ふと反対側を見るとあの子が
そっぽを向いている。

俺なにか悪いこと言つたか？

龍騎「どうした矢田？」

・・・おい矢d 「桃花・・・」

・・・えつ?」

俺の発言を遮るように自分の名前を言った。

桃花「この前別れる時に今度会うときは桃花って呼んで言つたのに・・・」

そう言うと潤んだ瞳で俺を見る。

龍騎（そういういえばそんなこと言つてたなあ。あの時は俺も恥ずかしくてよく覚えてないんだよなあ。でも言われた手前、応えないのは男が廃るつてもんだな）

龍騎「ああ分かつたよ・・・

とつ・・・桃花//ボソツ

自分で言つたのに恥ずかしがつてちや世話ないよなあ、まつたく。

桃花「・・・あつ・・・ありがとう

・・・龍騎くん//ボソツ

桃花はあの日最後に見た時と同じぐらい真っ赤に染まつた。
これが世に言うツンデレつてやつか?

前原「チクショー！黙つて聞いてりやこれだ！朝っぱらから甘つたるいもん見してんじやねえよお!!」

莉桜「これはお互い好きつてことでいいんじやない？」

という絶賛発狂中の前原とそれをニヤニヤしながら眺める中村。

龍騎「す、好きつて・・・俺は別に・・・／＼＼＼

カルマ「でもさあ口では否定しても顔は正直だよねえ。ねえ龍騎つて案外チョロい奴？」

ブチツ

カルマの一言が耳に入ると龍騎からそんな音が聞こえた気がする。

龍騎「・・・よろしい、ならば戦争だ」

そういうと龍騎はカルマに向かい合う。

カルマ「へえ、やつちやう？」

カルマもまた、顎を上げ見下すように龍騎に向かい合う。

殺せんせー「こおらつ皆さんっ!!授業開始のチャイムはとつくな鳴つているんです！早く座りなさいつつ!!」

俺が態勢を整え終わろうとした時、殺せんせーが顔を真っ赤にして怒っていた。

いつのまにかチャイムが鳴つてたみたいだな。

龍騎は止む無く態勢を解き席に着く。

授業開始前に一波乱が起きたものの、本日も授業の時間が始まる。

因みに龍騎の右隣の桃花が真っ赤だったのは言うまでもない。

桃花（わ、私つたら皆の前で何であんな事を・・・穴があつたら入りたいつ／＼＼＼!!）

＼＼＼授業中＼＼＼

先程までの喧騒が嘘のように静まり、教室内には殺せんせーの声と黒板に数式を書くチヨークの乾いた音だけが聞こえる。

そしてそれをシャーペンを手に生徒たちがノートに書き写していく。

く。

龍騎（1時間目は数学かあ・・・俺苦手なんだよなあ）

そう龍騎は思った。

本校舎でもトップクラスの学力を持つ龍騎。

勉強は苦手ではないが、強いて挙げるなら数学にだけ苦手意識を持っているが・・・。

龍騎（・・・にしても、めっちゃ分かりやすいなあ）

龍騎は殺せんせーの授業を聞きながら感心していた。

桐ヶ丘中学の歴史は決して古くはないものの、現理事長の指導の下、瞬く間には日本有数の進学校へと押し上げた。

その代償としてE組という制度が存在しているのだが・・・。

そのため、ここで教鞭を取る先生たちの授業レベルは高い。

しかし、殺せんせーのレベルは群を抜いていた。

殺せんせー（ヌルフフフ。数学に苦手意識を持つてているようですが、これなら安心できそうですね）

殺せんせーはそんなことを考えながらチョークを走らせる。

7. 英語の時間

——龍騎 s i d e ——
キーンコーンカーンコーン

授業は時間が長い。

誰しもが一度は感じる事ではある。

龍騎も例外ではなかつたが、本校舎の授業では経験出来ない有意義な授業に龍騎の体内時計はF1並みの早さで過ぎた。

殺せんせー「おや、もうこんな時間ですか。では、1時間目の授業を終了します」

そういうと殺せんせーは教卓に置いていた教科書を纏めて教室を出て行く。

桃花 「龍騎くん、殺せんせーの授業はどうだつた?」

授業前まで真っ赤に染まっていた桃花の顔も時間の流れが元の色味に戻す。

龍騎「ああ、正直言つてとても分かりやすかつた。ビックリしたよ」

桃花 「ふふつ、それは良かつた♪」

と微笑みかける桃花。

龍騎「にしても体育以外の全教科を殺せんせーが担当してゐるんだろう? 大変だなああのタコも」

鳥間が体育担当だと事前に聞いていた龍騎はそんな事を呟く。

桃花「あつ、龍騎くんは知らないんだ。実は英語は別の先生が担当してるんだよ！」

龍騎「別の先生？」

陽菜乃「そうそう！外国人の先生なんだけど英語以外にも色んな事を教えてくれるんだよお！」

俺が疑問をもつて言うと、倉橋が話に割つて入ってきた。

龍騎「へえ、本場の英語を学べるつて訳か」

陽菜乃「そう言う事♪」

確かに日本の英語授業といえば教科書に書いてある英文ばかりの大袈裟にいう死んでいる英語だからな。

生きた英語を聞けるんならそれも良い。

つていうかいま色んな事つて言つてたな、何だ？

龍騎がそう考えていると次の授業を知らせるチャイムが鳴り響く。先程まで立つて話していた生徒たちは急々と席に着く。

カルマ「ねえ龍騎」

龍騎「？」

皆が席に着く中、カルマが俺に近づいて来た。
そういえばさつきの続きがまだだつたな。

龍騎「なんだよ、さつきの続きをしに来たのか？」

龍騎はカルマに対し高圧的な態度をとる。

カルマ「ああ違う違う、変に時間が空いたからヤル気なくちやつた。だから、さつきのお詫びと暇つぶしに良い事教えてあげようと思つて」

どうやらカルマはヤル氣はないらしい。なんだ、話せば分かる奴じゃないか。

龍騎「実は俺もそうだつたんだ。ついカツとなつちましたよ、悪かつたな。んで、良いことつて？」

カルマ「ああ、それは……」

カルマは龍騎に耳打ちをする。

龍騎「……マジ？」

カルマ「マジマジ♪まあやつてみてよ♪」

そう言うとカルマは自分の席へと戻っていく。

ガラガラガラツ

龍騎とカルマの内緒話が終わつて数分後、教室の戸が開く。
そこに居たのは金髪にグラマラスなプロポーションかつハレンチ
な格好をした女教師であつた。

? 「Good morning. Every one!」

教室に入ると日本人なら誰でも意味を知つてゐる英語をパーフェクトな発音で言う。
つていうか教師であんな格好良いのか?

? 「今日も私の魅惑的な授業を始めるわよ。でもその前に、あんた
ね? 今日から編入してきた生徒っていうのは」

そういうところを見てきた。

龍騎「初めまして、神道龍騎と言います。よろしくお願ひします」

イリーナ「フツ、中々可愛いボウヤじやない。いいわ、歓迎してあげる。私はイリーナ・イエラヴィイッチ。私の事は尊敬の念を込めてイエラビイチお姉様と呼びな s 「わかりました、ビツ○先生」イエラヴィイチだつつてんだろつ!!」

俺がそう言うと口を逆立てキレるビツ○先生。

ビツ○「誰よつ!! コイツに余計な事吹き込んだのは!?」

カルマ「俺だよ、さつき始まる前に教えといた♪」

とヒラヒラと手を挙げるカルマ。

龍騎「ほんとにビツ○先生って言つたらキレたなあ。半信半疑だったが教えてくれてサンキューなカルマ♪」

とカルマに軽く敬礼する龍騎。
カルマと軽く手を挙げ答える。

それを見て笑う一同

ビツ○「てか何でさつきから私の名前がビツ○になつてんのよつ
!?」

今度は意味の分からない事でキレだすビツ○先生。
何言つてんだ?

不破「この小説の作者はR指定にしてないけど、卑猥な言葉だから
隠していた方がいいよ」

渚「何の話してるの?」

不破の発言に突つ込む渚。

ビツチ「キイ〜〜ツツ!!やつぱりアンタら嫌いよ!!」

トドメにキレるイリーナ。
哀れである。

んつ？急にビツ○からビツチに変わったなって？

答えは簡単。

一々ビツチって打つてから○を打つのが面倒くさくなってきたからである。

＼＼＼授業中＼＼＼

ビツチ「では木村。次の英文を発音してみなさい」

木村「はつ、はい」

しばらく騒いでいると鳥間先生から五月蠅いっ！と雷を落とされたため、今は普通通り授業が進んでいる。

いや、普通通りというには少し語弊があるだろう。

ビツチ「はい、全然駄目ね。前回言つたことが全く出来ていない。もう一度お仕置きが必要みたいね」ブチユツ

木村「うつ、うう／＼／＼

そう、この正真正銘のビツチ教師は生徒が間違うとお仕置きディープキスをしてくるのだ。

つていうかキス長くね？

そして何故だか間違えてもスルーされる岡島。

何でだあ!!と叫んでいるが自分の胸に手を当てて考えてくれ。

ビツチ「はい、じやあ神道。次の英文を話してみなさい」

初めて指名された俺。

・・・ええ、これを読むのか。

龍騎「Y o u a r e i n c r e d i b l e i n b e d.
(ベッドでの君はすごいよ)」

つていうか中学生になんつう文章読ましてんだ。

ビツチ「G o o d. 中々綺麗な発音じやない。じやあよく出来た
アンタにはご褒美をあげなきやね」ブチユツ

龍騎（いや、結局正解してもキスするんかい）

こうなつたら最早ただの淫○女である。

そして、その光景を見て桃花は青ざめた顔をする。

・・・赤くなつたり青くなつたり大変だねえ。

（～～～授業終わり～～～

龍騎「はあ、散々な目に合つた」

その後、2回指名された俺は2回ともビツチ先生の

ビツチ先生曰くご褒美
ディープキスの餌食となつた。

最後の時は、桃花は最早見てられなかつたみたいで机にうつ伏せになつていたな。

龍騎「桃花、大丈夫か？」

桃花「・・・大丈夫じゃない」

相変わらずうつ伏せになつてゐる桃花。

若干声も震えているような気が・・・どうしたもんか。

桃花「・・・龍騎くんはビツチ先生にキスされてどうだつた？」

と感想を聞いてくる桃花。

龍騎「どうつて言われても、別に好きでもない女にキスされても何とも思わねえよ」

桃花「・・・じやあもし好きな子だつたらどうだつた？」
随分とグイグイくるなあ。

そういうのはカルマと中村だけで十分なんだが・・・。

龍騎「まあ・・・素直に嬉しいんじやねえかな」

桃花「・・・そう／＼」

一言そう言うどうつ伏せ状態からチラツとこちらを見る桃花。

莉桜「あのおゝお取り込み中のこと悪いけど次の授業体育だよ」

とニヤニヤしながら言つてくる中村。こいつ絶対いつか締める。

龍騎 「お、おう。じゃあ着替えて行かねえとな／＼／＼

桃花 「そ、そうだね／＼／＼

俺たちはそそくさと体育の準備を始める。

つていうか心なしか教室の空気がさつきより生暖かく感じるのは
気のせいだろうか・・・うん、そういうことにしておこう。

8. 体育の時間

——龍騎 s i d e ——

＼＼＼旧校舎 校庭＼＼＼

教室での生暖かい空氣から抜け出し、今は体育の時間。

普通の体育はバスケやサッカーをするものだが、このE組の体育は少し、否、かなり違う。

鳥間「もつと重心を下げて素早く振り抜く！」

ゲキを飛ばす鳥間の目の前には対先生用ナイフを振る生徒たち。このクラスでは体育の時間までもが暗殺の為の訓練が行われている。

鳥間「よし、では次に模擬戦闘を行う。今から2人1組になつて俺に掛かつて來い」

待つてました！俺はナイフや銃よりも拳で戦う方が好きだからな♪
さて、誰と組もうかな？

桃花「ね、ねえ龍騎くん。もし良かつたらなんだけど・・・私と組まない？」

そう言つてきた桃花。

龍騎「うん、いいよ。俺も桃花を誘おうかと思つてた所だ」

桃花の顔がパアツと明るくなる。

鳥間「ただし、神道くん」

龍騎・桃花「?」

鳥間「君は特別に1人で掛かつて来てくれ」

龍騎「えつ!？」

桃花「(。 。 ツ。)」

鳥間先生が俺にそう伝えた。

・・・ああ、朝のアレはそういうことか。

龍騎「分かりました。という訳ですまないけど桃k・・・」

o r z →桃花

桃花はネット掲示板でよく見るアスキーアートになっていた。
つていうかどうやつてるの、あれ？

そんな事を考えながら俺は鳥間先生と対峙する。

鳥間「言つておくが俺は生徒に対して危害を加えることは出来ん。
よつて、俺は君の攻撃を防ぐだけになる」

龍騎「分かりました。あと、始まる前に鳥間先生にお願いがありま
す」

鳥間「何だ?」

龍騎「俺はナイフやら銃やらは性に合わないんで、拳と蹴りでいいんですが」

鳥間「何故だ？」

龍騎「鳥間先生、朝に話をしてた時にか考えていたでしよう? コイツの実力が知りたいとかそんな感じじゃないですか?」

鳥間「! · · · バレてないつもりだつたんだがな · · · いいだろう」

龍騎「感謝します」

鳥間の許可が下りると龍騎は手に持っていたナイフを投げ捨てる。お互い相手を睨み殺しそうに睨み構え合う。

· · · この人 · · · 強いな

5秒 · · ·

10秒 · · ·

15秒と時間が経つたところで · · · 、

シユツ！

先に仕掛けたのは龍騎であつた。

——桃花 side——

桃花「・・・何でこうなるの・・・」
と項垂れる桃花。

せつかく勇気を持つて誘つた想い人が目の前で連れ去られればそれも致したかない。

倉橋「大丈夫、桃花ちゃん？ 気持ちは分かるけど今は龍騎くんを応援しよう！」

桃花「陽菜ちゃん・・・うん、そうだね！」

気持ちを入れ替える桃花。

磯貝「しつかし烏間先生も酷だよなあ。いきなり1対1で戦わせるなんて」

前原「まつたくだよなあ。しかも龍騎の奴、ナイフを捨てやがったぞ。勝つ気あんのか？」

桃花「ふふっ♪」

そんな事を言つてる2人を見てちょっとだけ可笑しくなつちやつた。

中村「おやおや、矢田ちゃんは何か知つてるようですか？」

桃花「莉桜、ふふっ、見れば分かるよ♪」

莉桜「？」

みんな鳥間先生には勝てないつて思つてる。

でも私は違うよ。

頑張つて、龍騎くん。

莉桜の問いかに答えると桃花の瞳は再び龍騎に向く。

——龍騎 side ——
シユツ!!

鳥間「?」

一息で鳥間の懷に入ると、拳を鳥間の顔面目掛けて躊躇なく振る。

鳥間（速い！・・・だが）

ガシツ!!

鳥間も真正面から拳を受け止めた。

龍騎「まあ、そう簡単にはいかないか」

そう呟く間も龍騎の攻撃は続いているが、その全てが往なすか防ぐ
かされる。

龍騎はならばと、さうに踏み込んで逆の拳でフックを叩き込もうと
するが、その腕も外側から押し込まれて空振りに終わる。

空振った姿勢から振り回すように肘打ちを繰り出すものの、またも
や受け止められてしまう。

そこから力任せに押し込もうとしているようだが龍騎と鳥間の身
体は拮抗したまま動かない。

龍騎「さすが特殊部隊出身なだけありますね。
この連打を防がれたのは爺ちゃん以来ですよ」

鳥間「お褒めに預かり光榮だな。随分と慣らしているようだが、そ

れだけで勝てるほど本職は甘くないぞ」

と烏間先生が話している間に龍騎は空いていた右拳で無造作に殴り掛かる。

その腕ごと受け止められそうになつたところで防御を躱すようになんを畳み、振り下ろそうとした腕の遠心力を殺さずに後ろ回し蹴りを放つ。

龍騎の得意とする技の一つである。

しかし、龍騎の後ろ回し蹴りは烏間の上体を掠めるだけで難なく躱されている。

龍騎はここで一旦、烏間から距離を置く。

龍騎 「こりや本気でいった方が良さそうだな。・・・いくぞお!!」
烏間 「君の実力を見せてみろ・・・来いつ!!」

いつもはクールな烏間も本能が疼いたのか声を張り上げる。
龍騎の右拳が先生の顔面目掛けて打ち込まれる。

しかし、さつきとは違い、その右拳は烏間の顔の寸前で停止した。
その時、右手に塞がれた死角から左拳のアツパーが飛んでくる。
いわゆるフェイントというものである。

烏間は驚いたが、即座に上体を反らして躱す。

これも躱されるか

ほぼゼロ距離から不意打ちを躱した。

龍騎は直に戦い烏間の能力の高さに驚嘆した。

だが、ここまでだ！

鳥間「!」

左拳のアツパーを躱された龍騎は左拳の勢いを殺さないが如くバク転で左足蹴りを鳥間の顔面目掛けて叩き込む。

鳥間は腕をクロスさせ辛うじて防ぐが、先程のアツパーを避けた際に上体が反れていたため踏ん張りが利かず身体が宙に浮く。

その瞬間をバク転しながらも龍騎は見逃さなかつた。

身体を一回転させ両足が地面に着くと同時に鳥間に向けてエルボーの体勢で突つ込む。

ドダンッ！

流石の鳥間も宙についた状態ではどうする事も出来ず、その背を地面に叩きつける。

鳥間「くつ!!」

ビシッ!!

龍騎「勝負ありですね」

龍騎の右拳は鳥間の眉間の目前で止まつていた。

鳥間「…完敗だな。あの体勢から蹴りを放つとは思わなかつた。
…黙つて試そうとしたことは謝ろう。しかし、君の格闘センスには目を見張るものがあるのが分かつた」

龍騎「それはどうも。でも、鳥間先生も攻撃OKだつたら負けていたのは俺でしたよ？」

鳥間「ふつ、それはどうかな？いざれにしても俺を地面に着けさせたのは君が初めてだ。堂々と胸を張れ」

龍騎「うっす」

褒められてむず痒い気持ちになる龍騎。

模擬戦闘が終わると同時にクラスの皆んなが龍騎に労いの言葉をかける為に集う。

少し不完全燃焼だが・・・、ま、たまにはいいかな

龍騎はそんな事を考えながら少し微笑んだ

9. 旅立ちの時間

——龍騎 s i d e ——

鳥間先生に勝利を収めた龍騎。

そんな彼の元にクラスメイトたちが集まる。

前原「お前スッゲエなあ!!あの鳥間先生とやり合つて勝つちまうな
んて、ほんと何もんだ!?」

渚「本当だよ。絶対勝てないと思つてたのに凄いよ!」

倉橋「ねえー!最後に決めたバク転での蹴りなんかカツコ良かつた
よ♪」

俺に賞賛の言葉を掛ける皆。

龍騎「大したことじやないよ」

倉橋「またまたあー、謙遜しちやつてえ。ほらほら桃花ちゃんもな
んか言つてあげなよー」

桃花「ちよつ、陽菜ちゃん!?」

と、倉橋に背中をグイグイ押され俺の目の前にやつて来た桃花。

桃花「えつと、その、とてもカツコ良かつたよ龍騎くん!」

龍騎「おう、サンキュな」ニコツ

桃花「…//」

龍騎の笑顔に言葉が詰まる桃花。

岡島「j g J t, ch s m j t r d t g c @ g u k g t, a w @ g p
a d t g e m t a :」

全員 「「「Σ（。 Δ。 — —)」」

すると背後で岡島が理解不能な言葉を呟いている。
なにあれ、ザ○キ?

そんな岡島に俺も抗体を持つた皆も流石に引いている。
磯貝「ま、まあ岡島はとりあえず置いといて。
ともかく俺たちの仲間に心強い味方が出来たんだ。
これなら殺せんせーの暗殺だって夢じやないよ!」

話が変な方向に行きかけた所で磯貝が切り出す。
流石は学級委員! イケメンだ!

岡野「ねえねえ、神道はなにかやつてたの? あ、私は岡野ひなただ
よ」

と女子の中でも背の低いショートヘアの子が聞いていた。

龍騎「んつ? ああ、死んだ爺ちやんにちつちやい頃から鍛えられて
な。空手とか柔道とかテコンドー、あとカボエイラとかな。メチャメ
チヤ強いんだけどかなり破天荒な人だったな」

そう、龍騎の強さの年齢離れした強さの原点はここにある。

龍騎の祖父は名の通った武道家であり、その教えを請うため数多の
者が祖父の下に入門した。

しかし、余りにも行き過ぎたスバルタ指導に誰も3日持たずに逃げ
出す有様。

その魔の手？が孫である龍騎に届くのは必然とも言える。

前原「へえ、ちなみにどんな事やつてたんだ？」

前原にそう聞かれると龍騎は思い出すように視線を上に向ける。

龍騎「そうだなあ…、
谷に突き落とされたり、
夜のジャングルへ放り込まれたり、
風船に括り付けられて空へ飛ばされたりしたつけかな？
いやあ、あの時は死ぬかと思つたよ」

全員「「「どここの海軍中将っ!?」」

俺が昔話をしていると全員がツッコんできた。
海軍中将？誰の話してるんだ？

不破「成る程、じゃあゆくゆくはギア〇カンドや霸〇色の霸氣とか
を使つて〇岡や死〇と戦うわけですね？」

不破は何やらまたメタい発言をしているようだ。

作者（いいえ、今の所そのような予定はありませんよ）

全員「「「何だつ!? 今のは!?」」

全員が謎の声にツッコむ。

そうか…、お前達にも聞こえたか。

不破「それは著作権に配慮したとかそういう理由ですか？」

作者（いや、ただ単に絡ませるのが面倒くさいから）

全員「「そんな理由かいっ!!」「」

岡野「じゃあさ、何か使える技を教えてよ！」

技って言われてもなあ。

龍騎「んく…じゃあ暗殺には関係ないけど簡単に出来る護身術を教えるよ。前原、俺の手首を両手でしつかり掴んでくれ」

前原「えつ？あつ、ああ」グツ

俺がそう言うと前原は俺の右手首を掴んだ。

龍騎「おいおい、そんなもんか。力ねえなあ」

前原「うるせえ！ぐおお…」グググツ

龍騎「思いつ切り掴んだか？じゃあ…」

シユツ

前原「?」

龍騎の右手は力強く握っていた前原の両手からパチンコから放たれた玉のごとく弾かれた。

前原「はあ!?思いつ切り掴んでたのに簡単に離れちまつた」

驚く前原に対し龍騎は淡々と説明する。

龍騎 「両手抜きっていう技だ。

相手に掴まれた方とは逆の手で掴まれた手を握り、思いつきり相手の手の親指の方から自分の方へ引き抜く。手首を握られている時、相手の五指は親指だけが独立している。力の強い相手でも引き抜くの時の力を親指だけで制するのは難しい。

ま、力の弱い女の子向けの技だな。やつてみたい人?」

倉橋 「はいはーい♪」

俺がそう言うと倉橋が手を擧げる。

俺は倉橋の手首を両手で掴む。

倉橋 「えっと、逆の手で掴んで…よつと、出来たよ!」

少し手間取ったが、うまく出来たようだな。

龍騎 「中々筋が良いな倉橋は」

倉橋 「えへへ、ありがと♪」

桃花 「…ね、ねえ龍騎くん。私もやつてみたい」

それまで黙つて聞いてきた桃花は俺に言つてきた。

龍騎 「んつ?ああ、いいよ」グツ

俺は桃花の手首を両手で軽く握る。

桃花 「えーと、まず掴まれた手の逆の手で…」

フワツ

龍騎（つつ！やべつ！）ググツ

桃花が腕を引き抜くため近づいたその時、初めて会った後に傷の治療をして貰った時に嗅いだ甘い匂いが鼻腔を擦る。つい、桃花の手首を握る手に力が入る。

桃花「せーの、えい！うわっ！」

思いのほか力が強かつたため、桃花は引き抜いた際にバランスを崩し後ろへ倒れる。

龍騎「危ないっ！」

俺はとつさに前に出て、倒れる桃花の腕を引き寄せる。

ムニユ

龍騎「ふう危なかつた。悪い、桃花。つい力を入れ過ぎちまつた…」

…ムニユ？」

引き寄せるには余りにも相応しくない効果音に違和感を感じた龍騎。

音が鳴つた方に目をやると、龍騎の引き寄せた逆の手は桃花の双丘の片割れに添えられていた。

龍騎「…」

えつ？全く状況が読めん。

桃花「…」

ふと桃花の顔に目をやると、桃花も右に同じのようだ。

しかし、状況を頭が理解してくるとその顔は見る見る内に太陽のよう赤く染まる。

そして、俺も察した。

龍騎「……

今日モイイ天氣デスネ』

龍騎「ぶべがつ!!!」

桃花の渾身の右手フルスイングが俺の左頬を見事にジャストミートした。

心配そうに俺に駆け寄る渚と磯貝。

唚然とした表情の倉橋と岡野と片岡と不破。

ニヤニヤを通り越して悪魔の様な顔をしたカルマと中村。正気を失つたかのように血の涙を流す前原と岡島。

そして、顔を赤らめながら胸元を押さえている桃花であつた。。

拝啓母上様。

いかがお過ごしでしょうか。

僕は元気によっています。

先日、E組に編入することになったとお伝えしたかと思います。
最初はクラスのお友達と仲良くなれるかとても心配でしたが、皆ど
ても仲良くしてくれます。

色々と落ち込むこともあるけれど……、

僕、このクラスが好きです！

こうして、龍騎は闇の世界へと旅立つた。

10. 謝罪の時間

——龍騎 side——

「うつ…んつ…」

目を開けば見覚えの有る汚い木造の天井。

すくっと身体を起こすと龍騎の目の前にはベッドが自分が寝ていたものを含めて2床と薬などが入ったガラス張りの棚。

龍騎 「…保健室か…そうか…俺は桃花のビンタで」

徐々に頭が目を覚ますとビンタをされた事を思い出した。
まだ少し痛い。

だがそれよりももう一つ思い出した事がある。
と言うよりも忘れられないことがある。

龍騎はそつと自分の右手に目をやる。
右手に残る柔らかな感触の記憶。

龍騎 「ヤバいなあ…どうしよう」

謝るしかもちろん選択肢は無い訳だが、それで許されるかは桃花次第である。

岡野 〈まさかあんな事になるなんてねえ〉

龍騎 「！」

廊下から岡野の声が聞こえる。

倉橋 〈予想外だよね〉

桃花 〈…反省します…〉

しかも桃花と倉橋までいる。
保健室に向かつて来ているようだ。

龍騎（さあどうする？）

ガラガラガラツ

無情にも保健室の扉は開く。

◇ ◇

——桃花 side ——

桃花（…どうしよう…）

時間は少し遡つてここは校舎廊下。

桃花は岡野と陽菜乃と共に龍騎の寝ている保健室へと足を進める。龍騎がノックアウトされた後、騒ぎを嗅ぎつけた鳥間が駆けつけ、事情を説明すると、鳥間は苦い顔をしながら龍騎を抱えて校舎へ入つていった。

桃花（龍騎くん…怒つてるかな…）

不可抗力とはいえ龍騎に強烈な一発をお見舞いした桃花の顔はさえない。

岡野「まさかあんな事になるなんてねえ」

倉橋 「予想外だよね～」

謝りに行きたいと言う私を心配して付いて来てくれた陽菜ちゃん
とひなたちやん。

桃花 「…反省します」

岡野 「ま、まあわざ」とじやないんだし大丈夫だよ」

陽菜乃 「元はと言えば龍騎くんが悪いんだから気にしない方がいい
よ♪」

そんな事を話していると保健室の前に到着した。

倉橋 「龍騎くん、まだ寝てるかな？」

岡野 「さあね。でも鳥間先生に運ばれている時、白目向いていたか
ら死んでるんじゃない？」

桃花 「そんな事言わないでよ！」

ひなたの縁起でもない言葉に顔を青ざめる桃花。

岡野 「冗談だよ冗談、じゃあ入るよ」

ガラガラガラツ

桃花 (なんて謝ろう…)

◇ ◇

——龍騎・桃花 side——

龍騎・桃花「あつ…」

保健室の扉が開けられ、目が合う2人。

倉橋「あつ！ 龍騎くん気がついたんだ！」

龍騎「あ、ああついさつきな」

岡野「なんだ、てつきり死んだとと思ったのに」

龍騎「ああん」

ひなたの暴言に声を鳴らす龍騎

岡野「じょ冗談だつてば！だから桃花もそんな顔しないで！」

苦笑いするひなたの横では、桃花が冷たい目をしてひなたを見つめる。

その目は少なくとも友達に向けるものではなかつた。

龍騎（つて、岡野に威嚇してゐる場合じゃない、どうする）

桃花（つて、ひなたちやんに構つてる場合じゃない、どうしよう）

龍騎（謝つて許してもらえるか？）

桃花（叩いておいて許してくれるかな？）

龍騎（いや、でもここで下手な言い訳は逆効果だ…）

桃花（ううん、変に誤魔化すぐらいなら…）

龍騎・桃花（ここは素直に…）

龍騎・桃花「〔ゞ〕めんなさいつつ!!」

2人の心と言葉は綺麗にシンクロした。

倉橋・岡野（…私たちは何を見せられているんだ？）

ポカーンとする連れの2人。
なんだが哀れである。

——龍騎 s i d e ——

龍騎・桃花「〔ゞ〕めんなさいつつ!!」

俺と桃花の謝罪の基本となる言葉は見事に揃つた。

龍騎「えつ、なんで桃花が謝るの？悪いのは俺だし」

桃花「う、うん。でもいくらなんでも叩くのはやり過ぎだよ。それ

も気絶するくらい」

最初は俺が謝つて桃花の出方を伺おうと思つてたのにまさかの展開になつた。

龍騎 「それぐらいやられるのは当然だよ。だつて…その…」

桃花 「その…？…あつ！ほつ、ほんとに大丈夫だから//／＼

お互い次の言葉が続かない。

龍騎 （このままじや埒があかない。こうなりや…）

龍騎は何かを決心した様だ。

龍騎 「じやあお詫びをさせてくれ。何でもやるから」

桃花 「…え？」

これはある意味で賭けであつた。

何でもやると言つてしまつた以上、破る事は絶対に許されない。
さあどんな事でもいい。

言え!!

桃花 「…じやあ、今日一緒に帰る」

龍騎 「…ふえ？」

我ながら情けない声が出たと思う。

腹を切る覚悟で何でもするつて言つたのに…。

龍騎 「え、えーと、つまり学校が終わつたら2人で一緒に帰るつて事か？」

桃花 「今まで言わないので／＼＼＼!!それで帰つてくれるの!?くれないの!?」

珍しく大声を発する桃花。

龍騎 「そんな事ならお安い御用だ。じゃあ今日は一緒に帰ろうか」

桃花 「ふふつ、約束だよ♪じやあ約束の印に…」

龍騎 「?」

そう言うと桃花は手を突き出してきた。
しかし、その指は小指だけ立ててある。
これつてもしかして…、

桃花 「指切りげんまん…しょ?」

はい、正解でした。

恐らく日本で1番有名な約束方法。

嘘ついたら針千本飲まれるんだって、怖いなあ。

っていうかこの歳で指切りげんまんは流石に恥ずかしい。

龍騎「別にそんな事しなくても一緒に「さつき何でもやるって言ってなかつたつけ？」…ぐぬ」

自分で言ってしまった事である、やむを得ない。

俺は桃花と小指を引っ掛け合う。

桃花「ゆーびきーりげーんまん、うつそついたらはりせんばんのー
ます、ゆびきつた♪」

龍騎「…／＼／＼

桃花「ふふつ、じやあ約束だよ♪」

龍騎「…ふあい／＼／＼

倉橋・岡野（…本当に私たちは何を見せられているんだ？）

再びポカーンと見つめる連れの2人。

こうなると2人が哀れを通り越して不憫である。

11. 下校の時間

時刻は午後3時。

勤労に勤しむ人たちが1日の仕事の終わりに向けてラストスパートを掛けている頃、ここ3年E組の教室には一足早く1日の終わりを告げるチャイムが鳴る。

キーンコーンカーンコーン

殺せんせー「では、今日の授業は以上となります。明日も皆さん元気よく殺しましょう。

あと、先生はこれからイタリアのナポリで本場のピザを食べます。暗殺したい人が居たら呼んでください。では、ヌルフフフ」

そう言うと殺せんせーは不敵な笑い声をあげて西の空に向かって飛んで行つた。

前原「いいよなあ本場のピザ」

岡野「ねえー、たまには一緒に連れてつてくれないかなあ」

前原と岡野が羨ましそうにそう言う。

龍騎「でもさ、連れていくつていっても殺せんせーにしがみ付いてマツハ20で飛びたいか?」

前原・岡野「…………いや、やっぱいや」

帰り支度を整えながら言つた俺の一言に、一呼吸置いてから2人はそう言う。

そりや俺でも嫌だわ。

龍騎 「んじゃあ、俺も帰りますかねえ」

龍騎は帰り支度を終え席を立つた。

桃花 「龍騎くん」

龍騎 「んっ？桃花か、どうした？」

桃花 「どうしたじやなくて何か忘れてない？」

龍騎 「……忘レルワケ無イジヤナインデスカ」

完全に忘れていた。

今日一緒に帰る約束をしていたんだった。

そりや前話から10日も経過しているからな、忘れるのも仕方がない。

つていうか俺は何をメタい発言してるんだ。
不破じやあるまいし。

桃花 「言葉がカタカナになってるよ。
まあいいわ、じゃあ帰りましよう♪」

龍騎 「う、うん」

何とか誤魔化せた？みたいだな。

つていうかカタカナだつて何で分かるんだ？

そんな事を疑問に思いながら、龍騎たちは教室を出る。

中村 「おやおや、これはこれは面白い事になりそうな予感です
ねえ。つけちやう？」

渚「や、やめときなよ中村さん。2人に悪いよ」

中村「硬いこと言いなさんなつて。渚だつて2人がどんな話をするか気になるでしょ?」

渚「そ、そりや少しは……」

中村「んじゃ決定!興味のある人行くよ」

中村たちは2人の後を付けようと教室の扉を開けた。

ガラガラガラツ

中村「し、神道!?

しかし、そのゲスい考えは愚かだつたとすぐに気付かされる。なぜなら、そこには龍騎が居たからである。

龍騎「中村…何話してたかは知らないが、俺をつけようもんなら…」

分かつて^{殺す}るな?^ぞ」ニコツ

中村「つけません！絶対につけません！！」

龍騎の素敵な笑顔に中村は日本人の最大級の謝罪である土下座で許しを乞う。

龍騎「分かればよろしい。んじゃ行くか？桃花」

桃花「う、うん」

さすがの桃花も少し引いた様子だつた。

杉野「中村、あんまりアイツを舐めない方がいいと思うぞ」

中村「…肝に命じます」

中村の尾行作戦は開始直後に見事に失敗に終わつた。

◇ ◇

中村を一蹴した龍騎は現在桃花とともに下校している。

昼間、龍騎たちの頭の上から鬱陶しい程照らしていた太陽も、今は1日の活動を終えるべく西の空へ徐々に沈んでいつている。

龍騎「…でさ、朝に殺せんせーに攻撃したんだけど殆ど躲されてしまつたよ。あれは本当にチートだな」

俺は帰りながら今日の朝にあつた事を桃花に話している。

桃花「うん…」

しかし、話を聞いている桃花の顔はどこか冴えない。

龍騎「桃花？どうしたんだ、さつきから。浮かない顔だけど？」

疑問に思つた龍騎は桃花に問いかける。

桃花「…ゴメンね」

龍騎「？」

突然発せられた桃花の謝罪の言葉。

疑問に思う龍騎を他所に桃花は続ける。

桃花「私ね、あの日以来もう一度龍騎くんに会いたいってずっと思つてた。出来ることなら一緒のクラスになつて一緒に過ごしたいってずつとずつと思つてた。

そしたら今日、本当に龍騎くんがE組に来てくれて本当に嬉しかつた。

本当に本当に嬉しかつた。

……でも、龍騎くんがE組に来たのは私のせいなんだって考えると今まで自分勝手な事ばっかり考えてた自分が許せなくて、

……でもそんな気持ちとは別に、

もしあの時私があの人達に絡まれてなかつたら……
もしあの時絡まれているのが私じゃなかつたら……
もしあの時龍騎くんが私の前に現れなかつたら……

私が龍騎くんと出会う事は絶対に無かつた……

そんな事を考えると悲しくなつてきて……

ごめんね……

なんて言つたらいいのか分かんないよ」

桃花は身体を震わしながら、大きく綺麗な瞳から大粒の涙を流し始める。

龍騎「……」

スツ……

龍騎は自分の目の高さにある桃花の頭の上にそつと手を添える。

桃花「龍騎くん……」

龍騎「朝にも言つたろ。俺はE組に来た事に後悔はない、むしろ喜びだつて。

今日、E組に入つて友達も出来た。

まあ変な奴もいるが、それは俺の喜びだ。

烏丸先生と勝負して勝つた時、皆で俺の事を褒めてくれた。これも俺の喜びだ。

本当に嬉しかつた。

だからそんな顔するな。

悲しい顔は桃花には似合わない。

なんて言つたらいいのか分からんなら一言でいい……

ありがとうって」

桃花 「龍騎くん……ありがとう」

まだ桃花の瞳には涙の海が形成されているが、龍騎の感謝の言葉に桃花の顔に笑みが戻る。

笑顔を作るため目を細めた事により、涙の海が桃花の頬を伝つて襟首に落ちる。

龍騎 「どういたしまして」

龍騎は桃花の頭に乗せていた手で優しく撫てる。

一方その頃、龍騎の警告を無視して、2人の後をつけている複数の影が……

中村「しつしつし。神道に脅されはしたけどついてきて正解だつた

ねえ」

カルマ「ね、だからついていった方が面白いって言つたでしょ?」

中村「全くだよ。

あつ!今撮つた写真はいざという時の切り札に置いておこう♪」

カルマ「あ、それいいねえ賛成♪」

渚・茅野・杉野・磯貝・前原・片岡・倉橋・岡野(.....駄目だこい
つら)

12. テストの時間①

——龍騎 side——

五月晴れが続く今日この頃。

ここ柵ヶ丘中学校別校舎には他の学校と同じく、学生達にとつて避ける術のない、作者と同じく発狂してしまった時間が迫りつつあつた。

殺せんせー「さて、皆さん…始めましょうか！」

……いや、何を？

殺せんせーの言葉に目を点にする一同。
それもそのはず、目の前の殺せんせーは超高速で動き回り、分身の術の如く教室中に散らばっているからだ。

殺せんせーA 「学校の中間テストが迫ってきました」

殺せんせーB 「そうそう」

殺せんせーC 「そんな訳でこの時間は…」

殺せんせーABCDEF・・・（以下略）「高速強化テスト勉強を行います!!」

もはや、誰が喋っているのかも分からんな。
最近ますます速度が速くなつた殺せんせー。

一人一人にマンツーマンと言つていゝのか甚だ疑問だが、兎にも角にも一人一人の苦手科目が1文字書かれた鉢巻を着けて教えている。
因みに種類は国語6、数学9、社会3、英語4、ナ○ト1である。
んしても諸曰く、最初は4、5人が限界らしかつた分身が今ではクラス全員分まで増殖しているんだからなあ。
…この分身、攻撃すればどんなになるんだろう？

そう思つた龍騎は殺せんせーの顔面にナイフを突き出した。

ブニユツ

殺せんせーの顔は不可思議な効果音と共に三日月状に変化する。
わーおもしろなあ。

殺せんせー「ちよつ、龍騎くん!!急に攻撃しないで下さい！残像が
全部乱れるんです！！」
あと、授業中の暗殺は禁止です！！

やつぱりか、意外と纖細なんだなあ。

龍騎「ところで殺せんせー、こんなに分身作つて疲れないか？」

殺せんせーの苦言を他所に龍騎は尋ねた？

殺せんせー「その点はご心配なく。外で一休憩させてますから」

龍騎「それ逆に疲れないか？」

色々ツッコミたい点もあるが、1年後に地球を滅ぼすつて言つてゐ
からなあ、何にしても厄介なターゲットだ。

殺せんせー「それはさておき、ここまで理解できましたか、龍騎く
ん？」

龍騎「お陰様でね」

因みに龍騎に付いている殺せんせーの鉢巻には数学の文字が書い
てある。

龍騎の苦手な教科である。

殺せんせー「ヌルフフフ、それは良かつたです。君は数学を苦手としているようですが、理解力が低いという訳ではない。このまま応用を進めていけば、高得点も期待できますね」

テストを控えた俺達には心強い先生だな。

殺せんせー「どうですか、矢田さん？」

桃花 「ううん…」

ふと隣を見ると、桃花も俺同様に数学の対策勉強をしていた。
どうやら問題が難しく苦戦しているようだ。

龍騎 「どこだ？見せてみ」

桃花 「龍騎くん、ここなんだけど…」

俺がそう言うと桃花は苦戦している問題を俺に見せた。
正直、数学が苦手な俺が人を教える立場ではないんだが、内容によつては何とかなるかもしれない。

龍騎 「どれどれ…、ああ、円周角の問題か。
これは円に対する弧の長さが等しい場合、
この弧に対する円周角の大きさも等しくなる。
逆に円周角が等しい場合はその弧の長さも等しくなる。
という事は…」

桃花 「えっと…という事は…分かつた！出来たよ龍騎くん♪」

俺の助言で桃花の問題が解決出来たようだ。
良かつた。しかし、俺も少し曖昧な所があるからもう一回復習しつ
くか。

桃花 「ありがとう龍騎くん♪」

龍騎 「お安い御用ですよ……んつ？」

龍騎は何かの視線を感じその方向に目をやる。

殺せんせー「(○、△、○)」

見ると殺せんせーが顔をピンクに染めニマニマしている。
この野郎、こうなると分かつてワザと桃花に教えなかつたな…。

龍騎 「このタコオ!! 何ニマニマしながら見てんだあ!!」

殺せんせー「だあつ!? ちよつ、龍騎くん!? 授業中の暗殺は禁止だ
「やかましいわあ!!」

その後、テスト勉強の時間は少しの間中断となつたのは言うまでも
ない。

柄ヶ丘中学3年E組は今日も暗殺日和である。

↓↓↓放課後↓↓↓



龍騎「つたく、あのタコは勉強教えんのは上手いのに、下世話なんだよなあ…んつ、渚？」

龍騎は殺せんせーに文句を呴きながら帰ろうとすると、職員室の扉の前には渚がいた。

龍騎「渚？ 何してるんだ？」

渚「龍騎くん、あれ…」

と言い、渚は扉の隙間を指差した。

龍騎が指差した方を見ると、中には殺せんせー、烏間先生、ビッチ先生とあと一人龍騎が毛嫌いしている人物が居た。

龍騎「あれは理事長か…何でこんな事に…つていうかアイツは何してんだ？」

スラツとしたスーツを身につけ、椅子に座る如何にもエリートのような風格を漂わす男、この学校の理事長の浅野学真であつた。

設立から僅か10年足らずで樅ヶ丘を国内有数の進学校へ乗し上げた敏腕経営者として注目されている。

しかしその一方で、E組制度という差別的体制を作り上げ、E組の生徒達からすると目の上のたんこぶのような存在だ。

そんな理事長に殺せんせーは接待とばかりに、肩揉みやお茶を出している。

扉の隙間からでは声が良く聞こえないが、給料アップとか何やら言つてるな。

嘆かわしい…。

理事長「しかし、何とも悲しいお方ですね。世界を救う救世主となるつもりが、世界を滅ぼす巨悪と成り果ててしまうとは…」

救世主？巨悪？

確かに殺せんせーは何処で生まれ、何処から来たのか俺は知らないが、理事長は何か知っている口振りだな。
…これは何か有りそうだな。

理事長「この学園の長たる私が考えなくてはならないのは地球が来年以降も生き延びる場合、仮に貴方を誰かが殺せた場合の学校の未来です。

率直に言えばここE組はこのまま弱者でなくては困ります」

龍騎 「……」

龍騎は押し黙るように理事長の話を聞き続ける。

理事長「働き蟻の法則を知っていますか？どんな集団でも20%は怠け、20%は働き、60%は平均的になる法則。私の理想は5%の怠け者と、95%の働き者がいる世界です。

E組にはなりたくない、そう95%の生徒が思う事でこの理想的な比率は完成する」

：成る程、確かに実現すれば理想的な社会となるだろう。

理事長の考えも分からなくはないが、その5%に俺みたいに進んできた奴はともかく、本人の意思に関係なくカウントされてしまつた人間には堪らないだろうな。

理事長「先日、D組の担任から苦情が来まして、D組の生徒がE組の生徒から凄い目で睨まれて殺すぞと脅されたと」

龍騎 「おいおい、また随分と物騒な話だな、：渚？」

渚「（―――；）」

……お前だつたか。

でも渚はそんなこと言う奴ではないし、大方そのD組の奴が誇張して告げ口しやがつたな。

だから本校舎の奴らは…。

龍騎が内心イラついていると、話を終えた理事長が職員室を出ようと扉に向かつてくる。

いや、向かつてくるかに見えた。

理事長「殺せんせー、1秒以内に解いて下さい」

殺せんせー「ニユヤツ!?」

理事長の手から何かが投げられた。

知恵の輪？

（―――1秒経過―――）

殺せんせー「ニユヤツ、しょ、触手に絡まつ：j g a J m j m w t j
t p j t」

何してんだあのタコ!?

知恵の輪を解こうとした殺せんせーであつたが、与えられた時間は僅か1秒。

つていうか知恵の輪でそこまでなるか普通。

ガラガラガラツ

殺せんせーを情けなく見ていると、理事長が職員室から出て来た。

理事長「やあ、中間テスト期待しているよ、頑張りなさい。
それと神道くん…」

渚に対して乾いたエールを送ると今度は俺の方を見る。

理事長「君がE組行きになつたと聞いた時は残念に思つたよ。君は問題行動こそ多いが、我が校でも指折りの文武両道の生徒。将来は社会の勝者になり得る逸材と期待していたんだがね」

龍騎「お褒めに預かり光栄ですよ、理事長先生。

確かにアンタの考えはある意味では理想的だとは思います。

でもね、誰しもがアンタの考えに靡くと思つたら大間違いですよ。
少なくとも俺には弱い者を甚振つて楽しむ思考はないんでね。

…テメエの道はテメエで造つて歩く、ただそれだけですよ」

理事長「…理解し合えないのもまた人生というものが、
…E組でも君の考えが貫けるといいね」

理事長は渚同様乾いた笑顔を俺に向けると、そのまま立ち去つて行つた。

あの全てを見透かしたような態度が気に入らない。

渚「りゅ、龍騎くん。大丈夫なの、理事長先生にあんな態度とつて？」

龍騎「構やしないよ、理事長も俺が毛嫌いしているのはお見通しのはずだしな。

……弱者でなくては困る……か」

渚「どうしたの？」

龍騎「……いや何でもない、とりあえず帰ろうぜ」

渚「う、うん」

渚は龍騎がふと口にした”弱者”というワードに引っかかったが、

龍騎の表情を見て掘り下げるのはやめた。

13. テストの時間②

——龍騎 s i d e ——

翌日。

昨日に引き続き、高速強化テスト勉強が行われるかに思えたが…、

殺せんせー「おはようございます、皆さん」

殺せんせー A、多くて面白いから省略 B … 「今日は先生、さらに頑張つて増えてみました！」

いや、増えすぎだろつ！！

数が増えすぎたせいが、
残像ジャブオーバルスがかなり雑になつて来タ 勢揃い。つていうか、多すぎてうるせえ！

茅野「ど、どうしたの殺せんせー？なんか気合い入り過ぎじゃない？」

殺せんせー「そんな事ないですよ。これも皆さんがテストで良い点を取る為です」

……まあ、半分は本当で半分は嘘だな。

大方、昨日の理事長の言葉に触発されたつてことか。
つていうか俺も理事長の言葉で頭にきてるからな。
気合い入れてガンバらねえと。



「～～～授業終了～～～

殺せんせー「ゼエゼエゼエ…」

高速強化テスト勉強が終わつた後、相当疲れたのか教卓に茹でタコ^{殺せんせー}がもたれ掛かっていた。

つていうか今なら殺れそうか？

岡島「何でここまで一生懸命先生するかねえ」

殺せんせー「ヌルフフフ、全ては君達のテストの点を上げる為です。そうすれば……

先生の評判が上がり、噂を聞きつけた大学生^{巨乳の女子}が私に勉強を学びに来る！まさに先生には良いこと尽くめ!!」

：理事長に触発されたからだと思つてた俺が恥ずかしい。
今すぐ殺していいか？

三村「いや、勉強の方はそれなりで良いよな」

岡野「うん、何だつて暗殺すれば賞金百億だし」

中村「百億あれば、成績悪くてもその後の人生バラ色だしね」

殺せんせー「にゅや！そ、そういう考えをしますか！？」

岡島「俺たちエンドのE組だぜ、殺せんせー」

三村「テストなんかより、暗殺の方がよほど身近なチャンスなんだよ」

龍騎「……」

次々と出てくる後ろ向きな発言に龍騎は黙る。

殺せんせー「成る程、よく分かりました。今の君達には暗殺者としての資格はありませんね。

：全員校庭へ出なさい」

いつもの茶化した様子はなく、顔にバツ印をつけた殺せんせーが皆を校庭へと誘う。

＼＼＼旧校舎校庭＼＼＼

桃花「急に校庭に出るなんてどうしたんだろうね、龍騎くん？」

龍騎「……」

桃花「龍騎くん？」

龍騎「黙つて見てろ」

桃花「?…う、うん」

いつもとは違う龍騎の雰囲気に桃花に緊張感を増す。

殺せんせー「E組のシステムを上手い所は一応の救済措置が用意されている点だ。定期テストで50位以内に入り、尚且つ元担任からの許可が出ればE組からぬけだせる。

だが、元々成績最下位な上、劣悪な環境ではその条件をクリアするのは難しい。

そのため、殆どのE組の生徒が救済の手を掴もうとせず、差別を受け入れてしまう。」

そう、E組は入つたら最後抜け出せないアリ地獄と言うわけではなく、努力次第では本校舎復帰のチャンスがあるのだ。
にも関わらず、自らに定められた運命に抗おうともせず泣き寝入りを決め込んでしまう。

殺せんせー「イリーナ先生、貴方は仕事暗殺をする時、用意するプランは1つですか？」

龍騎達と一緒に話を聞いていたビッチ先生に問いかける。

ビッチ先生「…いいえ、本命のプランなんて思つた通りに行くことの方が少ないわ。不測の事態に備えて、予備のプランを綿密に作つておくのが暗殺の基本よ」

殺せんせー「では次に烏間先生、ナイフ術を生徒に教える時、重要なのは最初の一撃だけですか？」

烏間先生「…第1撃は勿論最重要だが、次の動きも大切だ。皆も体育の時間で俺と神道くんの戦闘を見たと思うが、第一撃は高確率で躲

される。強敵であればあるほどな。

次の第2、第3でいかに高精度で繰り出すかが勝敗を決める

殺せんせーの問いに2人ともその道のプロとして淡々と答える。

前原 「あのさあ結局何が言いたいんだよ？」

龍騎 「自分に自信が持てる武器を持ってつて事だろ？」

前原 「龍騎？」

殺せんせー「龍騎くんの言う通りです。対して君達はどうでしょう？」

暗殺があるから勉強は良い。

そう考えて劣等感の原因から目を背けているだけです。

もし、先生がこの教室から逃げたら、

もし、他の殺し屋に先生が暗殺されたら、

暗殺という拠り所を失った君達にはE組という劣等感しか残らない。

つまりどういう事だと思いますか龍騎くん？」

殺せんせーは校庭で高速回転しながら龍騎に問う。

龍騎 「…第2の刃を持たざる者は暗殺者の資格なし。
と言つた所か？」

殺せんせー「その通りです！さて、校庭に雑草や凸凹が多くつたので手入れしました」

高速回転を終え、砂嵐が収まると吹きさらしになつていた校庭が殺せんせーの手によつて何処の学校にもある立派な校庭へと生まれ変

わっていた。

殺せんせー「もし、君達が自信を持てる第2の刃を示さなければ、相手をする価値無しと判断し、校舎ごと平らにし先生は去ります」

この一言で漸く全員が今の状況を察した。

渚「第2の刃…いつまでに？」

全員の疑問を渚が代表し問う。

殺せんせー「決まっています…明日です。
明日の中間テスト、クラス全員50位以内を取りなさい。
皆さんの刃は既に先生がみがいてあります。自信を持つてその刃
を振るいなさい」

思いもしない期限に皆一様に動搖の色を隠せないでいる。

殺せんせー「それと龍騎くん。貴方は皆に何か言いたい事があるの
ではないですか？」

殺せんせーの言葉に皆の視線が俺に集まる。

龍騎「はあ、何でわかっちゃうのかね…」

正直、教室でお前らの発言を聞いた時はガッカリしたよ。
確かに人には得意不得意があるし、克服したくてもどうしても出来
ない事もあるだろう。

だが、だからといってそれは仕方ない事だと諦めて目を背けた…：

お前ら一度でもここから抜けたいと考えなかつたろ?」^{E組}

全員「!?

オレの言葉を聞いた瞬間、全員がバツが悪そうに俯く。

龍騎「そんな事だと思つたよ。さつき殺せんせーが言つたように俺達に考えられる最悪のケースが起きてしまつたらどうする?」

……何も残らなくなつちまうぞ?」

前原「で、でもよ、お前だつて数学が苦手なんだろ!?
それは逃げてると一緒じやねえのか!?」

全員黙りこくつていたが、前原が俺に切り出してきた。

龍騎「お前ちゃんと聞いてなかつたのか?
俺が言つたのは得意不得意があつても口を背けて良いのか?つて話だ。
少なくとも俺は数学は苦手だが、逃げたことは無い」

俺の反論に口を籠らす前原。

前原「で、でもよ、でもよ、お前も俺たちと同じE組だろ!?

俺たちに説教できる立場なのかよ!」

磯貝「お、おい前原! それぐらいにしとけ」

声を荒げる前原に対して、磯貝が間に入つて止めようとする。

前原「止めんじゃねえ磯貝! お前だつて言われっぱなしや腹の虫が收まらねえ! 「確かに」! ?」

前原の声を塞ぐように龍騎が静かに口を開く。

龍騎「確かに前の言う通り、同じE組である俺は皆を説教できる立場はない。言い過ぎたことは謝る。

では、お詫びにこうしよう。

俺は向本校舎こうでも、数学が足を引っ張つて学年5位以内に入った事がない。

そこで、殺せんせーは皆に50位以内を入れつて言つてたが、俺は3位以内を目指す」

皆「!?

龍騎の仰天発言に皆驚きを隠せない。

前原「さ、3位つて…、嘘じやねえだろうな?」

龍騎「一度口にした事は曲げない。」

だが、口約束だけじゃお前は納得しないだろ？
そこで、もし俺が3位以内に入る事が出来なければ…

俺はここを出退学するて行く

桃花「ちよつ、龍騎くん！？」

余りの展開に目を見開いた桃花が俺の顔を見る。

前原「…いいだろう、約束だからな！」

龍騎「という訳で殺せんせー、それでいいか？」

前原と約束を交わした俺は殺せんせーに判断を仰ぐ。

殺せんせー「…ここで口を挟めば、先生が悪者にされてしまいますね。

いいでしよう。ね、烏間先生？」

烏間先生「…はあ、念のため上政府には俺が話を通しておく」

龍騎「恐れ入ります」

龍騎は2人に深々と頭を下げる。

こうして、俺の進退を掛けた戦いが始まる事となつた。



グイツ

龍騎「？」

話にケリがつき、一同が教室へと戻ろうとしていた時、俺の袖を誰かが引っ張った。

龍騎「桃花か、どうした？」

桃花「馬鹿ツ!!!」

キ———ンツ？（。Д。）

すぐ側で呼ばれたため、龍騎の鼓膜が激しく振動する。

龍騎「何だよいきなり!? ビックリした」

桃花「ビックリしたのはこっちだよ！ 何であんな事言つたの!? もし3位以内に入らなかつたら龍騎くん、ここを出て行かなくちゃいけないんだよ！」

せつかく一緒のクラスになれたのに、また離れ離れになっちゃうん

だよ!?

それでもいいの!?」

そういう桃花は今にも泣きそうである。

龍騎 「何だよ桃花?俺が出て行くと思つていてるのか?」

桃花 「そ、そんな事思つてる訳ないでしょ!?」

龍騎 「じゃあ黙つて見とけ。大丈夫…」

龍騎は桃花の潤んだ瞳をジッと見つめる。

龍騎 「俺は負けねえよ」

桃花「……、やつ、約束だよ!約束破つたら末代まで恨んでやるんだから!」

龍騎 「なに恐ろしい事言つてんの、この子!?」

こうして、桃花とも約束?をした龍騎。

時は進み、いよいよ中間テスト本番の時は来た。

14. テストの時間③

～～～本校舎教室～～～
しばらく続いた晴天の空も今日は影を潜め、一面の曇天が空を覆う。

E組の生徒は集会とテストの時は本校舎で実施するのがルールだ。

コツコツコツコツコツ：

さつきから教室に鳴り響いているこの音の発信源は時計ではない。
試験官役の本校舎の教師が教卓を指で叩く音だ。

つていうかなんつう見下した顔してんだよ、感じ悪いな。

先生「E組だからってカンニングなんかするなよ」

挙げ句の果てには喋り出しやがった。

マズイなあ、お陰で集中できない奴がチラホラといるな。
こうなつたら…、

先生「ま、お前ら如きがカンニングした所で良い点が取れるわ k 「う
るさいですよ」！」

自分以外声を発する筈がない教室で低く響く声。
教師はその声の方向に目をやる。

龍騎「先生、今テスト中なんで少し静かにして貰えますか？」

先生「な、私語を慎め、失格にするぞ！」

自分の事を棚に上げてよく言うぜ。

龍騎 「そうですか、じゃあ失格になる前に……

テメエのその減らす口削ぎ落としてやろうか？」

俺はその教師に対し強烈な殺氣を放つ。

先生「!…ふん！」

俺の殺気にビビったのか漸く静かになる教師。

これでテストに集中出来る。

何てつたつて1発目に本命の数学だからな。

うしつ、この問題も楽勝♪

あのタコに解き方のコツを教えて貰っていたからな、お陰で時間を
節約出来る。

さて、次の問題はつと……

んつ？この問題……

次の瞬間、E組は背後から見えない問題に殴り殺された……。



数日後、旧校舎教室
鳥間先生「これは一体どういう事でしょう、テストの公正さを著しく欠くと感じましたが」

先生「おつかしいですねえ、ちゃんと通達した筈ですよお…」

結論から言うと、俺たちは嵌められた。

テスト2日前に出題範囲の大幅な変更、ましてやそれを通告しないなど常軌を逸している。

勿論、鳥間先生は抗議したが、アイツらが聞く耳を持つ訳が無い。しかも、出題範囲を変更した部分は理事長が自ら教鞭に立つたらしい。自分の理想を追求する為にここまで出来るのかあの男は…。為すすべもなかつた皆の顔色はすぐれない。

殺せんせー「先生の責任です…、この学校の仕組みを甘く見すぎていたようです。君達に顔向けできません」

殺せんせーの一言で教室の雰囲気がより一層暗くなつた。

シユツ

殺せんせー「にゅや！」

しかし、その暗さを断ち切るが如く、一本のナイフが先生に向かつて飛んで行つた

カルマ「顔向け出来なかつたら俺が殺しに行くのも見えないよお？」

ナイフが飛んで来た方向からはテスト用紙を持ったカルマが殺せんせーに近づいて行つてゐる。

殺せんせー「カルマくん!! 先生はいま落ち込んで（パサツ）…にゅ!?」

教卓に乱雑に置かれる答案用紙。

カルマ「俺、問題変わつても関係ないし」

国語	98点
数学	100点
英語	98点
理科	98点
社会	99点
合計	493点
学年	4位

磯貝「うお!? スゲエ…」

片岡「数学100点だつて…」

いつのまにか教卓の周りにはほぼ皆が集まつていた。

カルマ「アンタが余計な所まで教えてくれたから、問題が変わつて

も対処出来たんだよ。

ま、ていつも俺よりも凄い奴はいるんだけどね」

カルマが右斜め後ろに座る俺を見ると、自然と皆の目線が俺に集まる。

磯貝「龍騎！お前はどうだつたんだ？」

俺は黙つて席を立ち、答案用紙を持って教卓の前に向かつて歩く。

龍騎「……本当は1位取るつもりだつたんだけどな」

パサツ

国語	100点
数学	97点
英語	99点
理科	99点
社会	100点
合計	495点
学年	2位

磯貝「国語と社会で100点!?」

片岡「オマケに苦手つて言つていた数学で97点。信じられない」

龍騎「カルマと同様に殺せんせーが先の方まで教えてくれたからだよ。

それに、こんな妨害事もあるんじやないかと思つて苦手の数学に関しては他教科よりも遙かに時間を掛けて勉強した」

前原「……」

龍騎「だけど、俺はこのE組を出て行く気はない」

カルマ「俺も同じく。んで、どうすんの？全員50位以内に入んな
かつたつて言い訳つけてここから尻尾巻いて逃げちゃう？
それって殺されんのが怖いだけなんじやないの？」

俺がE組に残る胸を伝えると、カルマが殺せんせーを煽り始めた。
全くコイツは…、
でも悪くない。

すると、それに触発されたのか皆が殺せんせーを煽り始める。
磯貝や片岡まで加わる。

殺せんせー「にゅやー、逃げるわけではありません！
期末テストであいつらに倍返しでリベンジです！」

相当頭にきたのか顔を真っ赤にして殺せんせーが宣言する。
つていうか、倍返しつて古つ。

全員「〔ハハハハツ〕」

殺せんせー「笑う所じやないでしょ、まつたく」

さつきまでお葬式のようだつた教室は一瞬にして笑顔が戻つた。
やつぱりE組はこうでないと。

前原「……なあ龍騎」

明るい雰囲気の中、前原が気まずそうに俺に話しかける。

前原「その、この前の事悪かったよ。ついカツとなつて言い過ぎちゃ
まつた。俺はお前をE組から追い出そうとしてしまつた。
何で謝つたらいいのか…」

龍騎「前原…」

トンツ

龍騎は前原の胸に拳を当てる。

龍騎「あの時、お前が俺にあんな事言つたのはE組の皆を馬鹿にさ
れて腹が立つての事なんだろう？」

なんで腹が立つたと思う？

それは、お前の心が強いって事だよ。

友達を馬鹿にされて怒らない奴は弱い奴だ。

お前は強い心を持つてるつて証なんだよ。胸を張れ前原」

前原「龍騎…、なんだが元気が出てきたよ！」

サンキューな龍騎！」

龍騎「おう！」

俺と前原は拳をガツシリと合わせる。

桃花「ふふつ、良かつたね前原くん。これで解決ね♪」

前原「まあな、なあなあところでよ龍騎。

実は放課後、合コンやるんだがお前もこねえか？」

桃花「……マエハラクン？」

前原の”合コン”というワードが耳に入ると桃花の背後から何やら禍々しいオーラが現れる。

龍騎「生憎だが、そういうのには興味がないんでね」

前原「そうかあ残念だなあ。実は女の子の中に実家が空手道場をやっている子がいて『詳しく話を聞きたい』切り替え早つ!?」

空手道場の娘に悪い奴はいない。
ぜひ話を聞いてみたいものだ。

桃花「リュウキクン?」ゴゴゴゴツ

龍騎・前原「(。 。 ; ;)」

さつきまでの禍々しいオーラがはつきりと見えた。

うん…、あれは金剛〇土像パイセンだ。

その後、前原が龍騎を今後合コンに誘わない事、
そして龍騎が合コンに行かない事を誓うと、

漸くパイセンは姿を消し、桃花に素敵な笑顔が戻ったとさ。

15. 修学旅行の時間①

——桃花 side——
——とある街の夜——

桃花 「楽しかったね♪」

龍騎 「そうだな」

修学旅行初めての夜。

ホテルの一室では若い男女が話に興じていた。

龍騎 「それに、桃花が同じ班にいてくれたから」

桃花 「え？」

唐突にそう言われ桃花が驚くと、龍騎はそつと桃花の肩を引き寄せる。

桃花 「龍騎くん…」

龍騎 「桃花…俺、本当はお前のことばずつと…」

その先を言い淀む龍騎。

すると桃花はそつと龍騎の身体に手を回す。

桃花 「うん。私も同じ気持ちだから…ずっと…」

龍騎 「桃花…」

そして二人の顔が近づく…

ピピピピピピピッ：

桃花「はつ!?」

事はなく桃花は目を覚ます。

けたたましく鳴る目覚まし時計を止めると、ガツクリと頃垂れる。

桃花「何で…あと30…いや、10秒あれば…」

寝起き早々凹む桃花。

しかし、ふと先程の夢を思い出す。

あのまま日覚めてなければ多分、いや絶対、私は龍騎くんと…、

桃花「…………」

ベッドの上で枕に顔を埋めながらしばらく身悶える。

桃花母〈桃花〉、何してるの？ 遅刻するわよ？

下の階からお母さんが私を呼ぶ声がする。

桃花「はつ!? ヤバイ、遅刻する!!」

慌てて制服に着替える桃花はある決意を固める。

とにかく、あれを夢で終わらせたくない。

…そう、どんな手を使つても……

最後に何やらヤバい言葉が聞こえたのはさておき、身支度を忙しなく整えた桃花は自宅の扉を開ける。

◇ ◇

——龍騎 s i d e ——

↙↙↙E組教室↙↙↙

磯貝「龍騎、班は決めたか？」

龍騎「班？」

登校したばかりの俺に磯貝が話しかける。

茅野「忘れたの？来週の修学旅行よ！」

龍騎「ああ、なるほど」

E組への編入やら中間テストやらで忘れていたが、中学生活でも一番の思い出となるであろう修学旅行が迫っていた。

殺せんせー「まったく、3年生も始まつたばかりのこの時期に修学旅行とは先生…

あんまり気乗りがしません」

龍騎「ノリノリじやねえか！」

興味無さげな発言をする殺せんせーを見ると、白粉やら、着物やら、唐傘やらと色々と破茶滅茶なことになつっていた。

殺せんせー「バレましたか。正直君達との旅行が楽しみで仕方がないのです」

そういうと照れくさそうに触手で頬をかく。

磯貝「ま、そういう事だから決まつたら俺に教えてくれ」

龍騎「ああ、分かつたよ」

修学旅行があ、確かに行き先は京都だつけ？
にしても班か……どつか空いてる所有るかな？

龍騎「前原、お前のトコに入ってくれねえか？」

前原「勿論いいぜ！って言いたい所だけど、俺の班はもう人数が一
杯なんだ。すまんな」

龍騎「そとか、そいつは残念」

さてと、前原の班が駄目ならどこにしようかな？

渚「ねえ龍騎くん。入る所が無いんならウチの班に来ない？」

俺が悩んでいると渚が班に誘ってくれた。

龍騎 「渚か、そつちの班には誰が居るんだ？」

渚 「えっとね、僕の他にはカルマくん、杉野、茅野、奥田さんに神崎さんだよ」

奥田や神崎とは喋った事はないけど、カルマや渚が居るのか。つても、班が決まってないから贅沢も言つてられないな。

龍騎 「そうちか、じゃあ入れてくれるか？」

渚 「もちろん大歓迎だよ！じゃあ磯貝くんに伝えてきて「待つて!!」矢田さん？」

大声がした方を見ると、走つて来たのか息を切らした桃花が膝に手を付いていた。

龍騎 「どうしたんだ？」

桃花 「ハア…ハア…龍騎くん…私の班に来て！」

龍騎 「…はい？」



——桃花 side——

時はほんの少しばかり遡り、ここは旧校舎へと続く山道。時刻は8時を少し過ぎていた。時間も時間だけに周りには桃花以外誰もいない。

桃花 「遅刻するかと思つたけど、これなら大丈夫ね」

家を出るのが遅れたが桃花であつたが、今のペースなら何とか間に合いそうだ。

作者（本当に大丈夫でしようか？）

桃花 「えつ？」

突如として聞こえた謎の声。

しかも、聞いた覚えのある声だつた。

桃花 「あなたはあの時の…、一体だれなの？」

作者（私の事など今はどうでもいいじゃないですか。

それよりもんびりしてて大丈夫ですか？どうやら今、教室では修学旅行で龍騎くんが渚くんの班に入る事が決まりそうですよ）

桃花 「!?、それを早く言つてよ馬鹿っ!!」

罵倒の言葉を浴びせた桃花は険しい山道を一気に駆け上がりついく。

作者（：解せぬ、

…でも悪くない）



桃花 「待つて!!」

渚 「矢田さん？」

猛ダッシュで山道を駆け上がってきた甲斐あって、間に合ったようだ。

良かつた、ギリギリセーフ。

龍騎 「どうしたんだ？」

顔をキヨトンとしながら桃花を見る龍騎と渚。

そんな龍騎と渚に息を切らしながら近付く桃花。

桃花 「ハア…ハア…龍騎くん…私の班に来て！」

龍騎 「…はい？」

桃花の誘いに疑問を呈する龍騎。

渚「でも、矢田さんは前原くんの班でしょ？もう人数が一杯なんじゃないの？」

確かに1班7人までと決まっている。

いま私の班は、磯貝くん、前原くん、木村くん、メグ、陽菜ちゃん、ひなちゃん、そして私の7人だ。

でも、ここで折れてしまつてはあの夢が幻に終わってしまう。
それだけは何としても避けたい。

桃花「そうなんだけど、そんなに難しく考えなくていいんじゃないかな？たかが修学旅行なんだし♪」

渚「でもそれじゃあ他の班に悪いんじや「渚……」！」

渚の背すじを冷たい何かが通り過ぎる。

桃花「お願ひ……龍騎くんを……

チヨウダイ」

渚「どうぞつつづ!!」

渚は蒼ざめた顔をして龍騎を差し出す。

桃花 「ありがと渚♪じやあよろしくね龍騎くん♪」

龍騎 「…はい」

余りの迫力に流石の龍騎もたじろぐ。

桃花 「皆もいいよね？」

1班の皆さん 「…はい」

この時、E組の全員が悟つた。

龍騎の事で桃花を怒らせてはならないと…。



——龍騎 side ——

朝の騒動も一段落?し今は体育の時間。

俺たちは烏間先生を囲むように地べたに座つてゐる。

鳥間先生「知つての通り、来週から京都2泊3日の修学旅行だ。君らの楽しみを極力邪魔したくはないが、これも任務だ」

岡野「てことはあつちでも暗殺?」

鳥間先生「その通りだ。京都の街は学校とは段違いに広く複雑。しかも、君達は巡るコースを班ごとに決め奴はそれに付き合う予定だ。

既に国はプロのスナイパーを手配した。

成功した場合、貢献に応じて賞金が分配される、暗殺向けのコース選びをよろしく頼む」

鳥間先生の話が終わると、俺や桃花を含めた1班の面々は暗殺に向けた相談を始める。

前原「じゃあさ、殺せんせーを油断させた所でスナイパーに狙撃させて、焦つたアツツを龍騎がトドメ刺すつてのは?」

倉橋「あつそれいいねえ♪賛成♪」

前原の意見に一同は賛同の意を示す。

ガラガラガラツ

そうしていると、教室に殺せんせーが入ってきた。
つていうか何持つてんだ。

磯貝「何ですかそれ?」

殺せんせー「修学旅行のしおりです」

バババツ

殺せんせーは一瞬のうちに全員に配り終わる。
つていうか重つ！

殺せんせー「イラスト解説の全観光スポット、お土産人気100選、
旅の護身術の基礎から応用まで、昨日徹夜で作りました。

初回特典は組み立て紙工作金閣寺です」

岡島「どんだけテンション上がつてんだよ!?」

龍騎「中々乙な特典だな」

岡島「何でお前はもう作つてんだよ、早過ぎだろ！」

殺せんせーがしおりの説明をしている間に俺は金閣寺を作り上げ
た。

しかし、よく出来てるなあ。

龍騎「それはさておき、さつきの案だが止めといた方がいい」

桃花「何で?」

俺が反対した事で桃花が反応する。

龍騎「皆知つての通り、京都は狭く入り組んだ道が多い。
その分、観光客がごつた返している。

只でさえ國家機密なのにそんな所で俺と殺せんせーが暴れたらどうなると思う?」

全員「……うん、止めといた方がいいな（ね）」

こうして極力騒ぎにならない術を練り直す。
そして時は過ぎ…、



～～～修学旅行当日 東京駅～～～
修学旅行のスタートは東京駅で新幹線を乗る所から始まる。
しかし、ここでも本校舎とE組との差が露呈する。
本校舎の生徒はグリーン席なのに對し、俺たちE組は自由席である。

さらに京都での宿泊先も本校舎の生徒はホテルの個室なのに對し、
俺たちは旅館の大部屋らしい。
ま、俺としてはこっちの方が修学旅行っぽくて良いけどな。

ビツチ先生「どうきげんよう生徒たち」

するとビツチ先生がハリウッドセレブばりの格好で現れた。
つていうかなんつう格好してんだあのビツチ。

ビツチ先生「フフツ、女の駆使する暗殺者としては当然の心得。
良い女は旅ファッショニこそ気を遣うのよ」

桃花「ふむふむ」

ビツチ先生が持論を説いていると、桃花は興味津々にメモを取る。
つていうか桃花、俺が言うのも何だが中学生には早過ぎると思うぞ。

鳥間先生「目立ち過ぎだ、着替えろ。どう見ても引率の先生の格好ではない」

ビッチ先生「堅いこと言ってんじやないわよ鳥間、ガキどもに大人の旅n「脱げ、着替えろ」うつ…」

※しばらくお待ちください……

ビッチ先生「うつうつ…」

先ほどのハリウッドセレブは何処へやら。
ビッチ先生はダサい寝巻?に着替えていた。
ザマアねえな。



（新幹線車内）

磯貝「じゃあ、あそこでこうして…」

東京駅を出発して俺たちは磯貝を中心に作戦の綿密な打ち合わせに入っていた。

因みに俺たちと言つたが、前原と倉橋と岡野は中村達と人生ゲームに興じているぞ。

他の皆もそれぞれ思い思いの時間を過ごしている。

杉田「あれ？電車出発したけど、殺せんせーは？」

龍騎「あそこあそこ」

俺は窓の方を指差す。

全員「「「うお!?」」

殺せんせー「ヌギギ⋮」

殺せんせーは窓の外で新幹線にしがみ付いていた。

渚「何で窓にしがみ付いてるんだよ殺せんせー！」

殺せんせー「いやあ、駅ナカスイーツを買っていたら乗り遅れまして。このまま次の駅まで一緒に行きます。

ああご心配なく。保護色にしていますから外からは服と荷物が張り付いているようにしか見えません」

それはそれで不自然だろ。



そして次の駅で殺せんせーは中に入ってきた。

殺せんせー「いやあ疲れました。目立たないように旅行するのも大変ですねえ」

コイツ本当に國家機密の自覚あるのか？

つていうか荷物多過ぎだろ、エベレスト登るとしてももう少し減らすぞ。

龍騎 「ま、アホはほつといて打ち合わせの続きをしようか？」
殺せんせー

桃花 「賛成♪♪」

殺せんせー「龍騎くん!? いまさらつとアホって言いました!? 殺せんせーと書いてアホって言いましたよね!？」

アホが何か言つてるが無視しよう。

俺たちを乗せた新幹線は京都に向けてレールをただひたすら真っ直ぐ進む。



。。。京都 E組宿泊先。。。京都

京都に到着した俺たちはそのまま宿泊する旅館に到着した。
つていうか旅館の名前が『くたびれ旅館』つて…。
やる気あるのかこの旅館？

殺せんせー「むにゅ～～～～」

変な声を出している主は現在ソファの上で絶賛酔い潰れている。
そんな殺せんせーを磯貝、片岡、岡野はナイフで攻撃しながら心配
の声を掛ける。

力オスだな。

茅野「どう？ 神崎さん？」

神崎「ううん、確かに鞄に入れたはずなんだけど…」

龍騎「どうしたんだ？」

何かを探している2人に声を掛ける。

神崎「修学旅行の日程表を纏めた手帳を無くしちゃって…」

龍騎「そりやまた旅行早々ついてないな」

殺せんせー「神崎さんは真面目ですからねえ、独自に日程を纏めて
いたとは感心です。

でもご安心を、先生の手作りしおりを持てば全て安心」

それ持つて歩きたくねえから纏めてんだよ。

たが、その時は予想だにしなかつた……
翌日、まさかあんな事が起きるなんて。

16. 修学旅行の時間②

——龍騎 side——

翌朝、俺たち1班は兼ねてからの予定通り嵐山に足を運んでいた。

前原 「にしても、なんか変な修学旅行になつちまったくな」

倉橋 「確かにね♪」

片岡 「でもこれも暗殺のため。私達で絶対に決めよう！」

全員 「「おう（うん）！」」

片岡のゲキで気合いを入れる。

俺たちの暗殺場所となるのは、嵯峨野トロッコ列車の名所の1つ、保津川橋梁。

殺せんせー「おお！窓がないからすごい迫力ですね。これだけ開放的なら酔いませんし、しかし時速25kmとは速いですねえ」

俺たちは先程合流した殺せんせーと共にトロッコに乗っている。つていうかマツハ20が何言つてんだ。

キキ——ツ

トロッコの車輪が軋み音をあげながら動きを止める。

車掌さん「鉄橋の上で少しの間停車します」

予定通りトロッコは橋の上で停車する。

倉橋「あつ！見て見て殺せんせー、川下りしてるよ♪」

殺せんせー「どれどれ

いいぞ、倉橋。

上手く殺せんせーを窓際に誘導した。

条件は整つた…。

さあ……やれ！
殺せ

バキュー——ンツ

ほのぼのとした風景には似つかわしくない銃撃音が谷に響く。

俺たちの作戦はこうだ。

まず殺せんせーを風光明媚なスポットへ誘引し、油断した所で鳥間先生が手配したスナイパーが狙撃するというものだ。正直言うと直々に暗殺したかつたが、周りには多くの観光客がいる。無理は言えないだろう。

さて、どうだ…？

モチュツ……

全員 ((いや、何でだあーーーっ!!!))

高速回転するライフル弾をモチモチ柔らかい八つ橋で止めていた。どんだけ早技が必要だと思つてんだ。

殺せんせー「おつと八つ橋に小骨が、危ない事もありますねえ」八つ橋に骨があるなんて聞いた事ねえよ！
はあ…。

まあある程度予想はしていたが、こうもアッサリ失敗すると流石に凹むな。

◇◇◇

トロツコ列車下車後

殺せんせー「では、先生はこれで。この後2班がいる映画村に向かいます。ヌルフフフ」

そう言い残し殺せんせーは飛んで行つた。

磯貝「結局失敗があ、かなり作戦を練つたから結構凹むな」皆一様に落胆の表情を浮かべる。

龍騎「…まあ過ぎたことはしようがない。暗殺の方は他の奴らに任

せて、俺たちは修学旅行を楽しもうぜ」

前原「そうだな！んじゃあ俺は早速、京都のチャンネエをナンパでもしに行くかな♪」

岡野「ふんっ!!」

バキッ!!

前原「ふんぎや!!」

前原のキャラ男発言にイラついたのか岡野が見事な回し蹴りを食らわす。

前原よヽ、事前に注意喚起されていたはずだぞ。

※詳しくは13話後書きをご覧ください。

岡野「さ、バカ前原はほつといて行こう♪」

全員（前原除く）「「おおーーー!!」」

こうして俺たちは普通の修学旅行生と同じく京都観光に繰り出した。

◇◇◇

——桃花 side——

——京都嵐山——

倉橋「んくつ、やつぱり京都は選り取りみどりだね♪」

磯貝「だな、何て言うか心が洗われる気分だよ」

いま1班は京都の世界遺産の1つ、嵯峨嵐山の天龍寺の境内にいる。

足利尊氏を開基とし、夢窓疎石を開山として1339年に開かれ、特に境内の曹源池庭園は国内随一の風景を誇り、訪れる人々の心を癒す。

桃花「修学旅行で京都つてベタだと思つたけど、来て本当に良かつ

たよ♪」

桃花は美しい風景を見ながら言う。

倉橋「ええ、でも桃花ちゃん。良かつたのは本当にそれだけ?」

桃花「陽菜ちゃん、それだけってどういう意味?」

片岡「だって桃花、神道くんと一緒に班になれた方が良かつたんじゃないの?」

桃花「メ、メグ!?//」

片岡からの図星発言に顔を真っ赤にする桃花。

磯貝¹「そうだよ。龍騎が渚の班に入りかけた時なんか鬼気迫る勢いでこつちに引き込んだじゃないか」

岡野「だよね、ねえ桃花は神道に告白しないの?」

桃花「ひ、ひなた!?//」

前原「何ビックリしてんだよ? 龍騎の事好きなんだろ? 見てたら誰にでも分かるぜ」

桃花「こ、告白……む、無理無理絶対無理だよ!!//」

片岡「何言つてんのよアンタは。皆そのつもりで神道くんを班に入れたのに、まさか何もしないって事ないわよね?」

桃花「う、うゆ…」

もはや退路も塞がれてしまった。

倉橋「そ、うだよく、ねえどうなの桃花ちゃん?」

確かに龍騎くんを班に誘つたのはそんな気持ちがあつたから。※正確には奪つた

そんな下心のある女に思われたくない。

でも…メグ達の話を聞いていた内に気持ちが抑えられなくなつちやつた。

だつたら答えはただ一つ…

桃花「分かった! ジャあ今日この後k「何が分かつたんだ?」ぴやつ^{!?}」

桃花が決心の言葉を口にする前に龍騎が話に割り込んでいる。

ここまで読んでいた読者の皆さんから察しているとは思うが、今まで流れに龍騎は居なかつた。

トイレに行つていたのだ。

龍騎「なんつう声出してんだよ。

んで、何が分かつたんだ？」

話を全く聞いていない龍騎には桃花の言葉の意味が分からない。

桃花「えっと、その、あつ！お、お手洗いの場所が分からなかつたんだけど、それが分かつたんだよ！」

全員（龍騎除く）（（ヘタレがつ!!））

桃花の誤魔化しに龍騎を除く全員が心の中で同じ言葉を口にする。

龍騎「なんだそだつたのか、じやあ行つて来いよ」

桃花「う、うん。じやあ行つてくる！」

桃花はそそくさとその場を後にする。

倉橋「あ、待つてよ桃花ちゃん！私も行く！」

その後を倉橋が後に続く。

前原「な、なあ龍騎。今の話は無かつた事にしてくれ」

龍騎「今のは？」

儀貝「い、いやいや何でもない！何でもないんだよ!!」

そう言い両手を横に振りながら何かを誤魔化す儀貝。

その横では前原が片岡と岡野にボコボコにしばかれている。

何だが知らんが、今日一日で大変だなあお前も。前原



——龍騎 side ——

どれぐらい経つんだろうか…。

境内の大方丈の軒下に座り景色を愛でていた人々の顔触れもすっかり様変わりしていた。

儀貝「…なあ、幾ら何でも遅すぎないかあの2人？」

片岡「確かにそうね。ちょっと見てくる」

岡野「あつメグ、私も行くよ」

片岡がそう言い立ち上がると、岡野もその後に続いた。

確かトイレに行くつて言つてたな。

幾ら観光客が多くて混んでいるとは言え、ここまで遅いものか。

：嫌な予感がする。

片岡「ね、ねえあの2人、何処にも居ないよ！」

龍騎「!」

血相を変えて片岡と岡野が戻ってくる。

前原「どつかで道に迷つてんじやないのか？」

岡野「それはないよ。ここからトイレまで迷い込むような道はないし」

確かに俺もトイレに行つていたけど、迷うような場所は何処にもなかつた。

とすると…、

龍騎「何かあつたかも知れないな…探そう」

磯貝「そうだな、良し！皆手分けして探すぞ！」

磯貝の指示で各々四散する。

◇◇◇

龍騎「くそつ！何処にもいない。一体何処へ行つたんだ？」

龍騎の嫌な予感がいよいよ現実味を帯びてきたその時、

？〈やつぱり警察に言つた方がいいんじゃない？〉

龍騎「！」

何処からか聞こえた観光客らしい2人組の話し声を龍騎は聞き逃さなかつた。

龍騎「すいません、いま警察つて言つてましたけど何かあつたんですか？」

観光客「んつ？君はあの子らと同じ学校の生徒さん？」

龍騎「あの子ら！？詳しく教えて下さい!!」

観光客「あ、ああ。さつき君と同じ制服着た女の子2人が、ガラの悪そうな高校生に連れて行かれたよ」

龍騎「高校生…」

龍騎の予感は遂に現実となつてしまつた。

2人は攫われてしまつたのだ。

儀貝 「龍騎！見つかつたか？」

2人を探すため離れていた儀貝が合流する。

龍騎 「…儀貝、お前は他の皆を連れてすぐ旅館に戻れ。そしてこの事を先生に連絡しろ。事情はそこの2人に聞いてくれ」

それだけ言い残し龍騎は足早に立ち去ろうとする。

儀貝 「お、おい待て龍騎、何処へ行く!?」

立ち去ろうとした龍騎はスッと立ち止まり、顔だけを儀貝に向ける。

龍騎 「決まつてんだろ……

ふざけた奴らに特大のお灸を据えに行くんだよ」

儀貝 「!」

龍騎の怒りを露わにした表情を見て背筋を凍らす儀貝。

駆け出していつた龍騎の背中はあつという間に見えなくなつた。



——桃花 side ——

謎の高校生に連れて行かれた私と陽菜ちゃんは古びた倉庫に入れられていた。

身体はロープで縛られ身動きが出来ない。

倉橋 「うつ…うつ…」

桃花 「泣かないで陽菜ちゃん。きっと大丈夫だから」

いつもは明るい陽菜ちゃんもこの時ばかりは大粒の涙を流し泣いている。

桃花 「でもまさか、2人も連れ去られていたとはね」

茅野「ほんとビツクリしたよ。ね、神崎さん？」

神崎「うん」

私たち2人が倉庫に着くと、既にそこには4班のカエデちゃんと神崎さんが居た。

話を聞くと、2人も連れ去られたらしい。

? 「お友達との感動の再会中悪いが邪魔するぜ」

全員「「!?」」

声のする方を見るとガラの悪そうなオールバックの高校生が立っていた。

手下「リュウキ、連れには招集かけといたぜ」

リュウキ「ご苦労、さてお前ら、今からここに俺のダチが来る。でもその前に…」

神崎「?」

リュウキと呼ばれる高校生が神崎さんの方に目をやる。

リュウキ「どつかで見た事あると思ったんだが…、これ、お前だろ？」

そう言つて見せた携帯の画面には、髪の茶髪に染め、派手な格好をした女の子が写つていた。

……えっ！これが神崎さん！？

リュウキ「めぼしい女は報告するように言つててよ、そん時は拉致ようと思つてたんだが見失つちまつたつてわけ」

茅野「こ、これ本当に神崎さんなの？」

信じられないのかカエデちゃんが神崎さんに聞く。

神崎「…うちは父が厳しくてね。良い学歴、良い肩書きばかり求めてくるの。

そんな肩書き生活から離れたくて、名門の制服も脱ぎたくて、知っている人がいない場所で格好も変えて遊んでたの。

遊んだ結果、得た肩書きがエンドのE組。

自分の居場所がわからくなっちゃった。ほんとバカだよね」

桃花「神崎さん…」

暗い顔をしながら話す神崎さんに何て声を掛けたらいいのか分か

らない。

リュウキ「泣かせる話じやねえか。でも俺には解るぜ。」

エリートぶつてる奴ほどどーかで台無しになりたがつてるんだ。
そういう奴らを台無しにしてよお、自然体に戻してやる?みたいな。
俺らそういう遊び沢山して来たからよ。これから夜まで台無しの

先生が何から何まで教えてやるよ」

茅野「…さいつてー」

リュウキ「……」

ドンツ!

倉橋「キヤツ!」

桃花「カエデちゃん!」

男に首根っこを掴まれた茅野はその軽い身体を宙に浮かし、後ろのソファに投げられる。

リュウキ「何エリート気取りで見下してんだ、ああ!!
お前らもすぐに同じレベルまで墮としてやるよ。」

いいか、宿舎に戻つたら涼しい顔してこう言え。

「楽しく遊んでいただけです」つてな、そうすりや誰も傷つかねえ。
帰つたらまた皆で遊ぼうぜえ。

楽しい旅行の記念写真でも見ながらなあ」

全員「…………」

『記念写真』

その言葉の意味を理解した瞬間、4人の顔は蒼ざめる。

ドンドンツ

その時、誰かが鉄の扉を開く音が聞こえた。

リュウキ「ようやく来たか。おい、誰か開けてやれ」

リュウキの指示で手下の1人が扉の方へと向かう。

リュウキ「さてと、連れも来た事だし誰が誰をやるか決めるとする

か

「俺はこのオレンジ髪の女が良いなあ」

「じゃあ俺はこつちのちつちえ緑髪のガキだ」
ゲスい目線で見られると各々顔を俯かせる。

どうしてこんな事に…、

それとこの人、リュウキって呼ばれてた…、

よりによつて私の大切な人と同じ名前…、

…悔しい、

悔し過ぎて涙も出ない…、

ねえ、お願ひ…、

助けて…、

龍騎くん…。

〈な、何だテメエ！ぐわあつ!!〉

ドカンッ!!

桃花「?」

突然、扉の開けに行つた1人が私達の目の前まで転がり込んでき
た。

リュウキ 「お、 おい!? 誰だ!?」
開かれた扉の前に立っていたのは……

龍騎 「お姫様を助けに来た王子様さ」
桃花 「龍騎くん!!」

17. 修学旅行の時間③

——龍騎 side ——

龍騎 「お姫様を助けに来た王子様さ」

桃花 「龍騎くん！」

しかし、我ながら何ともダサい登場セリフだな。

でも1回言つてみたかったんだよなあ、いやマジで。

つていうかあの辞書みたいなしおり念のため暗記しといて良かつたぜ。

『班員が拉致られた時の対処法』なんて普通載つてないからな。

お陰で探す手間が省けた。

でも『京都のお土産が東京で売つてた時の対処法』ってのは正直いられねえな。

「思い出を買つてきたと思ひなさい」つてやかましいわ！

それはさておき、桃花と倉橋は無事か？

んつ？ 何で茅野と神崎まで居るんだ？

……なるほど、どうやらおいたが過ぎたようだな。
誘拐

リュウキ 「なんだテメエ、入つて早々何ふざけた事抜かしてんだ！」

ぶつ殺されてえのか!?」

龍騎 「ふざけた事…？ それはこっちの台詞だ。

汚ねえ手で桃花たちに触れるんじやねえ」

声量は落ち着いてはいるが、龍騎が激怒しているのは火を見るより明らかだつた。

龍騎 「だが俺も鬼じやねえ。見た所まだ手は出されてねえみてえだしな。

そこで、お前らにチャンスをやる」

そう言うと龍騎は指を2本立てた。

龍騎 「1つめ、今すぐ4人を解放して助かる。

そして2つめは……

解放せずに死ぬ。どちらか選べ。
選択によつては……

それがお前らの最期だ

龍騎の悍ましい殺気に不良たちは身を強張らせる。

リュウキ「…分かつた。コイツらは解放する。
…すまなかつた。」

見た目に反して話のわかる奴だな。

つていうかリュウキって言つてたけど俺と同じ名前か。
別にコイツが自分で付けた訛じやないが腹たらしい。

龍騎「いいだろう…4人は連れて帰る」

龍騎はゆつくりとした足取りで桃花たちに近づく。

しかし龍騎が横を通る時、不良たちは一様にニヤニヤしていた。

龍騎「大丈夫か皆？一緒に帰ろう」

龍騎がそう言い4人を縛つているロープを解こうとした時、

リュウキ「なーんて言うと思つたか馬鹿があ!!」

リュウキの一声で手下の1人が手に持つていた角材で龍騎に殴りかかる。

桃花「危ないっ!!」

ガシッ!!

「なつ!?」

しかしその角材は龍騎の掌に収まり、ビクともしない。

龍騎「残念だ……

これでお前らの運命は決まった」

バキッ!!

「ぐあつ!?

龍騎の強烈な一発を食らつて倒れた手下はそのまま伸びてしまつた。

リュウキ「ば、馬鹿な!?

龍騎「俺は最後のチャンスを与えたつもりだつたんだがな、お前ら：

骨も残らねえと思え」

リュウキ「クソツ!!たつた1人で何が出来る！お前らヤつちまえ

!!

「うおーーっ!!

リュウキの号令で一斉に飛びかかる。

しかし…

龍騎「だから…それはテメエらだつての!!」

バキッズゴツボガツ!!

龍騎はそれらを鬼神の如く次々とねじ伏せていく。

リュウキ「なつ!?」

茅野「すつ、凄い…」

感覚的には一瞬の出来事だつた。

気付けば立つているのは同じ名を持つた2人だけであつた。

龍騎「呆気ないな。これじゃあどつちが悪者か分かりやしねえな。
さて…あとはお前だけだリュウキさんよお」

リュウキ「ひ、ひいいい」

あまりの恐怖からか、リュウキは腰を抜かし尻もちをつく。

龍騎「…クソが、2度と俺たちの前に現れるな」

尻もちを着く腰抜けに軽蔑の視線を送り、再び桃花たちの元へと歩み寄る。

龍騎「怖かつただろ? さあ帰ろう」「

再びロープを解き始める。

茅野「危ない!!」
ビリビリビリツ!!
龍騎「ぐあつ!?!」
ドサツ…

突如として強力な電流が龍騎を襲う。
倒れていた手下の1人がスタンガンを浴びせたのだ。
龍騎はその場に倒れこむ。

桃花「龍騎くんつ!!」
リュウキ「へつ、へへへつ…はははははつ!!

なーにが骨も残らねえと思えだ！

結局テメエ一人じやあ何も出来ねえって事なんだよ!!」

ドカツ！

バキッ!!

ドコツ!!!

倒れ伏して動かない龍騎に殴る蹴るの暴行を繰り返す。

桃花「龍騎くん！やめてえ!!

もう止めてえええ!!!」

桃花は泣きじやくりながら叫ぶ。

リュウキ「ウルセエよさつきから。テメエこいつの何だ？女か？

：：：だつたら丁度いい、俺も今ので非常に傷ついた。

だからお前に俺を慰めて貰おうか。

そしたら、コイツは生かしといてやつても構わねえぜ？」

そう言い、桃花のすぐ傍まで迫る。

茅野「駄目だよ矢田ちゃん！コイツの口車に乗っちゃ!!」

リュウキ「テメエは黙つてな、人の色恋に他人が口出しすんのは野暮つてもんだぜえ、なあ？矢田ちゃんよお」

リュウキの長い舌が桃花の頬を舐める。

気持ち悪い…

吐き気がする…

でも私が我慢すれば皆助かる…

私はどうなつても皆と龍騎くんだけは…
桃花はまだ涙で濡れる瞳をゆっくりと閉じた。

リュウキ「へつへつへ、賢い選択だ。
おい！もう撮影班を待つ必要はねえ。

今すぐやつちまうぞ!!」

茅野「ヤバイよ、このままじや矢田ちゃんが…」

神崎「矢田さん…」

「じゃあ俺が携帯で撮影しといてよ（ガシツ）!?」

携帯を取り出そうとした手下の頭に乗っかる五指。
そこから伸びる腕は血管が文字通り剥き出しになり、さらに伸びた
先にある顔は正気を失ったかの様に立つ男。

メキメキメキ…

手下「ぎ、ぎやあああああ!!」

余りの凄まじい握力に頭を握られた手下が悲鳴をあげる。
そして…

手下「が…がが…あが…」

口から泡を吹き気絶してしまった。

リュウキ「て、てめえなんで動けんだ!?あのスタンガンを食らつて

すぐ動ける奴なんている訳「黙れ…」!?」

目の前に立つ男の様子にリュウキは顔を蒼ざめさせる。

龍騎「…モウコレ以上喋ルナ。

オ前ノ汚ラシイ声ヲコイツラ二聞カセルノハ忍ビナイ。
…セメテ声ガ出ナイ様ニ送ツテヤル

異常な雰囲気に全員が息を飲む。

リュウキ「こ、こんのがキがああ!!」

狂つたかのようにリュウキは拳を繰り出す。

龍騎「……

ドコッ!!!!

その瞬間、リュウキの眉間に龍騎の拳が襲う。

リュウキ「……」

悲鳴をあげることなくリュウキはその場に倒れこむ。

龍騎「サア……」

才迎エノ時間ダ……」

◇◇◇

——桃花 side ——

そこからは目を背けたくなる光景だった……

既に鳴くことも忘れた死に体同然の身体に龍騎は何も躊躇もなく無言で拳を振り落としていく。

その姿はまさに壊れた人間の形をした何かだった。

もはやどちらが出したかも分からぬほど、2人の服は血に染まつてゐる。

龍騎が拳を振り落とす度に、血が桃花たちの顔や服に飛び散つた。

嘘……

あれが龍騎くん……

私たちの為にあそこまで……

これで皆助かる……

でも、その代わりあの人気が死んじゃう……

本当にこのままでいいの……

駄目……

止めなきや……

龍騎くんが壊れてしまう前に……

私が止めなきや……

桃花「くつ、くう……」

桃花は何とか自分を縛るロープを解こうとする。
しかし、身体をぐるぐる巻きに縛っているロープ。
そう簡単にはいかない。

ダメ、解けない……

このままじや龍騎くんが……

? 「矢田さん！」

桃花「!?

焦つていると私を呼ぶ声が……
振り向くと渚たちがいた。

桃花「渚!」

渚「話は後で。ロープを解くから直ぐに龍騎くんを。
このままじや本当にマズイよ！」
渚は桃花のロープを解き解放する。

桃花は渚に礼をする事も忘れ、龍騎に向かつて駆け出す。

◇◇◇

——龍騎 side——

どれぐらい殴つただろうか……

いや、そんな事はどうでもいい……

コイツはもうすぐ死ぬんだ……

俺の手で……

既に目の前にいる人間にもはや意識はない。

あれだけ無抵抗に殴られたんだ。

当然といえば当然か。

龍騎「サテ、ソロソロオ終イニスルカ。本当ハ殺ス氣ハ無カツタン
ダガ自分デ蒔イタ種……文句ハナイナ」

龍騎は血に染まつた拳を高々と突き上げる。

龍騎「ジャアナ、アノ世デセイゼイ楽シミナ……」
高々と突き上げた拳が落ち始めた……

桃花「ダメエエエッ!!」

血に染まつた龍騎の身体に桃花が抱きつく。

龍騎「……離セ」

桃花「絶対に離さない!!」

龍騎 「……」

桃花 「もうやめて…

これ以上はダメ…

もう大丈夫だから…

だからお願ひ…

いつもの龍騎くんに戻つて…

私…

こんな…

こんな龍騎くん見たくない!!!

龍騎 「……」

桃花 「うつ…うつ…」

桃花は大粒の涙を流している。

よく見ると、返り血を浴びた龍騎に抱きついたため、顔も服も血だらけであつた。

龍騎は突き上げていた拳をゆっくりと下ろす。

龍騎 「……ごめん」

龍騎は血塗られた桃花の身体を優しく包み込んだ：

◇◇◇

その後、渚達の他に殺せんせーや烏間先生も到着。

カルマ「あーあ、龍騎のせいで、俺が仕返し出来なかつたじゃん」

龍騎「悪い悪い」

殺せんせー「龍騎くん。クラスメイトを救う為とはいえ、これから

はこういう単独行動は危険ですので控えてください。

それと……あれは流石にやり過ぎです」

殺せんせーが触手を指すと、その方向では俺がぶつ倒した不良達が鳥間先生の指示でやつて来た防衛省の人達に担架で担ぎ出された。

下手に警察に知られて殺せんせーの事が世間に露呈するのも警戒したんだろう。

オマケに血で汚れた俺達のために新しい制服の手配まで……マジで下さいません！

因みに俺がボコボコにした不良のリーダーは大事には至らなかつたそうだ。

俺が意識が定まらないまま殴っていたため、威力が弱かつたのが幸いしたらしい。

龍騎「いやあ、つい頭に血が上っちゃつて。ところで茅野や神崎も大丈夫か？」

茅野「大丈夫だよ♪」

神崎「ええ」

結構ショッキングな光景を見せてしまつたけど、2人ともケロツとしている。

龍騎「それなら良かつた。倉橋……は……」

いつもこういう時は「ぜんせん大丈夫だよ♪」とでも言いそうな倉橋は俯いたまま動かない。

龍騎「大丈夫か倉橋？」

俺は倉橋の顔を覗き込む。

倉橋「……うつ」

龍騎「……うつ？」

倉橋 「うえーーん、怖がつだよーーー!!」

龍騎 「ぐへえ!」

倉橋は大泣きしながら俺に抱きついてきた。

おいやめろ！首絞まつてるからマジで！！

龍騎 「お、おい落ち着けつて倉橋！」

よつぽどアイツらが怖かつたのか？」

倉橋 「違ざう!!」

俺の言葉に全力で否定する倉橋。

倉橋 「ぐすつ、あの人達も怖がつだけど、1番怖がつだのは龍騎ぐ
んだよ!!正気を無ぐじたように何も言わずに殴つでた。

もしかしたら、このまま龍騎ぐんが戻つでこなくなるかど思つで
…、

それで私……うえーーん！」

どうやら倉橋の泣いている1番の原因は俺のようだ。

仕方がなかつたとはいえ、悪い事をしてしまつた。

龍騎 「悪かつたな、俺のせいで余計な怖さを与えてしまつて

……ごめんな」

倉橋 「……うん」

その後泣き続ける倉橋が何とか落ち着いた所で外に出るとすっか
り夕暮れ時になつて真つ赤に染まつた太陽が京都の街並みを美しく
照らす。

18. 修学旅行の時間④

——龍騎 side——

——くたびれ旅館——

桃花たちの誘拐事件が解決して宿に帰つて来た俺たちは出迎えた磯貝たちと無事を祝い合う。

今は皆、お風呂に入っている頃だろう。

ん？俺は何してるかだつて？

烏間先生「はあ、全く君は…」

ご覧の通り、烏間先生から絶賛説教中である。

先生の部屋でかれこれ30分ぐらい烏間先生とマンツーマンを決め込んでいる。

でも俺たちの事を本当に大切に想つてくれているというのが正座による痺れよりも伝わった。



そこからさらに30分。

漸く烏間先生から解放された俺は部屋に戻る途中で小さなゲームコーナーを見つけた。

何気なく中を見ると神崎がゲームをしている。

その横では渚、杉野、茅野、奥田が見ていた。

杉野「うおっ！どうやつて避けてるか全くわからん！」

神崎「恥ずかしいな、なんだか」

そう言いつつも手慣れた手つきで左手でレバーを操作し右手でボタンを操つてている。

龍騎「随分と楽しそうだな」

渚「龍騎くん？」

龍騎「そんなんにビックリしなくても」

ゲームに興じている神崎に近づいて声をかけると、突然来たオレに驚いた様だ。

杉野 「よう、神道。鳥間先生の話は終わつたのか？」

龍騎 「ああ、キツチリ1時間コースだつたよ」

渚 「それは災難だつたね」

神崎 「ゴメンね、私達のせいで…」

申し訳なさを感じたのか神崎と茅野が暗い顔をして謝つてきた。

龍騎 「おいおい、なんで謝るんだよ。

神崎を無事助けられたんだ。

鳥間先生の説教の1時間や2時間どうつてことない

神崎 「…うん」

俺の言葉に神崎は笑顔で頷くがまだ何処か元気がないようだ。

奥田 「そ、それについても意外です。神崎さんがこんなにゲームが得意なんて」

嫌な流れを察したのか奥田が話を変える。

神崎 「うん、黙つてたの。遊びができるでもうちでは白い目で見られるだけだし。

見た目も肩書きも逃げたり流されたりして身につけてたから自信がなかつた……」

再び暗い顔になる神崎。

龍騎 「……別にいいんじゃないかな？」

神崎 「……えつ？」

神崎の話を黙つて聞いていた俺は切り出す。

龍騎 「見た目や肩書きなんてどうでも良い。大切なのは神崎自身だろ。

親だろうが何だろうが関係ない。

今はしたい事が分からなくてもいい。

でも何かしたい事が見つかつた時、その時は全力で取り組める。

後悔はするな。

たとえそれが失敗だつたとしてもだ。

自分で自分を追い込むだけだからな。

まずは周りを気にせず、自分のしたいようにすればいい

神崎 「……」

ポロツ……

神崎の瞳から一筋の涙が流れる。

杉野「神崎さん!? てんめええ神道! なに神崎さんを泣かしてんだあ
!!」

龍騎「えつ?! いや俺は別に何も…」

血眼になつた杉野が俺の襟を鷲掴みにする。

おい止めろ、せつかく用意してくれた新品の制服が…、

神崎「待つて杉野くん」

杉野「えつ?」

俺に掴みかかつていた杉野は神崎の一言でピタツと止まる。

神崎「ゴメンね、違うの。哀しくて泣いたんじやなくて、嬉しくて
泣いたの。

今までハツキリと言つてくれる人が居なかつたから思つたの。

何も恥ずかしくないんだつて、

私は私で良いんだつて、

やりたい事をやればいいんだ…つてね。

E組に来てからずつと閉じこもつていた私を神道くんが殻を割つ
てくれた。

だから、お礼を言わせて……

ありがとう！」

今度の神崎の笑顔は誰がどう見ても輝きに満ち溢れた笑顔であつ
た。

杉野「……女神が降臨なされた

渚「…何言つてんの？」

女神つて…ちょっとと言い過ぎじゃないか？

渚「と、とりあえず龍騎くんも疲れていると思うからゆつくりお風

呂に浸かつて来てよ」

龍騎「あ、ああそうさせて貰うわ」

その場を後にした龍騎は風呂へ向かつて歩みを進める。



～～～男子 大部屋～～～

龍騎「ふい～、良い湯だつた♪んっ？」

ひとつ風呂浴びた龍騎が大部屋に戻ると、男子たちが1箇所に集まっていた。

龍騎「何してんだ？」

磯貝「おつ、龍騎か。これだよこれ」

ピラツ

龍騎「『気になる女子ランキング』？」

磯貝が持つている紙を見せると、修学旅行定番の好きな女子の名前とその理由が書かれていた。

見ると、大方の投票は終わつてあるみたいだな。
へえ、2位は桃花か。

つていうかポニーテールはともかく巨乳が理由つて中学生か！
……いや、中学生だったな。

三村「問題は誰が誰に入れたかだよなあ」

岡島「俺は1人に決められないんだよ！」

三村「うん、岡島はいいから…」

てつきり巨乳つて書いたの岡島だと思つたが違うみたいだな。

前原「渚、お前は誰に入れたんだよ？」

杉野「そういう前原こそ誰に入れたんだよ？」

前原 「俺か？そいつは言えねーな」

三村 「腹立つ、お前みたいな奴がモテてると思うとまた腹立つ」
ほんとにな。

ただのナンパスケベ野郎なのに。

カルマ 「面白うことしてんじやん」

そこに飲み物を買いに行つていたと思われるカルマが戻ってきた。

前原 「いいとこに来た。お前気になる子いる？」

カルマ 「ううん、俺は奥田さんかな」

意外だな。

カルマと奥田じやまるで正反対の様に思えるけど。

龍騎 「へえー、何で？」

カルマ 「だつて彼女怪しげな薬とかクロロホルムとか作れそうだし。俺のイタズラの幅が広がるじやん」

…うん、そういう風に考えると確かに妥当な選択だわな。

前原 「んで、お前は誰なんだよ龍騎？」

どうやら俺の番が回ってきたようだな。

…んつ？

龍騎 「俺の事はさておき、お前らは大丈夫なのか？」

磯貝 「何がだ？」

龍騎 「あれ」

龍騎が指差す方へ目をやる。

すると、そこにピンクに染まつた殺せんせーが『生徒データ 男子
③』なるものにメモをとつていた。

殺せんせー 「お晩です。なるほどなるほど……」
書き終えるとそつと襖を閉めた。

三村 「……メモつて逃げやがった!!」

前原 「殺せえ!!」

俺とカルマを残して他の男子はメモを奪還するため先生を追つた。

カルマ 「あれ？龍騎は追わなくていいの？」

龍騎 「ああ、俺は何も言つてないからな」

カルマ 「そういえばそうだつたね。」

ところで龍騎は誰に入れるつもりだったの?」

龍騎「……さあな」

カルマ「……」

この時カルマは思つた。

龍騎の顔は誰に入れるか迷つて いるのではない。
何処か遠くの過去を見ている顔だと……



——桃花 side ——

——女子 大部屋——

片岡「えつ? 好きな男子?」

中村「そうよ、こういう時はそういう話で盛り上がるものでしょ?」
一方の女子部屋でも男子部屋同様『気になる男子ランキング』が行
われていた。

暗殺しているとはいえやはり女の子。

男子以上に恋バナに花を咲かすのではないだろうか。

中村「まあ、ウチのクラスでマシなのは磯貝と前原くらい?」

片岡「そうかな?」

中村「前原はタラシだからまあ残念だとして、クラス委員の磯貝は
結構優良物件じゃない?」

確かに磯貝くんは顔もいいし性格までいいからね。
莉桜の意見は最もかもね。



中村「……よーし、こんなことかな」

その後、匿名での投票を中村が集計し終えた。

中村「えーっと、トップは磯貝の4票、前原に3票、千葉に1票…
おつ、神道には2票入つてるね」

…………えつ

私は莉桜の持っている紙を覗いた。
確かに龍騎くんに2票入つていて。

莉桜「これは思わぬ恋のライバルが出現したんじやない、矢田
ちゃん？」

桃花「こ、恋のライバルって、私は別に／＼＼＼

莉桜「照れなさんなつて♪」
でも確かに誰だろう……

ガラツ

イリーナ「おーいガキども。もうすぐ就寝時間だつてことを一応言
いに来たわよ。」

つて言つてもどうせ夜通しあしやべりするんでしょ？あんまり騒
ぐんじゃないわよー」

そこにビール缶を持ちながらビッチ先生が現れた。

倉橋「先生だけお酒呑んでズルくい」

イリーナ「当たり前でしょ。大人なんだから……つて何よその紙？」

先生の疑問に莉桜が紙を渡す。

ビッチ先生『気になる男子ランキング』ねえ、随分とお盛んなこと
なことね。

えっと、磯貝が4票に前原3票…神道には2票…ねえ
するとビッチ先生は周りを見渡す。

イリーナ「…………」

桃花「…………／＼＼＼

イリーナ「…………」

? 「……」

イリーナ 「……なるほどね」

片岡 「何がなるほどなんですか？」

イリーナ 「いや、何でもないわよ」

岡野 「ねえねえそんな事よりビッチ先生の大人の話を聞かせてよ！」

中村 「あつそれ気になる♪」

イリーナ 「フツ、いいわよ。子どもには刺激が強いから覚悟なさい」
ビッチ先生が全員の顔を見回す。

その並びの真ん中にはピンクのタコが居た。

……ピンクのタコ？

イリーナ 「例えればあれは17の時……ってそこ！さりげなく紛れ込む
な！女の園に!!」

全員 「「うえ!?」」

思いもしなかつた殺せんせーの登場に一様に驚く。

殺せんせー 「え～いいじやないですから。私もその色恋の話聞きた
いですよ」

中村 「そう言う殺せんせーはどうなのよ？自分のプライバートはちつ
とも見せないくせに」

倉橋 「そうだよ。人のばつかズルい」

岡野 「先生は恋バナとかないわけ？」

片岡 「そうよ。巨乳好きだし片想いくらい絶対あるでしょ
指を突きつけられ追い込まれる殺せんせー。
さて問題です。

殺せんせーはこの後どうするでしようか？

答えは……

バシューーン!!

逃げたでした。

イリーナ「逃げやがつた！捉えて吐かせて殺すのよ!!」

ビッチ先生の指示のもと、ナイフを片手に殺せんせーを追うため部屋から出て行く女子達。

しかし、追いかけた女子達の中に桃花の姿はない。皆が出て行つた後も1人その場に座り込んでいた。

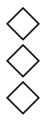
1票は私としてもう1票は一体…

何だろう…

この気持ち…

桃花は自分の胸が痛くなるのを感じた。

イリーナ「まさかあの子がねえ……これは面白いことになりそうね」



——龍騎 side ——

龍騎「しかし皆殺せんせーを追いかけて行つたから暇になつたな。おまけにカルマまでどつか行つちやうし」

その後、1人大部屋に残された龍騎は旅館内の庭を散策していた。

龍騎「あれ？」

桃花「…龍騎くん」

ブラブラとしていたら桃花とバツタリ遭遇した。

桃花は庭に置いてある石のベンチに座つていた。

龍騎「何してんだこんな所で？」

桃花「うん、殺せんせーを追いかけて皆行っちゃつて1人になつちやつたから外の空気を吸いに来たの」

なるほどね、あのタコは女子部屋の方にも行つていたのか。

そして追われている理由は…大方俺たちのと一緒につて所か。

龍騎「そうか、隣いいか？」

桃花「うん…」

俺は桃花の横に腰を下ろす。

自分で言うのも何だがこういう時には笑顔で返事してくれる桃花。でも、今は何処か元気が無い。

やつぱりまだあの時のことが頭に残つているのか？

龍騎「やつぱりまださつきの事が頭に残つてているのか？

ごめんな、怖い思いさせて」

桃花「ううん、あんな状況じや仕方ないよ……でも」

龍騎「でも？」

桃花「何だろう…」

私つて1人で浮かれていたのかな……って思つたんだ」

龍騎「…」

桃花の発言の意味。

それは龍騎の知らない所で行われたため知る由も無い。

龍騎「…何かあつたか？」

龍騎は桃花の言葉を意味を知るべく問い合わせる。

桃花「…………ごめん、今は上手く言えない」

龍騎「…そうか」

しばらくの沈黙の後、龍騎が口を開く。

龍騎「じゃあ今は聞かないことにする。

でも、本当に駄目だと思つたらいつでもいい。話してくれ。

自分の殻にずっと閉じ籠るより誰かに無理矢理にでも開けてもらうのもまた道を切り開くヒントになるかもしれない。

そう考えとけばいつかそれが救いになるから…」

桃花「……」

桃花は黙つて龍騎の顔を見つめる。

桃花「……ふふつ、誰のせいで悩んでるのか分からなくなっちゃつた♪」

龍騎「んつ？どう言う意味だ？」

桃花「何でもないよ♪じやあ今から自販機まで競争！」

負けたらジュース奢りね…よーいドンツ!!」

桃花は立ち上がるや否や飛び出して行つた。

龍騎「はつ!?ちよつ、ズルいぞ!!」

慌てて桃花の後を追う龍騎。

色々あつた修学旅行も最後の夜。

追いかけ合う2つの影を欠けた月の光が鮮明に映し出す。

しかし、2人は気付いていなかつた…

その欠けた月の光がもう1つの影を映し出していた事に……

そして……

桃花「私の勝ち♪」

龍騎「……納得いかん」

桃花「夢とはだいぶ違つちゃつたけど…ま、いいか♪」

19. 転校生の時間

—— 龍騎 side ——

＼＼＼ 旧校舎通学路 ＼＼＼

喜怒哀楽が入り混じった修学旅行も終わり、櫛ヶ丘中学3年E組では通常授業が再び始まろうとしている。

そんな前日の夜、E組の生徒全員に鳥間先生からメールが届いた。その内容は：

「明日から転校生が1人加わる。外見で驚くとは思うが普通に接して欲しい」

とのことだつた。

桃花 「おはよう龍騎くん！」

昨日のことを思い出していると、桃花が後ろから声を掛けてきた。

龍騎 「おはよう。ところで鳥間先生のメール見たか？」

桃花 「見たよ。でも外見で驚くって書いてあつたけどどういう意味なんだろう？」

龍騎 「さあな。でも俺は例本校舎から編入としてこんな時期に転校してくるつてことは…」

桃花 「暗殺者……だよね？」

文面とタイニングを察するに、おそらく暗殺者だろう。

しかも外見で驚くって事は外国人か？

まあ、何れにしても鳥間先生が言うんならほぼ確実に驚くような姿の奴であろう。

2人はそんな事を考えながら校舎に入つていく。

—— ◇◇◇ ——

＼＼＼ E組教室 ＼＼＼

ガラガラガラツ

俺たちが教室に入ると、既に倉橋と片岡が居た。

桃花 「おはよー陽菜ちゃん、メグ」

倉橋 「お、おはよ桃花ちゃん、龍騎くん……ねえ、あれなんだと思う？」

いつもとは様子が違う倉橋の指の先を見ると、後ろの隅に置かれた黒い箱。

……何あれ？

すると、箱に備え付けられているモニターが起動した。

? 「おはようございます。今日から転校してきました自律思考固定砲台と言います。よろしくお願ひします」

一言言い終わるとモニターは再び黒色に染まる。

……烏間先生：外見で驚くつてレベルじやねえよ

◇◇◇

鳥間 「えつ、えー……皆に……て、転校生を紹介する。……自律思考固定

砲台：さんだ」

鳥間先生も大変だなあ…

恐らくクラス全員がそう思つただろうな。

鳥丸先生「この子は、自律思考…所謂A.I.であり、自分で物事を判断する事が出来る。

よつて、此処では生徒として扱う。

つまり、お前はこの子には手を出せないからな」

理屈は分かつたが、政府のお偉いさんも随分と思い切つた事するなあ…

殺せんせー「なるほど、契約を逆手に取つてきましたか

：いいですとも。あなたをE組に歓迎します！」

自律思考固定砲台「よろしくお願ひします」

本当に自分で判断して喋れるんだな。

つていうか表情が一切変わらないが機械だからその辺は仕方ない

か…

◇◇◇

殺せんせー「さて、この物語の登場人物は3人：」

自律思考固定砲台の紹介も終わり、今は国語の時間。

その後ろの隅では相変わらず黒い箱が異質な空気を漂わせる。

桃花「ねえ、龍騎くん。AIって言つてたけどどうやつて攻撃するのかな？」

授業中のため、桃花は小声で隣の席の俺に話しかける。

龍騎「さあな、でも恐らく…」

殺せんせーにどうやつて攻撃するのか考えを言おうとした時であつた。

ガチャヤン!!

いきなり黒い箱の横から、ショットガンと機関銃が展開されると、殺せんせーに向ける。

龍騎「やつぱりか…」

龍騎が呟くと同時に発砲が開始された。

殺せんせー「濃密な射撃ですが、この生徒は毎日やっていますよ。それと授業中の発砲は禁止しています」

殺せんせーは余裕で躲すと自律思考固定砲台に注意する。

自律思考固定砲台「以後気を付けます。続けて第2射を開始します」

そう言い再度発砲を開始する。

いやいや、いま気を付けますって言つたよね？

AIは都合の悪い事は聞こえないのか？

そう考えていた時であつた：

バシュ!!

全員「「[?]」「！」」

殺せんせーには全く当たらないように思えた弾が、チョークを持っていた指に当たり触手が消し飛んだ。

持たれるべき指を失ったチョークは床に落ち、そして砕け散る。

龍騎「…ブランド」

放たれた弾と同一軌道上に後続弾を発射する事で殺せんせーの死角を突いたのだ。

自律思考固定砲台「左指先を破壊。増設した副砲が効果ありと確認しました。

続いての攻撃した際に先生を殺せる可能性、0.01%。

：卒業までに殺せる可能性、90%以上

ターゲットの動きを分析し、すぐさまそれに合わせた方法で攻撃する。

：伊達にA Iじやないつて事か。

◇◇◇

授業が終わると残されたのは動きを停止した自律思考固定砲台から放たれた弾の残骸。

前原「これ、俺たちが片すのかよ…」

村松「お掃除機能とか付いてないのかよ、おい？」

自律思考固定砲台「…」

吉田「やめとけ、機械に言つてもしょーがねえよ」

固定砲台がだんまりを決め込んでいるため、仕方なく皆で手分けして片付ける。

さつきの1時間だけでもあの迷惑さ。

しかも、それに留まらず2時間目、3時間目と続き結局その日一日中転校生の攻撃は続いた。

みんながイラつくのは無理はないだろう。
このままじゃマズイな……

◇◇◇

翌日、俺はある目的の為、いつもより少し早めに教室に着いた。

ガラガラガラツ

龍騎「んつ？ 寺坂？」

俺が教室に着くとそこには既に寺坂の姿があった。

寺坂「ああん？ 神道か」

そう言つて振り向く寺坂の手にはガムテープで握られていた。

龍騎「考えることは同じ…か」

寺坂はどうか分からぬが、俺も自律思考固定砲台が壊れない程度に動きを拘束するつもりだつた。

流石に昨日のようなことを続けられてはたまつたものではないからな。

まあ最大の理由が皆に被害が及ぶ前に楔を刺しておくつていうのがあるが…。

寺坂「…みてえだな。だがよ、ガムテ持つて来たのは良いんだが、これで動き止まんのか？」

龍騎「それは心配ないだろう。昨日コイツの動きを見てたが、武器の格納扉の力はそんなに強くなさそuddtた」

寺坂「…あ^{弾幕}の中でんな事考えてたのかよ？」

お前も大概イかれてんな…」

失敬な。観察力が凄いって言つて欲しいものだ。

俺は自律思考固定砲台に近づく。

龍騎「悪いな。お前に罪はないんだが、ちゃんと全員が帰つたあと解いてやるからそれまで辛抱してくれ」

龍騎は優しく自律思考固定砲台に触る。

その後、登校してきた生徒たちは自律思考固定砲台の姿を見て驚いたのと同時に昨日のような授業妨害はされないと安心していた。

◇◇◇

結局今日一日、自律思考固定砲台の攻撃は無く、普段通りの授業が行われた。

そして、放課後。

桃花 「龍騎くん、一緒に帰ろ♪」

帰り支度を整えた桃花が俺を誘う。

龍騎 「ああ。でもその前にあれを解いてやらねえと」

桃花 「そうね…いくら機械でもあのままじゃ可哀想だしね」

俺と桃花は2人して拘束されていた自律思考固定砲台のガムテープを剥がす。

龍騎 「おーい自律思考固定砲台。起きてんだろ?」

ガムテープを剥がし終え俺が呼びかけるとモニターが点灯し自律

思考固定砲台の顔が映る。

龍騎 「悪いとは思つたが、今日一日お前の動きを止めさせて貰つた。……お前はどう思つた?」

自律思考固定砲台 「仰つてている意味が分かりません。

私には感情等はプログラムされていませんので」

龍騎 「まあそりやそうだよな。じやあ言い方を変えよう。

暗殺を邪魔されてどういう影響が出る?」

自律思考固定砲台 「……期日までの暗殺が困難になります」

少し考えた後そう答える。

龍騎 「だろうな。俺達の邪魔でお前の暗殺は困難になる。だがな、その邪魔っていうのは俺達にも言えるんだよ」

自律思考固定砲台 「しかし、私はマスターにターゲット暗殺を命じられました」

俺の言葉に自律思考固定砲台は反論する。

龍騎 「それは分かっている。だから別に暗殺をするなどは言わな

い。要是状況を”考えろ”ってことだ。

それにアイツはお前1人では無理_{殺せんせ}だぞ。

お得意の分析力で考えてみな」

自律思考固定砲台「考える……しかし方法が分かりません」

殺せんせー「その辺はご心配なく！」

桃花「殺せんせー！」

桃花の驚く声で振り向くと、殺せんせーが立っていた。
その手には箱いっぱいに詰まつた部品や工具。

龍騎「なんだ居たのか：その部品は？」

殺せんせー「ヌルフフフ。彼女をより強く、より感情的に、そして
より協調的にするのに必要な物ですよ。

さあここからは先生の仕事です。

もう暗くなります。2人は早く帰りなさい」
：なるほどな。

確かに機械にはそつちの方が手つ取り早いかも知れないな。

龍騎「分かつた。んじや後は任せて帰るか」

桃花「そうだね。じゃあさようなら殺せんせー」

殺せんせー「ええ、さようなら」

後のこととは殺せんせーに任せて俺と桃花は校舎を出た。

桃花「でも殺せんせー何するんだろうね？」

山道を下つている最中桃花は俺に問いかける。

龍騎「文字通りイジるんだよ。

ま、明日になれば分かると思うぞ」

桃花「？」

桃花の疑問は翌朝に解決する。



翌朝。

俺は登校中に渚と杉野と合流し、今は一緒に登校している。

杉野「なあ、今日もアイツ居るのかな？そろそろ烏間先生に文句言
おうぜ」

渚「確かにね：」

昨日一昨日の事もあり、2人とも憂愁に感じているようだ。

渚 「龍騎くんはどう思う?」

龍騎 確かに今のままだつたら迷惑極まりないな。

「…まだ…た…な…」

梅野「はう? どういふ意味だよ?」

俺の呑みを效かせた言葉は柳野は反応する

渚・杉野「？」

そういうしてい

ガラガラガラツ

昨日とはうつて変わつて笑顔溢れ

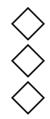
明日とはちがって、髪は黒く、顔は茶色で、髪の毛は長い。

自律思考固定砲台「はい！なんて言うかとっても爽やかな気分です

よく見ると顔だけ映してたモニターは大画面なつて、オマケに表情も豊かになつていた。

つていうか流石にここまで変わっているとは思わなかつた……
改 造

転校生が何かおかしな事になつてゐる…



自律思考固定砲台「庭の草木も緑が深くなつて来ましたね。近づく夏の気配が心地良いです♪」

岡島 「えらくキュー^トになつちやつて」

三村 「あれ一応固定砲台…なんだよな?」

岡島は相変わらずとして、まあ三村の疑問は最もだな。

寺坂「なに騙されてんだよお前ら。

全部あのタコが作つたプログラムだろうが。愛想良くて機械は機械。

どうせまた空気読まずに射撃すんだろ、あのポンコツ」と、前日の朝に俺と一緒に自律思考固定砲台を拘束した寺坂が言う。

自律思考固定砲台「おっしゃる気持ちわかります…。

昨日までの私はそうでした。

…ポンコツ。そう言われても…返す言葉がありません

寺坂の言葉に傷ついたのか顔を手で覆つて泣き出し、画面には雨が降り出した。

片岡「あーあ、泣かせた！」

原「寺坂くんが二次元の女の子泣かせちゃつた！」

寺坂「なんか誤解される言い方やめろ！」

竹林「素敵じゃないか、2次元。Dを一つ失うところから女は始まる」

磯貝「竹林！それお前の初ゼリフだぞ！」

竹林の何やら哲学じみた言葉に突つ込む磯貝。

そういえば竹林の声聞いたの初めてだな：

自律思考固定砲台「でも皆さん、ご安心を。殺せんせーに諭されて私は協調の大切さを学びました。

私のことを好きになつていただけるようみなさんの合意が得られるまで私単独での暗殺は控えることにしました」

自律思考固定砲台の言葉に安心した表情を見せる一同。

◇◇◇

昨日まで鼻つまみ者であつた彼女は何処へやら。

休み時間ともなるとクラスの半数が彼女の元へと集い、殺せんせーに備え付けられた様々な機能を試す。

片岡「ねえ、この子の呼び方決めない？」

前原「確かに。自律思考固定砲台って言いにくいんだよなあ」
片岡の一言で彼女の呼び方を決める事となつた。

片岡「自律思考固定砲台だから何か一文字を取つて…」

不破「自律…思考…じやあ律は？」

千葉「安直だな」

不破「ええ、可愛いよ」

前原「んで、お前はどうだ？」

自律思考固定砲台「律…とても良いと思います！では、これから私の事は律とお呼びください♪」

こうして『自律思考固定砲台』改め『律』となる事が決まつた。

桃花「龍騎くんが昨日言つていたのはこの事だつたんだね♪」

龍騎「まあな、でもここまで変わるとは思わなかつたが…」

桃花「…確かにね」

呼び方が決まり喜ぶ一同の中で転校生の余りの変わり様に困惑する俺と桃花。

龍騎「ま、とにかく昨日までのお前とは違うって事だよな？律？」
そう言い俺は律の画面を興味本位で触つた。

律「きやつ！」

龍騎「…きやつ？」

俺が触ると小さな悲鳴をあげ、顔を赤らめる律。

律「もう！女の子にいきなり触るものじやないですよ。

でも誰かに触れられるのは…嫌じやないです」

龍騎「お、おう…」

えつ？何これ？画面に触ると律にも感触が伝達するとかそういう事？

いやいや、どんだけ高性能にしてるんだあのタコ！？

桃花「……」(●—●)

片岡「と、桃花！目に光がないよ！？」

ブラックホールみたいになつてるよ！？」

律「皆さん！」

桃花の状況を無視する様に律が続ける。

律「私、殺せんせーに変えて貰う前の事覚えてます。

私は転校初日に皆さんに迷惑をかけた翌日の朝、龍騎さんが私を動かない様に拘束した事を…

でも今ならその気持ちが分かります。

龍騎さんが皆さんを私から守る為にやつたんだと…

そして私を拘束する時にごめんと言つてくれた事も…

だから私も皆さんに役に立ちたいんです！

なので、皆さんよろしくお願ひしますね♪

龍騎「お、おう。よろしくな…」

律の言葉に皆の間に優しい空気が流れ込む。

そう…

ただ1人を除いて…

桃花「……」

片岡「桃花…本当に大丈夫？」

桃花「……メグ……ドウヤツタラ2次元ニナレルカ竹林クンニ聞イ
テクル」

片岡「行っちゃダメ桃花！戻れなくなっちゃう！」

不破「そうだよ！それにこの『暗殺教室』自体既に漫画^{要するに2次元}とアニメ^{に2次元}になつてるから意味ないよ!!」

片岡「訳分かんないこと言つてないで桃花を止めてよ!!」

20. 転校生の時間 2時間目

『6月15日 2人目の「転校生」を投入決定。

満を持して投入する「本命」である。

事前の細かい打ち合わせは不要。

全て付添人の意向に従うべし。』

生徒達が皆帰った夕暮れ時、烏間は上司からのメールに目を通していた。

『了解した。』



——龍騎 side ——

↙↙↙E組教室↙↙↙

6月15日。

この日は朝から生憎の雨。

梅雨入りしたとはいえ雨が降っていると、人の気持ちは冴えないものである。

だからツッコむ気力も削がれるものなのだが…

殺せんせー「はい、皆さあんおはようございまあすう。
ホオムルウムを始めます」

前言撤回。

なんであんなパンパンに膨れてんだあのタコ…

龍騎の疑問の正体は、いま教卓の前に立っている殺せんせーにある。

何故だか不明だが、殺せんせーの顔は水風船の如く膨れている。

殺せんせー「先生湿度が高くなるとお水分を吸つてふやけるんです

すう」

皆が疑問に思うと、殺せんせーは顔を絞りながら答える。

つていうか生米か！

殺せんせー「それはともかくとして、烏間先生から転校生が来ると

聞いてますね？」

前原「あーうん、ぶつちやけ殺し屋だろうね」

殺せんせー「律さんの時は痛い目を見ましたからね。

先生も今回は油断しませんよ。

しかし、皆さんに仲間が増えるのは嬉しいことです

殺せんせーはE組に新しい生徒が増えることを喜んでいた。

原「そーいや律は何か聞いてないの？」

律の前の席に座る原が問い合わせる。

律「はい、少しだけ。初期命令では私と彼は同時投入の予定でした。

……ですがその命令は2つの理由でキャンセルされました

龍騎「キャンセル？何で？」

龍騎が律に疑問を投げ掛ける。

普通に考えれば、政府が派遣する転校生暗殺者であるならば同時に入れた方が暗殺の確率が上がりそうなものなんだが：

律「1つは彼の調整に時間がかかつたこと。

そして、もう1つは私が彼より暗殺者として圧倒的に劣っていたこと……」

律の言葉に教室中が緊張感を増す。

少なくとも律は殺せんせーの指を飛ばしたE組きつての実力者。その律が力不足と判断されるほどの力を持つ暗殺者とは一体……。

ガラガラガラツ

突如として開いた教室の引き戸：

生徒達は振り返りドアの方に注目した：

……白装束？

入ってきたのは白装束に身をまとっていた性別不明の人物。あれが転校生か？

すると、白装束の人物はスッと右手を前に出す。

ポンッ！

皆「「うおつ!?」」

鳩が出てきた。

：いや何で？

シロ「ハハハ、驚かせたね。私は転校生ではなく保護者…まあ白い
シロとでも呼んでくれ。」

シロと名乗った人物は自己紹介を始める。
ていうかなんで手品？

茅野「いきなり白装束で来て、手品やつたらビビるよね」

渚「うん、殺せんせーでもなければ誰でもビビるよ」

龍騎「…でもないみたいだぞ、渚」

渚「どういう事？」

龍騎「あれ」

渚の疑問に答えるように龍騎は指を指す。
指された方向に皆が目をやると……

殺せんせー「…………」（・――・）

殺せんせーは天井の隅に避難していた。

つていうかはぐれ○タル？

倒したら経験値凄い貰えるかな？

三村「ビビつてんじやねーよ殺せんせー!!」

岡島「奥の手の液体化まで使つてよ!!」

殺せんせー「いや、律さんがおつかない話するもので…」
だとしてもビビりすぎだろ。

つていうかあんな奥の手もあつたのか。

ホントどんな身体してんだ。

殺せんせー「は、初めましてシロさん。それで肝心の転校生は?」

シロ「初めまして殺せんせー。色々特殊な子でね、私が直に紹介させてもらおうと思いましてね」

そう言うとシロはE組の生徒達を見渡す。

シロ「……」

見渡していたシロはある一点で目を止める。

「なんだ?

殺せんせー「なにか?」

シロ「いや、みんないい子そうですね。これならあの子も馴染めやすそうだ。」

では、紹介します。おーいイトナ、入つておいで:」

シロは自分が入ってきた引き戸に目をやる。

しかし、そこに人の気配はない……。

龍騎「……!? 後ろだ!!」

ドガーンッ!!!

後ろに気配を感じた龍騎が叫ぶと同時に壁がけたたましい音と共に崩壊し煙が舞う。

その煙の中から転校生と思しき少年が入ってくる。

そして何事もなかつたかのようにすぐ近くの席に座る。

イトナ「俺は勝った。この教室の壁より強い事が証明された」

いやドアから入れつ!!

シロ「堀部イトナだ。名前で呼んであげて下さい。」

……マトモな転校生居ないのか。

この教室の転校生俺以外ちゃんと登場した奴いないんじやないか。まあそれはともかくとして……

カルマ「ねえイトナ君。ちょっと気になつた事があるんだけど今外から入ってきたよね?」

カルマがイトナに質問する。

どうやらカルマも俺と同じ事に引っかかつたみたいだな。

イトナは席を立ち、カルマの元へ歩み寄る。

イトナ「お前はこのクラスで2番目に強い。

けど安心しろ、俺より弱いから俺はお前を殺さない。それから……」

すると今度は俺の元へとやつてきた。

イトナ「お前はこのクラスで1番強い。

だがそれでも俺には及ばない。だから殺さない」

龍騎「……」

イトナの挑発とも取れる発言に少しだけ苛立つ。

イトナは殺せんせーの元へ向かつた。

イトナ「俺が殺したいのは俺よりも強いかもしない奴、この教室

では殺せんせー、あんただけだ」

殺せんせー「ヌルフフフ、力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ」

殺せんせーは呑氣に羊羹を食べながら答えた。

……だが次の瞬間、誰もが耳を疑つた。

イトナ「立てるさ。だつて俺たち血を分けた兄弟なんだから」

全員「「……き、き、き、兄弟イイイ!!」」

イトナの言葉に誰もが驚きを隠さず叫んだ。

イトナ「負けた方が死亡な、兄さん……」

イトナはそのままシロと共に教室を後にした。
ともあれ兄弟とは驚いた。

しかしどう見ても本当の兄弟とは考えにくい……

それにさつきの壁の破壊……

まさか……

◇◇◇

そして時間が過ぎ放課後。

机に囲まれた特設リングの中でイトナと殺せんせーは勝負の準備をしていた。

龍騎「……カルマ」

カルマ「んつ？」

2人の様子を見ていたカルマに話しかける。

龍騎「あのイトナつて奴、タコと兄弟つて言つてたがどう思う？」

カルマ「…さあね。でも龍騎の方が分かつてんじやないの？」

いつもの様に顎を突き上げてそう答える。

龍騎「相変わらず喰えない奴だな…まあこれだと言うのはあるんだがな」

桃花「これ？」

俺とカルマの会話を隣で聞いていた桃花が言う。

そんななか、シロは殺せんせーに1つ提案した。

シロ「リングの外に足がついたら死刑というのはどうかな？」

殺せんせー「…いいでしよう。ですがイトナ君、観客に危害を与えた場合も負けですよ？」

殺せんせーの発言にイトナは無言で頷いた。

その様子を見ながら龍騎は話を続ける。

龍騎「今朝見ただろ？ アイツに壊された壁を。

幾らボロい校舎とは言つても生身の身体であそこまでするのは無理がある。ところがアイツの身体には傷1つ付いていなかつた。

それと雨。外から来たはずなのにアイツの身体は一滴も濡れていなかつた。

さらに殺せんせーと兄弟。

この3点から導き出される結論は……

シロ「暗殺：開始!!」

シユバツ!!

シロの合図と同時に、殺せんせーの触手の1本が切り落とされる。しかし、生徒達の目は切り落とされた触手ではなく、イトナの頭に

釘付けになっていた。

桃花「嘘!?」

龍騎「…アソツも殺せんせーと同じ”触手”を使う暗殺者だ」
驚愕する皆の目の前には殺せんせーと同じ触手を頭から生やした
イトナ。

カルマ「なるほどねえ、殺せんせーと兄弟って言つてたのもこれで
合点がいくね」

龍騎「ああ、これで確定だ。流石のタコもビックリしてんじゃ…」
言葉を途中で切り上げた龍騎。

その視線の先では…

殺せんせー「…どこで手に入れた

…その触手をおおおおお!!」

殺せんせーの顔は、真っ黒に染まっていた。
初めて見たとしても分かる。

殺せんせーは激怒している。

…いや、激怒で済むレベルではないな。

シロ「君に言う義理はないね。しかしこれで君とイトナが兄弟とい
う事が分かつたる？」

殺せんせー「…どうやらあなたには聞かなければならぬ事がある
ようだ」

殺せんせーの腕が、再生した。

シロ「聞けないよ……だつて君は死ぬからね」

カツ!!!

次の瞬間、シロの手元が光る。

殺せんせー「にゅつ!!」

皆「!?

シロ「この光を近距離で浴びたら、君の身体は一瞬硬直する。

身体が動かなくなる……戦いの場でそれが意味する事……わかる
よね?」

それに呼応するかのようにイトナの触手攻撃が、殺せんせーの体を
貫く。

村松 「殺ったか？」

龍騎 「…いや、上だ」

龍騎の言葉に皆が視線を上に向けると、殺せんせーは天井へ回避していた。

イトナが攻撃していた場所には脱皮した抜け殻のみが残る。

シロ「なるほど脱皮か。そんな手もあつたな。

…でもその脱皮には弱点があるんだよ」

イトナの触手攻撃は、まだまだ続く。

シロ「脱皮と腕の再生直後では、相当なエネルギーを消費する。

この時点での身体的パフォーマンスはほぼ互角。

そして触手を破壊された事による精神的負担。

どちらが優位かは一目瞭然」

殺せんせー「くつ……」

殺せんせーは辛うじて攻撃は防ぐが、再びシロの服から圧力光線によつて、殺せんせーが一瞬硬直する。

すかさずイトナが殺せんせーに触手のラッシュを加える。

イトナの猛攻に殺せんせーの触手が2本3本と斬られている。

シロ「さて、触手が再生したところで、そろそろ死んでもらうよ……」

殺せんせー

なんでだろう……

殺せば地球が救われる……

俺たちにとつてはそれが1番のはず……

なのに……

なのに何でこんなに悔しいんだ……

後出しジャンケンみたいに来た奴に殺させたくない……

しかし、これは2人が合意した上で戦い…

横入りする事は許されない…

龍騎は自分の無力さに拳を握りしめる。

シロ「殺れ、イトナ！」

さつきとは段違いに威力のあるイトナの攻撃が、殺せんせーを襲う。

しかし…

やられたのはイトナだった。

殺せんせーを攻撃した触手は溶解液をかけたかの様に溶けていた。そして、床には緑色のナイフが散らばっている。

殺せんせー「おや？こんな所に落し物がありますねえ」

桃花「あれ？あれは……えつ、無い！」

桃花は制服のポケットに入っているはずのナイフを探すが、何処にも無い。

他の者も同様のようだ。

龍騎「対殺せんせー用ナイフ……そうか！」

桃花「どうしたの？」

龍騎「どういう経緯かは知らないが、イトナアイトナは少なくともタコと同じ触手細胞を持っている。

イトナ「ぐつ……」

まさか触手が破壊されるとは思っていなかつたイトナは目に分かるぐらい動搖している。

……ついでにテンパる所も同じだな。

次いで殺せんせーは自分が脱いだ抜け殻でイトナを包む。

そして……

殺せんせー「これで、終わりです」

イトナは窓をぶち割り、外へ放り出された。

しかし抜け殻に包まれているためダメージはなさそうだ。

殺せんせー「先生の勝ちです。ルールに従えば、イトナ君は死刑です。もう先生を殺せませんねえ。

生き返りたいのなら、このクラスで皆と一緒に学びなさいこの教室で学ばなければ君は私には勝てませんよ」

イトナ「勝てない……俺が……弱い……」

ぐあああああああああ!!!

敗北したことに腹が立つたのか、触手が暴走する。

イトナの目は真っ赤に染まり、触手は黒色へと変化する。

龍騎「……ちつ

イトナ「がああ!!!」

イトナが狂気の出で立ちで殺せんせーへ向かう……

ドガーンツツツ!!!

イトナ「ぐあ!?」

殺せんせー「にゅ!? 龍騎くん!」

龍騎「……残念だがここまでだ」

かに見えたが、窓から教室内へ戻ってきた所で龍騎により取り押さえられ、乗り掛られるようにうつ伏せになっている。

イトナ「ぐつ……!!」

必死の抵抗を見せようとするも、寝技で押さえ込まれている。

柔道のルールに則るならば相手に背中をつけさせなければならぬ
いがそうも言つてられない。

龍騎「悪いとは思つたが横入りさせて貰つたよ。

お前の気持ちは分かるがルールに則り負けたんだ。

第一、いまのお前はどう見てもまともに戦える状態ではない。

その証拠に俺に簡単に抑え込まれてるし、触手も制御出来ていな

い。

このまま戦つても結果は同じ……大人しく認めろ

それに、今まで戦われちゃ皆を傷つけちまう」

桃花「……」

殺せんせー・烏間「……」

イトナ「ぐつ……ぐあああ!!」

龍騎の言葉が聞こえていないのか、なおも足搔こうとするイトナ。

龍騎「さてと、シロさんでしたつけ?

早くコイツをなんとかして下さい。

そう長くは持たないですよ」

シロ「……分かってるよ」

プシュ!

イトナの首筋をレーザーのような物が貫く。

その瞬間、イトナは足搔くのをやめ意識を失う。

シロ「すいませんね殺せんせー。どうやらこの子は登校できる精神
状態でないようだ

転校初日に申し訳ないが、休学させて貰うよ

それと君、迷惑をかけたね」

シロが近付くと、龍騎はイトナの拘束を解き、引き渡す。

殺せんせー「待ちなさい! 担任としてその生徒を放つておけません
それに貴方にも聞きたい事が山ほどあります」

破壊された触手を再生した殺せんせーがシロに詰め寄り、立ち去ろうとするシロの肩を掴む。

ジユツ！

殺せんせー「にゅつ!？」

その瞬間、殺せんせーの触手は先程のイトナ同様溶解液をかけたかのように溶ける。

シロ「嫌だね帰るよ。それに心配せずともすぐ復学させるよ。

私が責任持つて家庭教師を務めてね」

そう言い残し、シロはイトナを担いで去っていった。

◇◇◇

シロが去つてしまふらしくして、生徒たちはリング代わりにしていた机や椅子を元の位置に戻していた。

龍騎「ふー、こんな所かな」

渚「だね、それよりも龍騎くん大丈夫なの？」

イトナくんを押さえ込んでいたけど

龍騎「まあな、制御出来ていないとほいえ力は尋常じゃなかつたら正直やばかつたけど……」

それよりもアイツの方が大丈夫なのか？」

渚「ああ……あれねえ……」

龍騎と渚が呆れた目で見る先には…

殺せんせー「恥ずかしい、恥ずかしい……」

教卓の前で顔を覆つた赤面顔の殺せんせーがいた。

龍騎「なんであんな状態になつてんだ？」

岡野「なんか掴み所のない天然キャラで売つていたのにシリアルスな展開にしてしまつたのが恥ずかしいんだつて」

さつきまで殺せんせーの近くの机を直していく岡野が教えてくれた。

つていうか自分で天然キャラとかいつてんじやねえよ、腹立つな。

龍騎「まあ天然だのシリアルスだのはさておき……

アンタ：「一体何なんだ？」

龍騎が問い合わせると、教室が静まり返る。

殺せんせーと初めて対面して以来、クラスの全員が思っていた疑問だろう。

静まり返った教室に聞こえるのは、外で降っている雨の音のみ。

殺せんせー「……仕方ない。実は先生：

人工的に造られた生物なんです!!!」

全員 「「…………でしようね…………で?」」

衝撃の事実とばかりに発表した殺せんせーを他所に、クラス全員の反応は薄い。

まあそりやそうなるわな。

殺せんせー「反応薄つ!?これは衝撃的な告白じやないですか!?

龍騎「俺たちが知りたいのはアンタが何の目的で生まれて、なんでここに居るのかだよ」

埒があかなくなつたのか、龍騎がクラス全員の真の疑問を投げ掛ける。

殺せんせー「……残念ですが、ここで話したところで何の意味もありません。

地球を殺れば何にもなくなりますし、あなた達が私を殺せば私の過去を知ることなんていくらでもできる」

龍騎「…何が言いたい」

生徒たちの沈黙を破るように龍騎が聞く。

殺せんせー「わかるでしよう……私を殺してみなさい。

暗殺者とターゲット、それが先生と君達を結びつける”絆”です。

答えを知りたいのなら……君達は殺して知るしかないのです！」

龍騎「……」



龍騎「烏間先生」

烏間「ん、どうした？」

放課後、1人でいた烏間の元に龍騎が訪れる。

龍騎「お願ひがあります……俺に稽古をつけてくれませんか？」

烏間「……理由を聞こうか」

龍騎「…このクラスに編入してから1ヶ月あまり経ちました。

でもその間、俺はこの環境に浸かり過ぎていたのかもしれません。

もちろん悪い意味ではありませんが。

…そして今日、アイツらが現れて思い出したんです。

俺たちは先生を殺す”暗殺者”なんだつて：

しかし、アイツを殺すには俺はまだまだ弱い。

実際今日もイトナを押さえつける事は出来ましたが、アイツが万全の状態だつたらやられていたのは俺でした。

だから強くなりたいんです。

そして：

”皆を守れる”…そんな人間に俺はなりたいんです

龍騎のいつにない真剣な眼差しが烏間に突き刺さる。

烏間「…編入してからの君を見ていて思っていた事がある。

今、君は”皆を守れる”と言つたな？

先程といい修学旅行の時もそうであつたが、君は過剰すぎるほど誰

かを或いは何かを守ろうと必死になつてゐるようと思える。

しかし、俺にはそれが”正義感”から来るものでなく、君が自分自身の何かを失う事を防いで：いや、恐れているように感じる。

……君の”根底”にあるものはいつたい何だ？」

烏間の鋭い視線が龍騎に突き刺さる。

龍騎「……」

烏間の質問に珍しく口をこもらす。

烏間「…まあいい、稽古の件は了解した。

強さを求めるのは何も悪い事ではないからな。

しかし、何れは君の方から話してくれるのを待つてゐる」

龍騎「…ありがとうございます」

烏間に一礼してその場を立ち去ろうとした時、

磯貝「龍騎」

龍騎「んつ、磯貝…それに皆も」

龍騎は自身の名を呼ぶ声の方を向くと、そこには磯貝や桃花たちの姿があつた。

龍騎「どうしたんだ、大勢集まつて？」

倉橋「なんか龍騎くんが真剣な表情で教室を出て行つたのを見て心配で付いてきたんだよねえ桃花ちゃん？」

桃花「ひ、陽菜ちゃん！ それ言わない約束でしょ／＼／＼

慌てて倉橋の口を防ごうとする。

龍騎「……さつきの話聞いていたのか？」

前原「んつ？ いや、烏間先生となんか話してんのは見えたが、会話までは聞こえなかつたぜ。何の話してたんだ？」

どうやらさつきの話は皆は聞いていなかつたようだな。

龍騎「そうか。ならいい」

磯貝「いや良くはないだろ。ちゃんと話せよ」

龍騎「ああそうだな。悪い悪い」

龍騎は先程までの烏間との話を皆にする。

最後の部分を伏せて：

磯貝「…なるほどな。どうやら考える事は同じみたいだな」

龍騎 「同じ……って事は」

すると磯貝が俺の横を通り過ぎて鳥間先生の前に立つ。

磯貝 「鳥間先生。俺たちにも教えてくれませんか。

暗殺の技術を…」

前原 「今日のイトナを見て思つたんだ。

他の誰でもない…：

俺たちの手で殺りたいんだって…」

片岡 「だから限られた時間で殺れる限り殺りたいんです。

私たちの担任を…」

磯貝、前原、片岡と続き桃花も口を開く。

桃花 「今まで暗殺しろとか言われても何処か他人事だつたんです。

どうせ誰かがやるんだろうって…

でも、今日で全て変わりました。

殺せんせーを殺してまだ何も見えない答えを見つけたいつて…

それに私強くなりたいんです。

誰かに守つて貰うだけでなく……

”大切な人を守れる” …そんな人間に私はなりたいんです！」

龍騎 「……」

磯貝 「だからもつと教えてください。暗殺の技術を!!」

E組生徒たちの熱い視線が鳥間に突き刺さる。

鳥間 「……意識が変わったな。

いいだろう、放課後希望者を対象に追加で訓練を行う！」

全員 「「はいっ!!」」



前原 「よつしや気合が入るぜえ!!」

龍騎 「……」

そんな皆を龍騎はひどく落ち着かない気分で見つめる。

桃花 「龍騎くん」

龍騎 「…何だ？」

そんな龍騎の横から桃花が前触れもなく話し始める。

桃花 「実はね皆の前であんな事言つたけど、私が殺せんせーを殺せないのは私自身が1番分かつてゐる。だからあれは嘘になつちやうのかな？」

でも、最後に言つたのは私の本当の気持ちだよ。

龍騎くんに初めて会つた時から今日まで事あるごとに私を守つてくれて本当に嬉しかつた。

けど……それじや駄目なんだつて氣付いたんだ。

大切な”誰かさん”に守られるだけでなく、私も大切な”誰かさん”を守つてあげたい……

それが今私の出来る精一杯の事なんだと思うんだ♪

そう言い満足そうに顔をほころばせる。

桃花 「そ、そういう訳だから私も本当に頑張るからね！ほ、本当に本当に頑張つちやうんだからね！！//／＼」

そのまま突風の如く走り出し遙か彼方へと消え失せる。

龍騎 「…守られるだけではなく守つてあげたい…か」

鳥間 「君はどう思つた？」

話を聞いていたのが鳥間先生が俺に話しかける。

龍騎 「……どうなんですかね」

鳥間 「……皆変わろうとしているんだ。

君も”変わらなければならない”んぢやないのか？」

それだけ言い残し鳥間先生は去つていつた。

変わらなければならぬ…か…

何なんだろうな…

龍騎は雲の合間から顔を覗かせる青い空を見上げた。

2.1. 球技大会の時間①

梅雨明けの公式発表が出て数日。

空は真っ青に晴れ上がり、夏本番を迎える旧校舎でも衣替えを終えた生徒たちに太陽が留保なく照りつけていた。

殺せんせー「クラス対抗球技大会ですか」

そんな夏本番を迎える柵ヶ丘中学ではこの時期恒例の球技大会が開催される。

殺せんせー「健康な心身を養うのは大いに結構!!

⋮ただ、これはどういう訳ですか?」

そう言う殺せんせーの触手には1枚の紙切れ。

『球技大会3年男子野球』と書かれた紙には3年の各クラスがトーナメント方式で戦う旨が記されている。

しかし、A～D組までエントリーしているが、そこにE組の名が無い。

三村「E組はエントリーされないんだよ。その代わり、大会の最後に野球部、女子はバスケ部とエキシビションマッチをやるんだ。まあ見世物つて奴だな」

殺せんせー「なるほど、いつものやつですか…」

片岡「そういうこと」

ガタンッ

音のする方向に目をやると、寺坂団長が席から立ち上がっていた。

寺坂「俺ら晒し者とか勘弁だから適当にやつといてくれや」

磯貝「お、おい寺坂！」

磯貝の制止にも耳を貸さず教室を後にする。

前原「野球つてなるとウチで頼れるのは杉野ぐらいか? そういうや龍騎はどうなんだ?」

龍騎「……」

前原「…龍騎?」

龍騎「えつ? ああ悪い、ぼーっとしてたわ。」

野球は殆ど素人だな」

桃花 「……」

前原 「そうかあ。なんか勝つ秘策とかねえの杉野？」

杉野 「……無理だよ、ウチの野球部滅茶苦茶強いんだ。

……だけどさ勝ちたいんだ俺。

好きな野球では絶対負けたくない。

勉強出来なくて野球部追い出されて、負けたくない思いがより一層強くなつた。

……だからコイツE組らと一緒に勝ちた……」

殺せんせー「ワクワク♪ワクワク♪」

杉野の話に集中している間に殺せんせーはお得意のスピードを生かして野球服に着替えていた。

その触手にはバットやらボールやら立ちやぶ台やらを持つていて。つていうか立ちやぶ台はいらねえだろ。

殺せんせー「ヌルヌル。先生一度熱血コーチをやってみたかつたんです！」

ああご心配なく。殴つたりはしないので、立ちやぶ台返しで代用します」

その立ちやぶ台はそういう意味か……

前原 「でもよ殺せんせー。俺たちは殆ど素人だぜ。

大会まで時間も無いのにどうするんだ？」

殺せんせー「最近の君たちは目的意識をしつかり持つようになりました。

その心意気に応えて殺監督が勝てる作戦を授けましょう！その方法は……」

◇◇◇

……昼休み……

龍騎 「……」

俺は校舎横の芝生で寝そべりながら一人考えに老け込んでいた。

変わらなければならぬ……

変わる……

変わるつて一体なんだ……

桃花 「龍騎くんちよつといい?」

するとそこに桃花が視界の端から現れる。

龍騎 「んつ? どうした?」

俺は起き上がり胡座をかくと、その横に桃花は座った。

桃花 「気のせいかもしないんだけど、龍騎くん最近元気ないなあつて思つてさ。イトナくんの一件があつてからは特に……」

心配そうな桃花の瞳が俺を見つめる。

龍騎 「……うか? 俺はいつも通りだと思うけどな」

嘘をついた……

正直元気がないと自分でも思うし、思う事が無いわけではない……

でも俺が胸中を曝け出したとしても何の解決にもならないだろう……

⋮

何よりこれは俺の問題……

他の誰かを巻き込む訳にはいかない……

龍騎 「そういう訳だから勘違いだ。気にする必要はねえよ」

桃花 「……そう」

龍騎 「……」

桃花 「……」

しばしの沈黙が2人を包む。

そして次に口を開いたのは桃花だつた。

桃花「龍騎くん……龍騎くんは何でもかんでも1人でやつちやうから私いつも凄いなあつて思つてたんだ。

困っている誰かを放つておけない所も凄いと思う。

でも偶には誰かの事だけじゃなくて自分の事も考えてね。

少なくとも私は龍騎くんの力になりたいって思つてるからね。

なりたいつて

龍騎「……そうか」

桃花 うん！だからいつでも言つてね♪

龍騎
「ああ」

何だろうなこの気持ち…

止手へな戻えなハナビ

放課後

殺ヒツチャリは時速300kmの球を投げる！

殺せんせ」（三）「そういふがうござ一

殺せんせー（遊）「いえいえそちらが」

殺内野陣は分身で鉄壁の守備を敷く!!

前原 「っしゃあこい！」（△▽）／

殺せんせー（捕）ーーの前街で女子大生をナンバしていましたかも

のの見事に相手にさせていませんでしたねえ：無様でしたよ」
前原「ぐはっ!?」（。▽。）・；：

殺キヤツチヤーは囁き戦術で相手の集中を乱す!!!

…とまあこんな感じで今は殺監督による熱血野球指導（？）が行われている。

つていうか前原の奴そんな事やつてたのか。

前原「つ…次、龍騎の番…な…」

今にも倒れそうな前原がヨロヨロとバッター・ボックスを後にする。お大事に。

龍騎「さてと、んで殺キヤツチヤー？」

俺にも囁き戦術を使うのか？」

バッター・ボックスに入った俺は、そばでしゃがむ殺キヤツチヤーを横目に見る。

殺せんせー「いいえ、君の場合は囁くよりもちゃんと話した方がいいでしよう」

龍騎「どういと？」

殺せんせー「君は先日、鳥間先生に稽古をつけて欲しいと頼んだ。そうですね？」

龍騎「そうちがターゲットには都合が悪かったか？」

殺せんせー「いえいえ、暗殺のために強くなるのは結構ですし、それを止める気など微塵もありません。

ただ：一つ言うならば、”なぜ君は一人で行動したか”という事です」

龍騎「…どういう意味だ？」

殺せんせー「君は途中編入ですが、紛れもなく3年E組の一員です。そして君の頑張る姿は賞賛に値する。

だがその一方で君はクラスの皆さんを頼る事なく単独行動している節がある。修学旅行の一件が良い例です。

君の行動には矛盾があるとは思いませんか？」

そして…その核となる何かが君の奥底にあるように先生は思うんですよ」

殺せんせーは先日の鳥間や昼休みの桃花と同じく龍騎のうちに秘

めた何かに大なり小なり気付いているようだった。

龍騎 「…^E組ここは勘が鋭い奴の溜まり場なのか？参っちゃまうぜ。

：だが先生といえども生徒の奥底まで探るのはルール違反じゃないのか？」

殺せんせー「…なるほど、確かに君の言う通りです。

だが、それは一般的な場合。

ここは暗殺教室。生徒も特殊なら先生も特殊でなければならぬ。なにより先生は悩んだり困っている生徒を放つて置くような真似が出来ません……いや、許せません。

イトナくんの件もそうです。直ぐには無理でも必ずイトナくんを正真正銘のE組の生徒として迎え入れます。

君は烏間先生との会話で”強くなりたい”と言つたはずです。では、その意気込みを”形”にして示してみなさい」

龍騎 「…つまりどうしようと？」

殺せんせー「そうですね…ではせつかく球技大会に向けて練習しているんです。

本番当日は皆さんと協力して勝ちなさい。

これは先生からの”特別課題”です。

しつかりやり遂げなさい！」

そう言う殺せんせーの顔にはいつものおちゃらけた雰囲気は微塵も感じられず、ただ真っ直ぐと”悩める生徒”を見つめる”1人の先生”であった。

龍騎 「…はあ、分かつたよ。

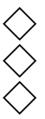
だつたら勝てるようしつかり特訓つけてくれよ」

殺せんせー「ヌルフフフ、望むところです。では早速…：

にゅおどりや――――――!!!

殺ピッチャーは時速400kmの球を投げる!!!

龍騎 「何で俺の時だけスピード上がつてんだよ!!」



そして迎えた球技大会当日。

3年男子の野球は前評判通りA組の優勝で幕を閉じた。

いや、ある意味ではこれから幕が開くと言つてもいいだろう。

なぜなら、今から本校舎生徒が楽しみにしていた野球部との試合が

行われるからだ。

「テメエらE組なんだから悪足搔きすんじゃねえぞ！」

「お前らE組には」完全なる敗北^{見せしめ}がお似合いなんだからな！」

「なんなら土下座して俺らに「勘弁してください！」って頼んでみるかあ？」

まあ出るわ出るわの罵詈雑言。

理事長の教える賜物だなこれは。

？「よお杉野、それに神道」

過激なブレイングが飛び交う中、柵ヶ丘中学の野球部ユニフォームを身に纏つた男が話しかける。

龍騎「よお進藤か、久し振りだな」

進藤「ああ、しばらくだな」

彼の名前は進藤。

柵ヶ丘野球部の主将にしてエースで4番の3年生。

その年齢離れした野球センスで既に名門校からもスカウトが来てるとか。

杉野「知り合いなのか神道？俺は元野球部だから知つてるとして」

龍騎「ああ、コイツとは2年の時に同じクラスだったからな。

んで、野球部の大エース様が何の用だ？」

進藤「ハハハッ。ただの試合前の挨拶だよ。

まあ挨拶がてら言いたいこともあつたしな」

杉野「言いたいこと？」

進藤「ああ：お前らE組は良いよなって思つてな」

それまで好青年のように話していた進藤の顔付きが一変する。

龍騎「良い？」

進藤「俺たちは野球と勉強を両立させなければならないが、お前ら

は勉強さえやつとけば良いからな。

まあその勉強つて言つても底辺の話だがな。

学力と体力を兼ね備えた”エリート”だけが選ばれた者として人の上に立てる。お前らはそのどちらも無い”落ちこぼれ”だ。

：いや、神道。お前はどちらも兼ね備えていたが、自ら捨てたんだつたな。

ある意味杉野たちよりタチの悪い”馬鹿”だな。

人は誰かが上に立つていなけりや生きていけない。

強者による弱者の”支配”。今日それをお前たちに分からせてやる」

そう言い終えると進藤は悠々と自軍ベンチへと引き返していく。

杉野「ぐつ…」

杉野たちは苦虫を噛み潰したように進藤の背中を睨む。

龍騎「天は人の上に人を造らず」…この言葉知ってるか？」

進藤「…何だと？」

進藤は足を止め龍騎の方へ振り向く。

龍騎「福沢諭吉の著書『学問のすゝめ』の冒頭に登場する一説だ。

人間はすべて平等であつて、身分や家柄、職業などで差別されるべきではないという意味らしいが俺はそうは思わない。

全て平等なんて人間は世界のどこにも存在しない。

必ずどこかで力関係がハツキリする場面がある。

格闘技だろうが勉学だろうとな。

まあ時にはそれが逆転することだつてあるだろうがな。

だが、だから力がある者^{強者}が力のない者^{弱者}を”支配”していいという理

由にはならない。お前は自分の事を強者強者というがそれは

ここだけの話だろう？

俺たちの事も碌に知らないで踏ん反り返つてる様はさしづめ…

『井の中の蛙大海を知らず』…と言つた所か。

なあ蛙の大エース様？」

龍騎の言葉に進藤の額に血管が浮く。

進藤「…テメエのそういう所が前から気に食わねえんだよ。

E組に落ちてちょっとはマシになるかと思つてたが、馬鹿はどこまでいつても馬鹿のようだな。

せいぜい吠え面かかねえことだな!!」

明らかにイラついた様子で今度こそ自軍ベンチへと引き上げて行つた。

龍騎「悪りいな。どうやら向こうのエースに火付けちまつたみたいだ」

杉野「つたく。…けどこれで俺たちも火が付いたぜ。この戦い死んでも負けらんねえぜ!!」

磯貝「ああ！よし、やるぞ皆!!」

全員「〔〔おおーーー!!〕〕」

磯貝の鼓舞に士気が漲る一同。

龍騎「ところでやるのは良いが殺監督どこ行つたんだ？ チームの指揮取るんじやなかつたのか？」

渚「あれだよあれ」

渚の指差す方向に目をやるとファウルグラウンドに転がる白球に紛れた殺監督が…。

つていうかボールの縫い目とかのペイントしてあるがあれで誤魔化せると思つてんのか？

すると殺監督の顔色が黄緑→紫→橙の順に変化する。

渚「なんか顔色でサイン出すんだつて」

龍騎「つくづく便利な奴だな。んで、何だつて？」

渚「えつと……「殺す氣で勝て」…だつてさ」

龍騎「へつ…上等だ。さあ……やるか」

エキシビションマッチ

野球部 v S E組

いざ、プレイボール!!

22. 球技大会の時間②

龍騎 Sid e

審判「プレイボール！」

試合前の一悶着も終わり、E組の先攻で試合が始まる。

1番バッターはクラス一の俊足を誇る木村。

ここで遅ればせながらE組のスターティグラインナップをご紹介しておこう。

1番	サード	木村
2番	キヤツチャ一	渚
3番	ショート	磯貝
4番	ピッチャー	杉野
5番	センタ一	龍騎
6番	セカンド	前原
7番	ライト	岡島
8番	D H	千葉
9番	レフト	カルマ
10番	ファースト	菅谷

※何でか知りませんが打順が10番まで有りました。

実況「さあ一回表、E組の攻撃です。野球部のエース進藤君の前にどう足搔くのか？さつさと負けを認めた方がいいんじゃないかあ？」

（ハハハツ）

実況付きとはえらく豪勢だな。

まあ当然向本校こう側舎の人間だがな。

バシツ！

審判「ストライク！」

ピッチャー進藤が投げた球がキヤツチャーミットのど真ん中に収まる。

磯貝「流石にでかい口叩くだけあつて速いな」

杉野「そりや140km出てるからな。中学生じや打つのは容易じやないよ」

龍騎「確かにな…だがそれは並みの中学生だつたら…だろ?」

龍騎は不敵な笑みを浮かべる。

磯貝「だな。それに俺たちにはもつとでかい敵がいるんだ。
こんな所で躊躇いてちやあの先生は殺さない。

俺たちは…俺たちの戦いをやろう!」

杉野「おうよ。んで、そんな俺たちの敵の指示は何だ?」

殺せんせー「ヌルフフフ」

俺たちが殺監督を見ると、赤→紫→ピンクの順に変色する。

木村「りよーかい」

実況「さあ見事な球を投げた進藤くん。バッター木村に対し第2球
を投g!?

コンツ

進藤「なつ…バント!?

意表を突かれた野球部は初動の反応が遅れ木村は悠々セーフ。

進藤「くつ…小賢しい真似を」

磯貝「いいぞナイスバント! 続けー渚!」

2番は渚。

ピッチャーの杉野とよくキヤツチボールをしているということでも
マスクを被る。

そんな渚に対する殺監督の指示は…

コンツ

再びバントだつた。

これも上手く決まりセーフ。

殺せんせー「ヌルフフフ。強豪と言えども中学生。バント処理はプロ並みとはいかないでしようね」

「お、おいおい…なんか空気になつてきたぞ…」

試合を観戦していた本校舍生徒たちの間に動搖が広がる。

前原「へつ！こちとらあのバケモンのバケモンみたいな球で特訓してんだ！」

コンツ

そして3番磯貝による三度のバント攻め。

これもセーフとなり、無死満塁となる。

前原「よつしやあ！ 続け杉野!!」

杉野「おうよ！」

4番はピッチャーの杉野。

向野こうさんのエースが4番ならこつちのエースの4番だ。

何よりこの試合に勝ちたい気持ちは杉野は誰よりも強いからな。

進藤「な…何なんだコイツら」

動搖を隠しきれない進藤は杉野に対しボールを投げる。

杉野「確かに武力ではお前には敵わねえ。けどたとえ弱者でも狙いすました一差しで巨大な敵にだつて立ち向かう事が：」

出来る!!

カキーーーン!!

杉野の打った白球は右中間を深々と破り、走者一掃のタイムリースリーベースだ。

杉野「よし！頼んだぜ神道!!」

龍騎「任しどけ」

杉野に続くは5番バッターの龍騎。

その龍騎がバッターボックスに入ると…

? 「あつ！男子勝つてるよ！」

何処からともなく聞こえた聞き覚えのある声。

見るとバスケの試合をしていた女子たちが集まっていた。

中村「おつ矢田ちゃん！ちょうど旦那の打席だよ。

なんか言つてやんなよ！」

桃花「だ、旦那つて／＼／＼

中村に押されて桃花が前に出てくる。

桃花「えつと…その…う…打つて!!」

龍騎「ああ…ドデカイの行くぞ」

女の子に応援されたとあつちや打たない訳にはいかないな。

進藤「くつ…くそおお!!」

進藤は格下に見ていた杉野に打たれた事に苛立ちながら龍騎に怒りに任せた一投を放じる。

進藤「しまつた!!」

杉野「危ねえ!?」

怒りに任せたためか進藤の投げた悪球は龍騎目掛けて突き進む。このままでは頭部への直撃は必至だ！
だが……

龍騎「ふんっ！」

ガキー――――――ン!!

全員「〔はつ!?!〕？」（。丁。）

自分の頭目掛けて突き進むボール。

それを龍騎はまるで刀で一刀両断するかの如く打ち返す。
そしてボールは青く澄んだ空へと消えていった。

龍騎「おおー飛んだ飛んだ♪

んで杉野？さつき何か言わなかつたか？」

杉野「…いや、何でもねえ」

磯貝「ほ…ホームランだ!!」

全員 「「よつしやあーーー!!」

進藤 「ば…馬鹿な」

失投とはいえ自分の球を有り得ない打ち方で、しかも有り得ない距離まで飛ばされた進藤はマウンドに崩れ落ちる。

そんな進藤を気に止める事もなく悠々とダイヤモンドを一周し、ベンチへと戻ってきた。

杉野 「んだよ、俺の良いとこ全部持つてくんじゃねえよ」

龍騎 「えつ? だつてお前「頼んだぜ」って言つてたじやねえか」

杉野 「そういう事じやねえよ…まあいいわ。

ナイズホームラン神道!」

龍騎 「お前もナイスタイムリー杉野!」

バチンッ!!

2人はハイタッチを交わす。



一方、所変わつてこちらは女子陣。

桃花 「……カツコいい」

桃花はベンチに帰つてきた龍騎を見つめる。

中村 「こりや更に惚れちやうねえ〜…………

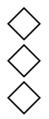
……矢田ちゃん?」

桃花 「……」(*、▽、*)

片岡 「……聞こえてないわよ莉桜」

中村 「……こりや重症だわ」

そんなやり取りがあつたとかなかつたとか:



磯貝 「ともかくこれで5—0だ! これだつたら行けるぞ!」

磯貝たちが盛り上がりをついていると…

カルマ「…ねえ龍騎」

龍騎「…ああ分かつて」

盛り上がる一同を他所に2人の視線は相手ベンチに釘付けになつていた。

龍騎「早くも出てきたな…ラスボスが」

2人の視線が指すもの。

それは学園の創始者でE組にとつての天敵でもある理事長であつた。

カルマ「まあ理事長が出てきたとしても5—0。

何とか逃げ切れるんじやない？」

龍騎「…だといいがな」

その後、野球部監督が病氣（？）であると分かり、理事長が代理監督を務めることとなり、今はマウンド上で円を組んでいる。

そして円を解くと、野球部の面々の顔は目に見えて”変わっていた”。

そう…理事長の手によつて”変えられた”のだ。

進藤「ぬううん!!」

バシ——ーン!!

先程とはうつて変わり、進藤の球威は明らかに上がつていた。

岡島「やつべえな。アイツまじで来てんぞ」

龍騎「ああ。しかもそれだけじやない」

先程のE組の執拗なバント攻撃に対抗してか、野手が全員前進守備を敷いている。

そう、外野も含めてだ。

磯貝「流石に見抜かれてるな」

岡島「でも駄目だろ、あんな至近距離で！」

カルマ「ルール上ではフェアゾーンならどこ守つても自由だよ。ま、審判が注意すれば話は別だけど…」

龍騎「当然審判もあつちの手駒。
到底期待できないな」

前原「クソツ！どうすんだよ殺監督？」

頼みの殺監督はというと…

白（・ー・）→白…（ー・ー・）→白…（ーーーーー）

打つ手なしかよつ!!

その後、完全に復活した進藤の前にE組打線は完全に沈黙し攻撃を終えた。

しかしE組とて負けてはいない。

エース杉野の見事な変化球に野球部打線のバットが次々と空を切る。

龍騎「いいぞ。これなら何とか最終回まで持ちそうだな…んつ？」
センターを守る龍騎はふとレフトを守るカルマの方を見る。
その足元には殺監督がひよつ〇りはん宜しく顔を出している。

龍騎「何してんだあの2人？」

この回杉野は野球部打線を三者凡退に抑えて打席には9番のカルマがに入る。

カルマ「ねえこれつてずるくない？」

バッターボックスに入る前にカルマが何やら抗議する。

理事長「…何がだね？」

カルマ「こんだけ邪魔な守備してんのに審判も何も注意しないなんてさあ皆も変だと思わない？」

あーそつかあ、お前ら馬鹿だから野球のルールとか分かんないかあ

？」

ブチツ！

グラウンド周辺の彼方此方からそのような音が聞こえたような気がした。

そして…

「小せえ事でガタガタ言うなE組!!」

「文句あんなら勝つてから言え馬鹿が!!」

何してんだアイツは…
いや……なるほどな…

◇◇◇

進藤 「はあああつつつつ!!!」

グワラキーーーーン!!!

2回の攻撃を無得点に終わつたE組は次の野球部先頭打者の進藤
が放つた打球はセントナーを守る俺の頭上を
悠々と超えて特大のホームランとなる。

つていうかなんつう打撃音だよ。

どつかの葉っぱ咥えた関西弁バッターじゃあるまいし。

これで火がついたのかこの回野球部は一挙3点を奪つた。

次の回でももはやプロでも打てないんじやないかと思われる豪速球で杉野以下のバッターを捩じ伏せる。

そして迎えた野球部最後の攻撃。

だが、ここでバッティング以外のもう1つの弱点が露呈する…

コンツ

杉野 「あつ!?

素人に対してまさかのバント攻撃を仕掛けた。

野球部ですら手こずっていたバント処理。それを野球素人が捌け

る訳もなく悠々セーフとなる。

まあコツチが先にやつた手だ。向こうは大手を振つて使えるつて訳だ。

その後も先程の仕返しとばかりに執拗にバント攻撃をする野球部。

一死満塁の一打サヨナラの場面で打席には：

進藤「踏み潰してやる…杉野…神道オオオ!!」

そこにはもはや鬼と化した進藤。

つていうか理事長の洗脳教育つてあそこまでなるのか？なんかヤバイ薬とか使つてねえよな？

ここで一度E組ナインがマウンドに集まる。

杉野「どうする？やつぱり進藤は敬遠するか？」

磯貝「押し出しで1点差にはなるが背に腹はかえられないな…」

龍騎「いや、その必要はない」

敬遠で固まりかけた皆を龍騎が止める。

前原「とは言つてもよおあんな鬼みたいな奴どうすんだよ？」

龍騎「その鬼を退治するためにきびだんごを撒いておいたんだろ、

桃太郎？」

俺はマウンドの外で立つていたカルマに聞く。

カルマ「殺監督の指示でね」

磯貝「それでどうするんだ？」

カルマ「それはねえ…」

◇◇◇

実況「さあ試合再開です。打席には進藤くん！

E組の悪巧みもここまでかあ！？

……あ？……な、何だこの前進守備は！？

実況が驚くのも無理はない。

進藤の文字通り目の前には本来居るはずのない外野手の龍騎とカルマの姿があつた。

野球部の前進守備を今度はE組がやり返した形だ。

カルマ「明らかにバッターの集中を乱す位置にいるけど…」

龍騎「さつきそ^{野球部}つちがやつた時、何にも言わなかつたよな?」

龍騎・カルマ「文句はないな(ないよね)理事長?」

俺とカルマは挑発するように理事長に指を立てる。

理事長「ご自由に:選ばれた者はこれしきで乱れない」

まああの理事長なら当然の反応だな。

龍騎「んじやあお言葉に甘えるか?」

カルマ「そうだね」

その位置で試合再開するかと思いきや2人は更に近づいた。
いやもはやゼロ距離だ。

バットを振れば確実に骨を折れる位置に2人は立つた。

カルマ「気にせず打てよスーザンスター」

龍騎「俺たちは鬼退治に来た桃太郎一行だ。

あと杉野の球は邪魔しないから安心しろ」

カルマ「桃太郎一行つて事は俺が桃太郎で龍騎は猿つてところ?」

龍騎「猿は岡島だろ?エロ猿」つてよく言うだろ?」

カルマ「なるほどねえ、んじやあ猿は岡島つて事で♪」

進藤「……」(。△。)

先程の鬼の形相は何処へやら。

目の前に悠々と立ち、おまけに意味不明の会話をする2人。
もはや思考停止に近かつた。

理事長「下らないハツタリだ、構わず振りなさい。

当たつても打撃妨害を取られるのはE組だ」

進藤「ぐつ:」

杉野の放つた1球目をワザと大振りして空振りする。

俺たちをビビらす為だろうな。

だが:

龍騎・カルマ「遅いな(ね)」

ヒュツ

これを難なく交わして見せる。

殺せんせー「あの2人はE組でもトップクラスの運動神経と動体視力を持つている、あと度胸もね。

バットを交わすくらいなら造作もないでしよう」

カルマ「駄目だよそんな遅いスイングじや…」

龍騎「俺たちにはカスリもしねえぞ。

次は…本気で当てる気でやってみろよ」

進藤「ひい…」

この時点では進藤の身体は理事長の戦術に付いていく状態ではなくなつた。

そして…

進藤「う…うわあーーー!!!」

コツンツ

杉野の放った2球目を辛うじてバットに当てる。

カルマ「よつと…渚くん！」

それをカルマがキヤッチすると渚に渡しワンアウト。

磯貝「三塁！」

渚からサードの木村に渡りツーアウト。

杉野「一塁だ！ランナー走つてねえからゆつくりでいいぞ！」

本来一塁へ走らなければならぬ進藤は腰が抜けたのかその場で尻餅を着いていた。

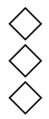
木村「りよーかい！」

サードの木村の投げたボールはワンバウンド、ツーバウントし

ファーストの菅谷のグラブに收まりスリーアウト。

トリプルプレーの完成だ。

審判「ア、アウト！ゲームセット!!」



全員 「「やつたーーー!!」」
劇的な(?)トリプルプレーで幕切れとなつたエキシビションマッチ。

勝利したE組は喜びを爆発させる。

進藤 「……」

杉野 「進藤」

しゃがみ込んだまま動かない進藤に杉野が声を掛ける。

杉野 「ゴメンな、滅茶苦茶な試合しちまつて。

でもこれでお前に勝つたなんて思つてねえからよ」

進藤 「…だつたら何でここまでして勝ちに来た?

俺より強いと思わせたかつたんじやなかつたのか?」

龍騎 「それはちょっと違うな」

進藤 「神道…」

龍騎 「話の途中だが邪魔するぞ。

進藤。試合前に俺がお前の事を『井の中の蛙大海を知らず』って言つたの覚えてるか?」

進藤 「…それがどうした?」

龍騎 「実はあれには後に続きが作られていてな…

『井の中の蛙大海を知らず…されど空の深さを知る』って続くんだ。
狭い世界にいたとしても、空が雄大だと知ることができることができるって意味だ。

まさに俺たちの事だと思うんだよ」

進藤 「…どう言う意味だ?」

龍騎「俺たちはあのオンボロ校舎の隔離された空間でしか世界を知らなかつた。

だが今日のため各々練習を積み重ねたんだ。

杉野は変化球を磨き、

渚はそれを捕れるように、

磯貝たちはお前の球をバント出来るよう頑張つた。

まあ途中からは手も足も出なかつたがな。

しかし今日勝つた事でそれが無駄じやなかつたということが証明

された。

お前のお陰で今までのE組では味わう事が出来なかつた”勝つ”
という世界を知ることが出来た。

だから蛙のエースなんて言つて悪かつたよ。

ま、要するに野球センスなら俺よりお前の方が圧倒的に上つて事
だ」

進藤「…フツ。俺から特大の…しかもあんなフォームでホームラン
打つた奴に言われても嫌味にしか聞こえねえよ。

…次やる時は覚悟しろよ。絶対俺が勝つからな！」

龍騎・杉野「おう（ああ）！」

◇◇◇

桃花「もううどこ行つたの？」

エキシビションマッチが終了し静けさを取り戻した本校舎で桃花
は誰かを探していた。

桃花「せつかく今日の祝勝会をしようと思つてたのに……あついた
！おーい龍騎k…」

殺せんせー「ヌルフフフ、お疲れ様でした。」

やつと見つけた龍騎に声をかけようとした桃花は殺せんせーが居
ることに気付きサッと身を隠す。

桃花「龍騎くんと殺せんせー？何してるんだろう？」

龍騎「そつちもお疲れさん殺監督。

んで、今日の結果はどうだつたんだ？」

殺せんせー「それを言う前にまず君の感想から聞きましようか？」

龍騎「…正直悪くはなかつたよ。

カルマや杉野、磯貝たちが居なけれども勝てなかつた。

まだ胸の靄は取れてねえけどな。

…でもいつかこの靄が取れると信じてるよ

殺せんせー「ヌルフフフ、宜しい！」

君への”特別課題”は合格としましよう。

しかし満点にはまだまだ程遠い。

君のこれからを期待して見せて頂きますよ！」

龍騎「手厳しいこつたな。

お手柔らかに頼むぜタコ」

殺せんせー「ニユヤ！ 龍騎くん！！

先生はタコではありますよ！！」

龍騎「俺にはどう見てもタコにしか見えない」

桃花「ふふつ。何だが良く分かんないけど元気になつたみたいで良

かつた♪」

しかしこれより後。

そんな龍騎を”変えてしまう”事が起ころうなど今は誰も知る由がない……

23. 才能の時間

——龍騎 side ——

暗殺訓練が始まつて4ヶ月目に入るが可能性のありそうな生徒が出てきた。

まずは磯貝悠馬と前原陽斗。

運動神経が良く2人掛かりなら俺にナイフを当てられる回数が増えてきた。

一見やる気のなさそしだが、強い悪戯心が宿っている赤羽カルマ。女子では岡野ひなた。

体操部出身という事もあり、持ち前の身体能力で意表を突いた動きが出来る。

最後に男子顔負けのリーチと運動量を誇る片岡メグ。

この辺りがアタツカーとして期待が出来る。

そして：

桃花「えいっ！」

矢田桃花。

先の5人に比べると際立つた力こそ無いが、彼女の中には誰にも負けたくないという気構えが感じられる。

そして殺せんせー：彼こそ俺の理想とする完璧な教師。あんな教師を殺すなんて俺にはできn

烏間「人の思考を捏造するなターゲット!!」

殺せんせー「ヌルフフフ、良いところだつたのに」

龍騎「何してんだあの2人は？」

今日も変わらず暗殺の訓練が行われている。

皆日々の訓練の中で自分の成長を感じているようだ。

前原「いやあ2人掛かりで1発当てるのが精一杯だな」

磯貝「でも徐々に烏間先生を追い詰めている感触は出始めている」

岡野「この調子だつたら殺せんせーの暗殺だつて夢じやないよ！」

片岡「そう思えるのも私たちが成長しているつていう事よ」

口々に自身に漲った言葉を言う。

カルマ「でもさああれと比べるとどうなんだろう?」

磯・前・岡・片「…うん、あれはほぼ人外だから」

鳥間「ふんっ!」

龍騎「はあっ!」

バキッ!
ドコツ!
ガシツ!

5人が見つめる先では鳥間と龍騎は1対1で戦っている。

しかしその手にはナイフは握られておらず、拳と蹴りでの格闘が行われている。

さらに前回とは異なり、龍騎たつての希望により双方の攻撃が認められている。

龍騎「うりや!」

鳥間「上手く身体を回転させたな…だが甘い!」

龍騎「痛つ!?」

龍騎は手痛いフックを浴びダウンする。

鳥間「君の弱点は腋下だな。他の部分をガードしようとする余り疎かになつていて。だが着実に弱点は無くなりつつある」

龍騎「イツツ…これで鳥間先生が10勝、俺が7勝ですね。
また差をつけられましたよ」

全員「〔いや、7勝してる時点で充分だろ!?〕」

龍騎「何言つてんだよ? 鳥間先生に全勝出来なきやあのタコは殺せねえだろ」

前原「いやまあそなうなんだが…」

磯貝「何だが最近妙に気合入つてんな龍騎の奴」

岡野「何かあつたのかな?」

片岡「桃花は何か知らない?」

片岡がそばに居た桃花に聞く。

桃花「さあね。でも元気になつたのなら私はそれで良いよ♪」
片岡「?」

桃花は龍騎を見ながら笑顔で答える。

龍騎「さてと、どうすりや鳥間先生に勝てるかなあ…?」

ドガンツ！

言い知れない”気配”を感じた後に聞こえた衝撃音。振り返ると渚が押し倒されていた。

渚「痛たた…」

鳥間「す、すまん。強く防ぎ過ぎた。大丈夫か？」

渚「あつはい、大丈夫です」

杉野「バツカでー、ちゃんと見てねえからだよ」

△△△

龍騎「…鳥間先生」

俺は額に汗をかいだ鳥間先生に近づく。

龍騎「いま本気で防ぎましたね？」

…それにさつき感じた”気配”は一体…

鳥間「…俺にも分からん。だが彼には自覚症状が無かつたようだな」

龍騎「…そうですか。渚…お前は一体…」

△△△

倉橋「鳥間先生へこの後皆でお茶しようよ♪」

鳥間「すまんがまだ仕事が残つていてな」

倉橋の誘いに社交辞令的な断りを入れる鳥間先生。俺にはあんなこと言つてたが、鳥間先生も俺たちとの間に壁を作つているように思えるんだよなあ。

?「よつ！鳥間」

聞き慣れない声を方向を見るとそこに立つ大柄な男。つていうかどんだけ荷物抱えてんだよ。

鳥間「…鷹岡か」

どうやら鳥間先生の知り合いみたいだな。

ということは防衛省の関係者か？

鷹岡「よつ！お前らがE組の生徒か。

俺は鷹岡つてもんだ。今日から鳥間の補佐になつたからよろしくな！

あとこれは土産な！」

そういうと鷹岡は大きな荷物を下ろす。

すると中にはデザートが山の様に入っていた。

磯貝「い、良いんですか？こんなにいっぱい」

鷹岡「おう食え食え！俺の財布を食うつもりでな」

渚「そういうえば鳥間先生の補佐つて言つてましたけど体育の授業ですか？」

鷹岡「まあ鳥間の負担軽減つて言つたところか。

明日からビシバシ行くから覚悟しろよ！

だが今日は懇親会だ。好きなだけ食つて俺を破産させてみろ！

あと、俺の事は”父ちゃん”って呼んでくれ！」

全員「「「いただきまーす！！」「

鷹岡の人間性に警戒心を解いた皆がデザートに齧り付く。
特に磯貝と原が……

龍騎「…………」

その様子を遠巻きに眺める。

桃花「龍騎くんどうしたの？食べないの？」

そんな俺に気づいたのが桃花は話しかけてくる。

龍騎「いや俺はいい」

桃花「…………何かあつた？」

桃花は憂わしげな表情を浮かべる。

龍騎「…心配すんな、桃花は食べてこいよ。美味そうだぞ」

桃花「…じやあ私もいい。

龍騎くんが行かないんなら私も行かない。

それに…龍騎くんが居ないと甘いデザートも美味しいしね♪
艶やかな微笑みを俺に向ける。

龍騎「…つたく、それじゃ行かねえ訳にはいかないだろ。
…んじや行くか！」

桃花「うん、行こ行こ♪」

龍騎「ちょ、おいこら！引つ張んなって！」
俺たちは皆の輪の中へ走り出す。

しかしなんだ…

この言い知れない予感は…

◇◇◇

その日の深夜。

龍騎は自室のベッドで考えに老けこんでいた。

龍騎「……くそつ、やつぱり考えてるだけじゃ埒が開かねえな…
律」

律「はい♪」

俺は自分の携帯を取り出し律の名前を呼ぶ。

すると、真っ黒に染まつたディスプレイから律が現れた。
律が自分がもつと皆の役に立てる様にと造つた携帯型アプリ、名付
けて『モバイル律』

便利な時代になつたもんだな。

龍騎「あの鷹岡という男の情報。
出来る限りでいい、集めてくれ」

律「分かりました！」

しかし彼は防衛省所属。情報となると防衛省のネットワークに
ハッキングしなければならないためすぐにという訳には…

龍騎「構わない。多少時間が掛かつても見つけ出してくれ。
俺の勘違いだつたらそれでいい。

少しでも可能性があるのなら徹底的にやりたい」
律「分かりました！ではこの事を皆さんにも知らせ「いや、それ
はいい」どうしてですか？」

律の提案を龍騎は拒否する。

龍騎「まだ何の確証もない状況で皆に知らせたら余計な不安を与え

る。これは俺とお前だけの秘密だ」

律「…分かりました」

律はやや不満そうな表情を浮かべながら、龍騎の意見にも一理あると考え同意する。

龍騎「さてと…んじや俺もやりますかねえ。

こういうのは苦手だがやらないよりはマシだろ」

そういうと机に置かれたパソコンのスイッチを入れ、指を鳴らした。

◇◇◇

気がつくと暗黒に染まっていた空は白みが増し、太陽が1日の始まりをとうの昔に告げていた。

ふと時計を見ると時刻は朝9時に差しかかろうとしており、この時点で遅刻は確定していた。

龍騎「もうこんな時間か。

やつぱ何にも出てこねえな」

ここまでくると頼りになるのは律だが、あれから何の音沙汰もない

⋮

龍騎「ま、今日の所はしようがない。

遅刻確定だが行くとするか。

ふあゝ寝む…」

両手を大きく突き上げ、席を立とうとした時であつた⋮

律「龍騎さん！遅くなりました!!」

真っ暗に染まっていた携帯のディスプレイが律を映し出す。
待つてたぞ！

律「気づかれないよう慎重にハツキングしていたので時間が掛かつてしましました。申し訳ありません」

龍騎「大丈夫だ。それで何か出てきたか？」

律「はい、まずはこちらの写真をご覧下さい」

そういう律が1枚の写真をアップする。

龍騎「…見たところ鷹岡が教官で周りに写つてるのが訓練生と言つたところか？でもこれだと良い師弟関係みたいに見えるな。…やっぱり俺の思い過ごしか？」

律「確かにこの写真だとそう思われると思います。
でもそれは1枚目の話。問題は2枚目です」

そういうと律が2枚目の写真をアップした。

龍騎「2枚目？…ヤバイッ！」

写真を見るや龍騎は猛ダツシユで家を飛び出した。
2枚目の写真には恐らく鷹岡が訓練生に行つたであろう“教育”の跡が生々しく記録されていた…

クソツツ！

やつぱり勘違いなんかじやなかつた…

何でもつと早く気づかなかつたんだ！

頼む…

間に合え…

間に合ってくれ！



——桃花 side ——

『10時間目まで訓練』

『夜9時まで訓練』

これが私たちに課せられた鷹岡先生からの訓練内容だつた。
誰がどう見ても常軌を逸している。

鷹岡先生に意見を言おうとした前原くんや、訓練を拒否した神崎さ

んは鷹岡先生の教育^{暴力}の名の下殴られた。

”恐怖が支配する授業”といつても過言じやない。

そんな鷹岡先生を殺せんせーや烏間先生が放つとく訳もなく止めようとしたけど、”教育方針の違い”という言葉に引かざるを得なかつた。

鷹岡「ほら頑張れ！頑張ればまた美味しいデザート食わしてやるからな」

岡島「ス、スクワット300回なんて…死んじまうよ」

そして現在、私たちは鷹岡先生の指示でスクワットをやらされている。

本当にこんなのが暗殺の役に立つの…？

そう思つても鷹岡先生が怖くて誰も口が出せない…：

せめて龍騎くんが居てくれれば…

駄目…

それじやあ以前の私と一緒に…：

私は決めたの…

強くなりたいって…

倉橋「か、烏間先生！」

桃花「陽菜ちゃん頑張つて！」

鷹岡「おい、烏間は俺たちの家族じゃないぞ」

桃花・倉橋「!」

私が陽菜ちゃんを励ますと目の前には狂氣の顔をした鷹岡先生が立っていた。

倉橋 「あつ…あつ…」

鷹岡 「父ちゃんを頼れない子には…お仕置きが必要だな」
鷹岡先生の拳がゆっくり上に上がる。

桃花 「待つて！」

鷹岡 「あつ？」

私は鷹岡先生と陽菜ちゃんの間に割つて入る。

桃花 「お願ひします！

陽菜ちゃんや皆をこれ以上殴らないで下さい！
訓練はちゃんとやり遂げてみせます！

だからお願ひします…鷹岡先生!!」

鷹岡 「……」

私は両手を広げて鷹岡先生の前に立つ。

力では絶対に敵わない私が出来るのはこれぐらいしかない…

私は決めたんだ…

強くなりたいって…

そして大切な人を守れるようになりたいって…

だからE組の皆も守れないと…

鷹岡 「…どうやらお前にもお仕置きが必要みたいだな」

桃花 「…えつ？」

鷹岡から発せられた”お仕置き”という言葉に桃花は反応する。

鷹岡 「言つただろ、これは暴力じやなくて教育だつて。
それに俺の事は…”父ちゃん”って言えつて言つただろ！」

鷹岡先生の拳は躊躇なく私目掛けて飛んでくる。

やつぱり私じゃどうすることも…

ゴメンね皆…

ゴメンね…

龍騎くん…

迫る拳に桃花は瞳を強く閉じた。

ガシツ!!

その拳は桃花を捉えることはなかつた。

その代わりに響く何かの衝撃音。

桃花は不思議に思い強く閉じた瞳をゆっくりと開く…

龍騎「…それ以上はさせない」

——龍騎 side——

龍騎「…それ以上はさせない」
間一髪とはまさにこの事。

桃花を殴りつけそうだつた鷹岡の拳をギリギリで止める。

鷹岡「おお神道か！随分と遅かつたじやないか。今日は来ないかと父ちゃん心配してt「黙れ…」？」

額に血管を走らせた龍騎が鷹岡を睨みつける。

龍騎「俺はお前の事を父ちゃんなんて思つてねえ。俺にとつての父

ちやんは親父一人で十分だ。

：それに皆に手をあげるお前を先生とすら思わねえよ」

龍騎は掴んでいる鷹岡の腕を力強く握る。

鷹岡「…お前の事は理事長から聞いてるよ。

『彼には十分気をつけたまえ』ってな。

……それで、どうしたいんだ？」

鷹岡は掴んでくる龍騎の手を無理やり払いのける。

龍騎「簡単な事だ…今すぐ俺たちの前から消える。

さもなくば…」

鷹岡「さもなくば…何だ？」

龍騎「力尽くでも出てつてもらう!!」

鷹岡「上等だ…やつてみろよ!!」

鷹岡の強靭な拳が龍騎に襲いかかる。

ガンッ！

しかしこれを腕をクロスしてガードする。

鷹岡「逃げてちや俺に拳を当たらんねえぞ！」

鷹岡が再び拳を繰り出す。

やつぱり団体がデカいだけあつてパワーがあるな…

力だけなら俺や鳥間先生よりも上か…

だつたら…

パワー対決では不利と判断した龍騎は持ち前のスピードと反射神経で鷹岡の攻撃をかわしていく。

鷹岡「おらおらどうした？そんなんじゃいつまで経つても俺には勝てねえぞ！」

鷹岡の怒涛のラッシュに防戦一方となる龍騎。

ここで鷹岡は何かに気づいたようだ。

鷹岡「んつ？お前……なるほど、どうやらお前にも”弱点”があるようだな」

龍騎「…………」

曲がりなりにも格闘のエキスパートって訳か。
あの間にそれに気付くなんてな。

：しゃーねえな。

鷹岡「そこだろ……お前の弱点は!!」

ドコンツ!!

龍騎「ごはつ!?」

桃花「龍騎くん！」

鷹岡の強烈なパンチが龍騎の左腋下を捉える。

あまりの衝撃に龍騎が短い悲鳴をあげる。

鷹岡「なんだ案外あっけないものだな。

さてと、さつさとケリをつけて……んつ？」

鷹岡は自分の右腕に違和感を感じ目をやる。

すると右腕は龍騎の左腕と胴体でガツチリ固定されビクともしない。

鷹岡「くつ…おい何してんだ？」

龍騎「何つて決まつてんだろう？」

龍騎は空いていた右腕を構える。

鷹岡「?…おい待て！」

龍騎「お前に”お仕置き”するに決まつてんだろうおがああ!!」

バキンツ!!

龍騎の放った右アッパーは鷹岡の頸にクリーンヒットする。

そのまま鷹岡は後頭部から地面へと沈み込んだ。

鷹岡「ぐつ…このガキああ!!」

流石にあんなに密着した状態じゃマイチ力は出ないか。
さて、次はどうする？

鳥間「そこまでだ！」

ここで漸く鳥間が間に入り止める。

鷹岡「鳥間…そろそろ横やりを入れてくる頃だと思ったよ。
だが止めんじゃねえ。このガキをぶつ飛ばさなきゃ俺の気が治ら
なねえ！」

鳥間「駄目だ。これ以上暴れたいんなら俺が相手をしてやる」

鳥間は鷹岡と一戦交わるべく上着を脱ぎ捨てる。

龍騎「力を貸しますよ鳥間先生」

龍騎も体勢を整え鳥間の横に立つ。

鳥間「大丈夫なのか？」

龍騎「あれぐらいじやビクともしませんよ。

なんてつたつて俺は鳥間先生の”生徒”なんですから」

鳥間「…そうか」

”師弟関係”とも言える2人が鷹岡に対して構える。

鷹岡「…いや、お前とやり合つつもりはねえよ、鳥間。

という事でこういうのはどうだ？お前が今まで育てた中で1番の
”生徒”を選べ。そいつが俺に一度でもナイフを当てられたら、素直
に敗北を認めてここを出てつてやる。」

そういうと鷹岡は自分の荷物を引っ掻き始める。

鷹岡「ただし使うのは…これだ」

鷹岡の手には対殺せんせー用のオモチャのようなナイフではなく
”真正銘”のナイフであつた。

鷹岡「さあ選べ鳥間。嫌なら俺に服従しろ」

鳥間「……

鷹岡から投げられたナイフを取つた鳥間先生は俺たちを眺める。
そして…

鳥間「渚くん……出来るか？」

全員「「えつ!?」」

思いもしない鳥間先生の選択に動搖が広がる。

磯貝「な、何で渚なんですか？」

前原「そだぜ危険すぎる！それにやるなら龍騎の方がまだ可能性が
a「いや、それでいい」：龍騎！」

前原の言葉を俺は遮った。

龍騎「そうでしよう烏間先生？」

正直言うと烏間先生が俺を選ばなかつたのは悔しいが
この条件なら俺より渚の方が良いだろう…

鳥間「…俺は君たちに暗殺の依頼をした以上、君たちとはプロ同士
だと思つていてる。

だが君たちは中学生。このナイフは無理に受け取る必要はない」

渚「……やります」

暫くの沈黙の後、渚は烏間先生からナイフを受け取つた。

鷹岡「烏間、龍騎お前も目が曇つたな。

てつきりあのガキ龍騎を選ぶと思つたんだがなあ。
そしたら改めて八つ裂きにしてやつたのに残念だ」

桃花「……」

桃花の目は鷹岡を今にも殺しそうなほど怒りの色に染まる。

龍騎「言わせておけばいい」

桃花「で、でもこのままじゃ渚が…」

龍騎「大丈夫だ。根拠があるわけじゃないが…渚なら」

桃花「渚なら？」

龍騎「いいから見てろ…始まるぞ」

話しているうちに渚と鷹岡の準備は既に完了していた。

龍騎「渚なら…きっと殺れる」

スタッツ…スタッツ…スタッツ…

渚は歩いていた…

ナイフの手に持つて…

それも笑顔で…

まるでいつもの通学路を歩くように…

そして鷹岡の身体に渚の身体が静かにぶつかる…
次の瞬間：

シユツ！

鷹岡「!」

ここで鷹岡は気づいた…
自分が殺されかけている事に…
しかし全てが遅かつた…

重心が後ろに下がり鷹岡は転がる…

：そして仕留められる

渚「…捕まえた」

龍騎「……やつぱりか」



殺せんせー「勝負ありますね…鳥間先生。

しかし、渚くんが怪我でもしたらどうするんです？」

鳥間「怪我しそうならマツハで助けに入つただろうが？」

殺せんせー「ヌルフフフ、確かに」

磯貝「凄いじやないか渚！」

渚「いやあ鳥間先生に言われた通りやつただけだよ」

鷹岡「このガキ…」

全員「「?」」

声のする方を見るとさつきまで地面に転がっていた鷹岡が立つて
いた。

鷹岡「よくも父ちゃんに恥をかかせたな…

マグレの勝ちがそんなに嬉しいかあ！

こうなつたら心も身体も全部へし折つてやる！」

それも完全にキティル顔で…

渚「…次やつたら間違いなく僕が負けます。」

でもはつきりしたことがあります。

僕らの担任は殺せんせーで教官は鳥間先生です。

本気で僕らを強くしてくれようとしたことは感謝しています。

でもごめんなさい…出て行つてください」

渚は鷹岡に深々と頭を下げる。

さてと…んじやあ仕上げだ。

鷹岡「黙つて聞いてりやガキの分際で…

ぐあああああつっ!!!」

ドグツ!!

鷹岡「ぐはつ!」

龍騎「今のお前は俺の敵じやねえよ」

鷹岡の鳩尾に龍騎の強烈なエルボーが炸裂し、鷹岡はその場で蹲る。

龍騎「渚の言つた通りここにはお前の居場所はない。

俺たちにはエロタコと人外教官とハレンチ教師がいれば十分だ。んで、鳥間先生はどうしたいんです?」

龍騎は鳥間先生に視線を向ける。

鳥間「…身内が迷惑をかけて申し訳ない。

今まで通り教官を務められるよう上と掛け合う」

全員「二やつたーーー!!」

鳥間先生の言葉に一様に喜び合う。

鷹岡「や、やらせるか俺が先に掛け合つて…」

龍騎「それなんだけどもう手遅れみたいだぞ?」

龍騎の指差す方向。

そこにはこの学園の支配者である理事長の姿があつた。

理事長「…率直に言つて貴方の授業はつまらなかつた。

教育に恐怖は必要です。

が、暴力でしか恐怖を与えない教師は3流以下だ」

そう言うと鷹岡の口に『解雇通告書』をねじ込む。

つていうかやつぱアイツが1番容赦ねえな。

理事長「貴方はクビです。

私の理想とする教育に貴方の席は有りません

鷹岡「くつ…くそつ…くそくそくそくそ…くそつ!!!」

鷹岡は自分の荷物を持つや逃げるよう飛び出して行つた。
車に轢かれるなよ。



その後烏間先生の教官復帰が正式に決ると、烏間のために頑張つたという名目で^{鳥間先生の財布}「臨時報酬」が出された。

因みに殺せんせーは碌に活躍しなかつたという事でボツシユートテツレツテレツテト、らしい。

ザマアみろ。

桃花「大丈夫?」

龍騎「ああ骨は折れてねえから大丈夫だよ」

そんな様子を見ながら俺はベンチに凭れながら鷹岡に殴られた腋下を摩る。その横では桃花が腰を下ろしている。

桃花「あんまり無茶しないでよね」

龍騎「いや、倉橋の盾になつたお前が言えるのか?」

桃花「それはそうだけど…」

龍騎「ま、誰も大怪我しなかつたんだ。結果オーライつて事で」

桃花「なーんかはぐらかされた気分」

龍騎「でも鷹岡の前に立つていた時の桃花逞しかつたぞ」

桃花「ちよつと! 女の子に逞しいなんて言っちゃダメ!」

龍騎「んじや何て言えばいいんだよ?」

桃花「…それより何で今日遅刻したの?」

龍騎「見事にスルーしたな。まあちよつとした野暮用でな」

桃花「ふーん…」

そこからは特に会話もなく臨時報酬に群がる皆を見ていた。

そして暫くの沈黙の後…

鳥間先生の財布

桃花「…私、大切な誰かを守れるようになりたいって前に言つた
じゃない？」

龍騎「うん」

桃花「だからそのためにはもつともつと強くならないといけないつ
て思つたんだ」

龍騎「…うん」

桃花「今日鷹岡先生に立ち向かつた時、初めて自分に”自信”がつ
いたような感じがしたんだ。

まあ結果的にはまた龍騎くんに助けられちゃつたんだけど」

龍騎「……うん」

桃花「だからその”自信”を今ここで見せてみる」

龍騎「……」

桃花は大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

桃花「私…ずっと…ずっと龍騎くんの事…」

が…」

龍騎「スーツ…スーツ…」（— —） z z z

桃花「…えつ？」

龍騎は今まさに何かを言おうとした桃花の横で静かに寝息を立て
ていた。

なんてこつたい!!

桃花「寝てる…………えつ!? 寝てる!?

ちょ、ちょっと待つてよ！何でよりによつてこんな時に……もう

!!

龍騎 「スーツ…スーツ…」(— —) z z z

桃花 「……ふふつ、まあ龍騎くんらしくて良いけどね。

お疲れ様、龍騎くん……

大好きだよ」

桃花は隣で呑気に寝ている龍騎の髪を優しく撫でた。

24. ビジョンの時間

——龍騎 side ——

率直に言おう：地球溶けんぞコレ。

季節は夏本番。

真夏の日差しが照りつけ、目眩がしそうなほど暑かつた。
それだけに留まらず近年、夏の異常気象が日本全体を覆い40度越えなどもはや当たり前となりつつある。

そんな猛暑日にE組は何をしているかと言うと…

杉野 「暑つちー…何で裏山なんかに…」

夏の風物詩である蝉も鳴りを潜めてしまうほどの猛暑日にE組は夏草が生い茂る道無き道を歩いていた。

前原 「なあ殺せんせー。プールに行くんじゃなかつたのか？」
俺たちどう見ても本校舎とは逆方向に進んでるんだけど

そう、俺たちはいま一応プールへと向かっている。

殺せんせー「ヌルフフフ、この先に小さな沢があつたでしょ？

そこで涼もうと思いまして」

殺せんせーに言われて体操着の下には一応水着を着てはいるが、確かあの沢つてせいぜい足が浸かる程度だつたよな？

そりや無いよりはマシだがこの暑さじや焼け石に水だらうな。

殺せんせー「ヌルフフフ、さあ着きましたよ！どうぞご覧あれ！」

殺せんせーが生い茂つた茂みを分かる。

するとそこには…

龍騎 「…こりやすげえわ」

殺せんせー「先生特製のE組専用プールです！」

そこには以前見た小さな沢は綺麗に姿を消し、濃い群青の水面に様変わりしていた。

沢だつたと思われる場所から湧いてくる群青色の水の流れ落ちる音が優しい呟きのように耳を癒す。

ふと見下ろすと水面は波と波紋が交錯し、雷を反射したかのように光り輝いている。

殺せんせー「景観選びから間取りまで自然を生かした緻密な設計。

先生だからこそ成しえる匠の技です！」

律「凄いです！殺せんせー！」

殺せんせーは生き生きとした表情で胸をはる。

そしてそれを絶賛する律。

龍騎「…察するに律が協力したつて所か？」

殺せんせー「ニユヤツツ？何でバレたんですか！」

：図星かよ。

まあ普通に考えてこのタコにこんな美的感覚があるとは到底思えない。

つていうかこんな芸当出来るのクラスの中じゃ律しか考えられない。

律「はい♪殺せんせーの依頼で微力ながら協力させて頂きました！夏はご覧のようにプールに、冬は水量を調節して川魚の観察を出来ることを視野に入れて作りました！」

桃花「ありがとう律♪」

桃花は携帯に映るモバイル律にお礼を言う。

律「はい♪少しでも皆さんのお役に立てればと思い頑張りました！」

最初に会った時は衝撃的だったが、今ではすっかりE組の大切なクラスマイトだ。

殺せんせー「さあさあ皆さん！立ち話はこのくらいにしましょう。今は勉強の事は忘れて大いに楽しみましょう!!」

全員「〔やつほーーーい!!〕」

上着を脱ぎ去ると次々に飛び込んでいく。

その綺麗な水はガラスよりも透き通り飛び込んだ生徒たちを水泡と共に包み込む。

桃花「龍騎くん、私たちも泳ごう！」

既に上着を脱ぎ水着姿となつた桃花が誘う。

龍騎「そうだな。んじやあ…」

龍騎は自分の上着の裾に手を掛け一気に捲り上げた。

すると：

桃花「なつ!//」

龍騎「んつ?どうした?」

磯貝・前原「ヽ、これは…」

片岡・岡野「す、凄い!」

一同の視線が集まつた先には、贅肉の姿はほとんど無く、すべての筋肉が念入りに鍛え上げられている龍騎の肉体があつた。

前原「分かつちやいたがこれは…」

磯貝「ああ。いざ見てみるとあの身体能力の高さの理由がよく分かる」

龍騎「そうか?普通はこんなもんだろ?」

磯貝・前原「いやいやいやいやいやいや!!」

2人は全力で立てた手を横に振る。

いくら成長期の中学生とはいえ、龍騎の肉体美はそれを遥かに超えていた。

片岡「桃花：夏休みに入つたら神道くんをプールに誘うつて計画、白紙に戻した方がいいんじや…」
岡野「賛成。あれじやあ良いムード作るどころか注目浴びすぎて收拾がつかなくなつちやうよ」

桃花「……くう」(T T)

龍騎の知らない所で進められていた秘密計画が龍騎の知らない所

で脆くも崩れ去ってしまった。

龍騎 「おーい何してんだ？泳ぐんじやないのか？」

桃花 「もう……はいはい今行きますよ」

龍騎 「…何か怒つてない？」

桃花 「怒つてません!!」

龍騎 「?????」

ドンマイ桃花ちゃん！
次があるぞ!!

―――◇◇◇―――

桃花が何故か不機嫌になつたのはさておき、俺たちは時間も勉強も忘れて小さい子どもに戻つたようにはしゃいでいた。

まあはしゃいでいたまではいいんだが…

ピピ――――――ツ!!

殺せんせー「木村くん！プールサイドを走つてはいけません！転んで怪我したらどうするんです!!」

龍騎 「……」

――――――――――――――――――――

ピピーーーーーーツ!!

殺せんせー「中村さんに原さん！水中遊びは程々に！溺れたかと心配になるじゃないですか!!」

龍騎「……」

ピピーーーーーーーツ!!

殺せんせー「岡島くんのカメラも没収!!

菅谷くんのボディーアートは普通のプールなら入場禁止ですよ!!

狭間さんも本ばかり読んでないで泳ぎなさい!!」

龍騎（………）

倉橋 「硬い」と言わないでよ殺せんせー。
水かけちゃえ♪」

パシヤン！

すると、倉橋が足下の水を手にすくうと殺せんせーに浴びせた。
まあそんなの効くわけ…

殺せんせー 「きやああん!?」 (??▽??;)

……………はつ?

なんだ今の気色悪い悲鳴…………
ただ水掛けられただけだろ?

…………まさか!?
龍騎 「カルマ！」
カルマ 「合点♪」

殺せんせー「ぎやあ!? カルマくん!! 揺らさないで!! 水に落ちる!! 落ちますから!! 頼ります!! 堀忍してつかあさい!! j # p a m, j a g

”@j t :”

カルマも同じ”結論”に至っていたためか名前を呼ぶなり即座に監視台の下に移動し足を掴んで揺らす。

次いで殺せんせーがカルマに気取られている間に俺は監視台の裏に回り込む。

そしてその場で大きくジャンプすると…

龍騎「余所見してんなよ!!」

ドガーンツ!!

殺せんせー「にゅぎああああああああ!!?」

殺せんせーの背中目掛けて回し蹴りを見舞う。

支えとなる監視台が安定せず、唐突に蹴りを食らった殺せんせーは

ロケットの如く水面へと飛ばされる。

殺せんせー「にゅ、にゅうおおおおおお!!」

しかし間一髪!

水面ギリギリで体勢を整えた殺せんせーはマツハ20で対岸に飛び付く。

龍騎「くそつ! 逃げやがったか」

殺せんせー「はあはあ…い、今のはヤバかったです…」

桃花「殺せんせー…まさか…」

龍騎「ああ、そのまさかだ…」

アソツ泳げねえぞ」

暗殺が始まつて3ヶ月余り。

これまでで最大の弱点が露見した瞬間であつた。

そして、その様子を荒れた氣分で見てゐる男が1人。

寺坂「……ちつ！」

――◇◇――

居心地悪りい……

彼はいま抱いてゐる感情である。

幼い頃より自分より弱い者を支配するのが彼のやり方であつた。これが普通でこれが当たり前なんだと彼は思つていた。

しかし彼の考えは柄ヶ丘ここでは通用しなかつた。

どんなに腕っぷしが強かろうがどんなにひ弱な同級生を虐めようがここでは成績が全勝利者て。

そういう面では彼は学校の誰よりも敗北者であつた。

その敗北者である彼がE組行きを宣告されたのは必然とも言える。自分が持つていた”強み”はここでは何の役にも立たない。

しかも永遠に使う機会はないだろう、と彼は悟つた。

だから彼は開き直つた。

彼と同じように彼と同じような境遇の中なら楽に過ごせる、と。そう思つていた彼の考えは突如として崩れ去る。

モンスターが現れたせいで……

でかい目標が彼にとつて居心地の良かつたクラスを変えてしまつた。

取り残された彼は敗北者へと逆戻りしてしまつた。

寺坂「……くそつ！」

彼は乱雑に教室の扉を開いた。

吉田「マジかよ殺せんせー！まるで本物じやねえか！」

寺坂
〔?〕

教室に入ると後ろの方で吉田の何やら興奮気味に喋つてゐる声が

卷之三

その横では木彌りで出来たレーザーレーザーがはしゃいでいた。

寺坂一：何してんだよ？」

寺坂は苛立ちを露わに吉田に話しかける

吉田一敏「寺坂……」この前「イツとハイケの話で盛り上かって
まつたてよお。ほら、この学校こういうの趣味の奴居ないからさ」

先生に先生の先生の言ひ一先生の口の先生の手の趣味も一通り齧っています。

一度乗つてみたいのですねえ

吉田「アホか！自分で飛んだ方が速いだろうが」

寺坂
「……」

ドガントフ！

荒れた気分が最高潮に達した寺坂はバイクを蹴り倒した。倒されたバイクはあつけなく碎け散る。

吉田「なんて事するんだよ寺坂!？」

中村「誤つてやんなよ！漢字の漢と書いて漢の中の漢の殺せんせーが泣いてるよ！」

不破 「そーだそーだ！」

寺坂「テメエら虫みたいに五月蠅えな…」

駆除してやんよ！」

語気を強めて自分を非難する生徒たち。

そんな彼らにとつた行動は…：

ブシューーーッ！

「うわっ、何だこれ!?

〈殺虫剤!?

事もあろうに寺坂は机に入っていたアルミ缶を地面に叩きつける。叩きつけられた衝撃でアルミ缶は爆発し、辺り一面は真っ白い霧に覆われる。

殺せんせー「寺坂くん！ヤンチャするにも限度というものが…」

寺坂「触んじやねえよ、モンスター！」

真っ赤に染まつた殺せんせーの触手を虫でも追い払うかのように払い除ける。

カルマ「何がそんなに氣にくわないのかねえ？」

気に入らないなら殺せばいいじやん？

せつかくそれが許可されているのに」

先程まで黙つて事の成り行きを見ていたカルマが挑発するようになり寺坂に言う。

寺坂「テメエ：喧嘩売つてんのか？」

だいたいテメエは最初つから氣に入らねえん…」

ガシツ！

寺坂「!」

突つかかつてきた寺坂をカルマは顔面を驚撃みすることによつて封じ込める。

カルマ「ダメだよ寺坂。喧嘩すんなら口より先に手を動かさなく

ちや」

寺坂「ぐつ…」

龍騎「その辺にしといてやれカルマ」
するとカルマと同じく黙つて見ていた龍騎がカルマに手を離すよう促す。

龍騎「大丈夫か寺坂？」

寺坂「神道：何だいきなり気持ち悪い奴だな」

龍騎「気持ち悪いとは辛辣だな。

俺はお前の気持ちを分かつてつもりなんだぞ。

いきなり自分のテリトリーを訳の分からないモンスターに侵され

ちや怒るのも無理はない。

だからお前は気にせずにお前の道を進めばいい。

例えそれがクラスの皆の迷惑になろうともな。

だが、俺たちはお前が映画版になると誰よりも頼もしく優しくなることを知っている。

その時が来るまで俺たちはお前を信じて待つている

寺坂「神道…やつぱりお前だけは分かつ…」

んつ？映画版？」

寺坂の頭に？マークが浮かぶ。

龍騎「ああ。『映画版での法則』とか『映画でのたつた1日の活躍で残り364日の暴挙が許される』とか世間で言われているそうじゃないか。

そんなお前を皆楽しみにしてるんだ。
期待を裏切るなよ」

聞き間違いではない：

それにどうやら話が噛み合ってない…

寺坂「…………何の話だ？」

龍騎「えつ？不破から聞いたぞ。

お前がかの有名なジャイ a……」

寺坂「ジャイ○ンじやねええよ!!?」

つていうかジャイ○ンつて誰だあ!!?」

寺坂の全力の否定が狭い教室に木霊する。

龍騎「違うのか!?」

何だよ、話が違うじゃないか」

不破「おつかしいなう。

中の人声優さんが一緒だからテツキリ同一人物だと思つてたのに…

渚「2人とも何の話してんの!?」

寺坂「くそつ！放せよ!!」

掴んでいたカルマの手を乱暴に払い除けると教室を出て行つてしまつた。

前原「何なんだよアイツ…」

磯貝「一緒に平和的にやれないものかなあ…」

皆一様に口々に苦言を呈する。



その翌日の昼休み。

俺は桃花やビッチ先生、磯貝たちと席を囲んで昼食をとつていた。
一見すると和やかな雰囲気なのだが…

殺せんせー「ぐすっ…ぐすっ…」

何故か殺せんせーは泣いていた。

それも気持ち悪い液体を流しながら…

イリーナ「何よさつきから涙流して」

殺せんせー「いいえ、鼻なのでこれ鼻水です。目はその隣です」

イリーナ「紛らわしいつ！」

そのダラダラ流れるの鼻水だつたのか。

龍騎「まあ涙でも鼻水でもどっちでもいいが何でそんなんになつて
つていうか余計に気持ち悪いわ！」

殺せんせー「どうも昨日から身体の調子が変なんです。

理由はわかりませんが…」

昨日…ねえ…

殺せんせー「おお！寺坂くん!!」

殺せんせーの声に後ろを向くと、今日は欠席していたはずの寺坂が
教室に入つてくるのが見えた。

殺せんせー「今日は登校しないかと心配してましたよ!!」

持ち前のスピードを生かして寺坂の元へ赴くと、鼻水を撒き散らし
ながら寺坂に心配の声をかける。

うわあ…

寺坂「…おい、タコ。そろそろ本気でぶつ殺してやんよ。
放課後プールへ来い。テメエらも手伝えよ！」

顔についた鼻水を拭き取ると寺坂は殺せんせー暗殺を宣言した。
思えばアソツから暗殺つて言葉聞くのは初めてだな。
だが…

前原「あのさあ寺坂。俺たちが暗殺に躍起になつてゐる時に一切協力しなかつたよな？」

なのにいきなり手伝えつて言われて手伝うと思うか？」

寺坂「だつたらいいぜ来なくて。そんときや100億は全部俺の物だ」

前原の当然の言い分にも寺坂は聞く耳を持たない。

不破「なるほど…つまり『お前の物は俺の物、俺の物も俺の物』って言うこと？」

寺坂「ああその通りだ…つていつまでその話続いてんだよ!?!」
不破に華麗なノリツツコミをいれると教室から出て行く。

吉田「何なんだよアイツ…」

村松「もう付き合いきれねえよ」

いつもつるんでいる2人でさえ呆れているようだ。

：んつ？

殺せんせー「皆行きましょうよお！」

全員「――うおつ！何じやこりや!?」

腑抜けた声に皆我に返ると殺せんせーから分泌された粘液が教室中に広がっていた。

殺せんせー「せつかく寺坂くんがヤル気になつてくれたんです。
皆で一緒に暗殺して気持ちよく仲直りでふ…」

まずお前が気持ち悪いわ！

ところで俺はどうしてたかと言うと…

磯貝「危なかつた」

片岡「神道くんが先に気付いてくれてなかつたら粘液で固められるところだつたわ」

岡野 「間一髪だったね」

倉橋 「助かつたよ♪」

桃花 「ありがとう龍騎くん♪」

殺せんせーの粘液が教室中に広がるのを察知した龍騎は周りに机の上に避難するよう呼びかけていたのだ。

イリーナ・前原 「……あの…私（俺）は？」

念のため言つておこう。

周りとは言つたが、ここ重要周りの皆とは言つていない。

龍騎 「……にしても寺坂の奴。一体どんな暗殺するつもりだ？」

イリーナ・前原 「無視すんなつつ!!」

――◆◆◆――

寺坂 「よーし、そんな感じで散らばつとけ！」

殺せんせーの必死の嘆願（？）に折れ、俺たちはいま寺坂の指示でプールに浸かっている。

竹林 「君に他人を動かす器量があるか僕には甚だ疑問だね」

寺坂 「ゴチャゴチャ言つてないでお前も入れ！」

竹林「ふぎやつ!?」

プールに入らず不快感を露わにした竹林は寺坂に後ろから蹴られ
腹からプールに落ちる。

あれつて意外と痛いんだよなあ…

桃花「寺坂くん、私たちをプールに入れてどうやって殺せんせーを
殺すんだろう?」

前原「恐らくアイツをプールに落としてから俺たちにやらせるつて
ところだろうが…」

磯貝「そんな上手くはいかないだろうな。
なあ、龍騎だつたらどうする?」

磯貝が俺に問いかける。

龍騎「…例えればコレがアイツ1人の暗殺じやなかつたらどうする
?」

磯貝「どう言う意味だ?」

龍騎「…アイツにはどこか自信の無さが感じられる。

まるで誰かに操られるがままに動いているマリオネットみたいに
⋮

俺にはそう見えて仕方がない…」

スチヤ⋮

寺坂は手に持つの拳銃を殺せんせーに突きつける。

寺坂「…俺はテメエがずっと嫌いだった。」

だからここで引導を渡してやる…

さあ来い……

イトナ!!

殺せんせー・龍騎 「?」

ドガソツツツ!!!

全員 「「うわあーーー!!」」

寺坂が拳銃の引き金を引くと、水を堰き止めていた堤防が爆発し、
龍騎たちは河口へと流されていく。

確かこの先には滝があつたはず…

このままじゃ…

龍騎 「殺せんせー!! アンタは滝の方へ流されていった奴を、
俺は手前に居る奴を助ける!」

殺せんせー 「し、承知しました!!」

俺の声を聞くや殺せんせーは滝の方へと飛んでいった。

龍騎 「桃花っ!!」

龍騎は何とか岩場にしがみ付いていた桃花を上へと持ち上げる。

桃花 「はあ、はあ、ありがとう…」

龍騎 「俺は他の奴らを助けるから、お前は引き揚げた奴らの介抱を
頼む！」

桃花 「わ、わかつた！」

そう言い残すと再び激流の中へと身を投じた。

1人…2人…3人と次々と救助していくがとても手が足りない。

龍騎 「くそつ！ とてもじゃないが俺だけじゃ…」

？ 「きやーーーー！」

龍騎 「悲鳴？……あそこか！」

発見した悲鳴の主に目掛けて一心不乱に泳いでいく。

？ 「た、助け……て…」

しかし力尽きたのか水中へとその姿を沈めていく。

龍騎 「!? くそつ！」

沈んだ姿を追つて龍騎も水中に自らの姿を没する。

させない…

俺の目の前では…

絶対に誰も…

今度は絶対に…

死なせない！

激しく揺れ動く水流に抗いながら龍騎の右手が先に沈んだ者の腕を掴み水面へと再びその姿を現わす。

龍騎 「はあ、はあ、もう少しだ！ 頑張れ!!」

？ 「はあ…はあ…」

そして何とか岩場に引き揚げると2人して倒れ込んだ。

龍騎「はあ…はあ…さ、流石に無理しすぎた…」

驚異的な身体能力を誇る龍騎でも応えたのか仰向けになつたまま動かない。

? 「ゲホツ、ゲホツ…」

多少水を飲んでいるみたいだが大丈夫のようだ。

龍騎「大丈夫そうで良かつた。

それにどうやらお前が最後みたいだな。

先の方に流された奴らはアソツが何とかしてんだろうが、心配だから俺…も…」

龍騎の言葉はここで遮られた。

? 「……」

何故なら龍騎の腕に隣で震える身体がしがみ付いていたからだ。

少女は初めて”水の恐怖”を思い知らされた。

桃花「龍騎くん！こつちは大丈夫だ…よ…」

龍騎「……怖かったのか？」

? 「……」

少女は震える身体で首を縦に降る。

龍騎「……震えが止まるまでだぞ」

? 「……」

少女は首を再び縦に振る。

桃花「……」

桃花はその様子を寂寞に堪えない表情で見つめるしかなかつた…。

――◇◇◇――

俺が殺せんせーのもとへ行つた時には全てが終わっていた。

今回の件の首謀者は、寺坂の発言から分かる通りシロであつた。
まず堤防を破壊する。

次に生徒の救出に混乱する殺せんせーを弱点である水場に誘い出す。

最後にイトナがトドメを刺す。

つといつた算段だつたのだが、皆もやられつ放しでは腹の虫が収まらない。

知つての通りイトナの触手は殺せんせーと同じものである。

途中で合流したカルマの指示で寺坂たちがイトナに水を浴びせた。
粘液により防げた水も大量ともなると話は別だ。

分が悪いと判断したシロは憤るイトナを連れて退いた。

というのが俺がいない間に起きた簡単な流れだ。
お分りいただけたかな？

んで、今の状況はというと…

龍騎 「つたく、カルマに良いとこ持つてかれとな」

カルマ 「修学旅行の時の仕返しだよ♪」

龍騎 「あの時のことまだ根に持つてたのかよ。まったく…」

制服姿のカルマはびしょ濡れの姿だ。そしてその中には寺坂の姿
もあつた。

：どうやら仲直り出来たみたいだな。

3年E組はようやく『暗殺教室』として纏まつた。

25. 期末の時間①

俺の通う柵ヶ丘中学に期末試験の日程が間近に迫っていた。

俺たちは中間のときと同じく殺せんせーの分身が一人一人について勉強している。

しかし今日はいつもの教室ではなく裏山に入つて木陰で勉強をしていた。

まあこの暑さだ。

教室よりもこういう所の方が涼しくて効率が良いかもな。

殺せんせー「ヌルフフフ。1学期の間に皆さん基礎は出来ました。

この分なら期末の成績は期待できるでしょう」

渚「殺せんせー、期末もまた全員50位以内目標にするの？」

俺たちの期末試験での結果に大いに期待する中で渚が聞く。

殺せんせー「いいえ、先生はあのとき総合点ばかり気にしてました。生徒それに見合った目標を立てるべきかと思いました。そこで今回はこの暗殺教室に”ピッタリの目標”を設定しました」

龍騎「ピッタリの目標？」

殺せんせー「ええ。しかしそれを言う前に皆さんに話しておかなければならぬことがあります」

そういうと殺せんせーは懐から拳銃を取り出す。

殺せんせー「さて、シロさんが言つた通り先生は触手を失うと動きが落ちます」

説明しながら自分で触手を1本撃ち抜いた。

殺せんせー「1、2本減つても影響は出ます。その証拠に御覧なさい。

分身の質を維持できず子供の分身が混ざつてしまつた」

そう言われると確かに多数の分身の中にひとりわ小さな分身が現れた。

つていうか分身つてあんな減り方するのか？

殺せんせー「さらに1本減らすと…」

今度は足の触手を一本撃ち抜いた

殺せんせー「子供の分身が更に増え、親分身が家計のやりくりに苦しんでいます」

「なんか切ない話になってきたな。

殺せんせー「更に1本打つと……」

父親分身が蒸発し、母親分身は女手一つで子供達を養わなければいけません」

龍騎「重いわっ！」

何でこんな所でドロドロ劇見せられなきやならねえんだよ！

殺せんせー「このように触手1本喪失につき失う運動能力は約10%。

そこで今回は教科ごとに学年1位を取った者にはご褒美に触手を1本破壊する権利を進呈します」

全員「「!?」」

殺せんせーが言つたご褒美に皆が食いつく。

殺せんせー「これが暗殺教室の期末テストです。賞金100億に近づけるかどうかはみなさんの努力次第なのです」

龍騎「へえ……面白れえ」

コイツは生徒をやる気にさせるのが上手い。

――◇◇◇――

片岡「ねえ神道くん。放課後皆で勉強会やらない？」

龍騎「勉強会？」

授業が終わり帰り支度をしていた俺に片岡が聞いてくる。

前原「ああ！何てつたつて触手1本が懸かっているからな」

片岡「それに学年トップを取るなら1人でやるより皆で教えあいながらやつた方がいいじゃない？」

龍騎「なるほどねえ：勿論いいぞ」

確かに勉強するなら誰かに教えるがらの方が自分の復習になるって言うからな。

片岡「じゃあ決定ね。桃花も来るでしよう?」

桃花「私?…私は…いいかな…」

すると俺の反対側に座っている桃花にも聞くが、桃花は難しく突き詰めた表情で断る。

片岡「えっ! 行かないの?」

桃花「うん…」

岡野「具合でも悪いの?」

桃花「…」

桃花は不機嫌な顔で俺を睨む。

龍騎「…んつ、何だ?」

桃花「人の気も知らないで…」

龍騎「はつ?なんて?」

桃花「…別に」

龍騎「?」

桃花は目をそらすと頬を膨らませる。

? 「……」

ガシツ!!

桃花「ひやあつ!? //」

前原・岡島「「うおおつ!」」

龍騎が不快に思っていると、突然桃花の脇の間から両手がスッと姿を現し、指を開いた手が胸を強く掴み、そして揉みしだく。

桃花「ちょ…莉桜、また!? //」

読者の皆さんにお分かりだと思うが、犯人は勿論中村だ。

中村「おやおやお姫様、本日もお変わりなく♪♪

桃花「もう…離してよ!! //」

中村「ええ…どうしようかな?」

矢田ちゃんが行くつて言つたら止めてあげてもいいけど？」

桃花「な、何でそんな事…」

中村「意地張りなさんなつて♪

ほらほら早く言わないと誰かさんの前でエツチな女の子になっちゃうよお♪

桃花「はつ!?」

桃花は我に返り龍騎をパツと見た。

龍騎「…………／＼／＼

桃花と目が合つた龍騎はゆっくりと目線を晒す。

桃花「つつつ!?／＼／＼い、行きます！行きますから!!行かせて頂きますく!!／＼／＼

今の桃花はトマトよりも真っ赤に染まつている。

中村「んじやあ決定で♪

片岡ちやーん、1名様ご案内です。

あと、私も行くからヨロ♪

中村は舌を出しながら敬礼する。

桃花「はあ：はあ：／＼／＼

片岡「ど、桃花大丈夫？」

桃花「……もう死にたい」

こうして桃花と中村が新たなメンバーとして加わった。

龍騎「…お前は一体何がしたかつたんだ？」

中村「ま、気になさんなつて。

あとこれは貸しにしとくからねえ♪

龍騎「はあ：」

その頃、桃花を工口い目で見ていた前原と岡島は片岡と岡野にボコボコにされていたとさ。

めでたしめでたし。

あつ、まだ話は続くんでそのままスクロールして下さいね♪

――◇◇◇――

学校を出た俺たちは通学路を歩いている。

因みにメンバーは俺、桃花、前原、中村、片岡、岡野、そして途中から何故か合流していたカルマの8人であつた。

岡島？ アイツは特にボコボコにされてたらしいからな。
まだ教室で転がつてんじやないか？

龍騎 「つていうかお前いつのまにか…」

カルマ 「いやあ何か面白そだつたから付いてきちゃつた」

龍騎 「左様で。んで、どこでやるんだ委員長？」

俺は勉強会の発起人である片岡に聞く。

片岡 「そうねえ：最初は喫茶店か何処かでと思つてたんだけど、ここまで大人数だと流石に迷惑になるし…」

勉強場所が決まらず場が煮詰まつていると…

カルマ 「じゃあさ龍騎の家でもいいんじやない？」

龍騎 「俺の家？」

話を進めるようにカルマが提案する。

カルマ 「確か龍騎の家つてこの近くだよね？」
確かに俺の家はここからそう遠くはないが…

つていうか何でコイツは俺の家を知つてんだ？

中村 「おつ！ それいいんじやない？」

前原 「んじやあそこで良いんじやねえ？」

岡野 「決定♪♪

話が進むどころか地平線の彼方まで飛んで行つてしまいそうな勢いだ。

片岡「ちょ、ちょつと皆。

そんな急に押しかけたら迷惑になっちゃうわよ。ねえ神道くん？」

龍騎「…いや、今は誰も居ないし別に良いぞ。

それにこのまま行く当てもなく彷徨うのも疲れるしな」

片岡「そう？：じやあお言葉に甘える？」

全員「「意義なーし!!」」

こうして俺の家で勉強会が開かれることとなつた。

中村「楽しみだね♪桃花♪」

中村が揶揄うように桃花に聞くと：

桃花「龍騎くんの家……

ど、どうしよう…わ、私変な格好してないよね？
髪の毛とかも跳ねたり飛んだりしてないよね？

も、もし龍騎くんのお父さんやお母さんに会つたら何て言つたらいいかな？」

中村「あーそうですねー。ちょっと落ち着いた方がいいと思いますよー」

冷ややかな目線で中村はそうアドバイスした。

――◇◇◇――

龍騎「ちょっと狭いが上がつてくれ」

全員「「お邪魔しまーす!!」」

さつきまで誰も居なかつた家に賑やかな声が木靈する。

龍騎「とりあえずお茶淹れるから適当に座つてくれ」

桃花「あつ！私も手伝うよ」

片岡「私も」

リビングに皆を通した龍騎はお茶の用意するため一度キツチンへ

向かい、その後を桃花とメグが続く。

3人でお茶の準備をしていると…

片岡「そろいえばさつき誰も居ないって言つてたけど親御さんは共働きなの？」

龍騎「ああそうだよ。

正確に言えば親父は小さい頃に亡くなつて母親と2人暮らしながら、仕事で海外にいる事が多くてな。

今は1人暮らしたいなもんだ」

片岡「あつ…そうだつたんだ…ごめん」

龍騎「いや、本当の事だし別に隠すような事じやないしな。気にすんな」

そう言つて龍騎は再びお茶を淹れる準備を進める。

片岡「じゃあいつも持つてきてるお弁当は自分で作つてるの？」

龍騎「ああ。つても殆どは夕飯の残り物で気が向いたら朝作つてる。

そうじやなかつたら登校の時にコンビニで買つてるんだ」

桃花「……」

平気そうに言うが龍騎くんはどこか寂しそうな顔をしていた。

ちよつとでも…

ほんのちよつとでもその寂しさを癒してあげられたら…

桃花「……作つてあげよつか？」

龍騎「はつ?何を?」

桃花「お弁当……作つてあげよつか?」

内心恥ずかしく思いながら私は言う。

龍騎「弁当つて、大変じやないのか?」

桃花「ううん。ママから「女の子が料理ぐらい出来なくてどうする

の！」つて言われて週に1回は自分で作つてるの。

だから1人分増えた所で大丈夫」

龍騎「そうか：じやあ折角だしお願いしようかな？」

桃花の顔はパアツと明るくなる。

桃花「うん♪すつごい美味しいから楽しみにしててね♪」

龍騎「ああ、期待してるよ」

片岡「ごほん、あーもしもし？お茶の準備が整いましたけど？」

龍騎たちが話している間に片岡はお茶を淹れ終わっていた。

それもちよつと不機嫌な顔で…

龍騎・桃花「あつ、すいません……」

――◇◇◇――

3人はお茶を淹れ終えて皆が待つリビングへと戻つて来た。

桃花「お待たせ♪」

前原「おー待つてたぞ」

岡野「随分とかかつたね。

それで何で桃花はそんなに嬉しそうなの？」

桃花「ふふつ…内緒♪」

岡野「？」

桃花は人差し指を立てて口元へ寄せる。

龍騎「さあ、一息ついたら勉強会を始め…つてアイツらは？」

お盆を持った龍騎が辺りを見渡すととある2人が見当たらぬ。

岡野「何か『男の1人暮らししながらやましい物が絶対あるはず！』とか言つて家の中を物色しに行つたよ」

龍騎「……そうか」

龍騎は持つているお盆をテーブルの上に静かに置いた。

龍騎「……皆は先に飲んでいてくれ」

そう言い残し龍騎は静かにリビングを出て行く…

△テメエら人の家で何やつてんだあああ!!

△うげつ!? 気付かれたあああ!!

△うわゝ怖いなゝ♪

全員 「「…………うん…………何も聞こえない」」
残された桃花たちはゆつくりお茶を啜つた。

――◇◇◇――

龍騎「つたく、お前らは…」
激闘約5分。

2人は龍騎によつて確保された。

龍騎「お前が家に行きたいつて言つてたのはこれが理由か?」

中村「だつてさあ人の家漁るのつて楽しいじやん?」

カルマ「だよねえ♪」

龍騎「お前ら反省してねえだろ。」

△あのなあ『親しき仲にも礼儀あり』つて言葉知らないのか?

△氣心知れた中でもそれ相応の礼儀つてもん♂へねえねえ、何か『男
は力なり』つて書いてる掛け軸のある面白そうな部屋に面白そうな写
真見つけたよおゝゝ人の話聞いてんのかテメエはああ!!」

△龍騎くんが説教をしている間にカルマくんが抜け出して何か面白
い物を見つけたようだつた。

何だろう…行つてみよつと♪

前原「何だこの部屋?」

部屋の中に入ると、トレーニングジムとかにあるデカイ器具が所狭しと並んでいた。

カルマくんが言ってた掛け軸が本当に掛かってる…

龍驥「御の口に二ノノハラ屋が」

岡野「ねえそれよりさつき言つてた面白い写真つてどれ?」

カルマ「これだよ」

カルマくんが持っている写真を見るとあどけない表情をした笑顔の子どもが写っていた。

片岡 これって…昔の神道くん?

龍旗一派・全圖の入

岡野「全くだね

龍騎 「おい、それどういう意味だ？」

片岡　まあまあ……どうしたの桃花？

桜花一
「

龍騎くんにもこんな可愛い時代があつたなんて！

どうしよう…

母性本能をくすぐられるううう!!!

私は喉を周りに聞こえないように鳴らした。

中村「それよりさあこの隣に写つてる女の子は?」

桃花「隣?」

龍騎くんに夢中になり過ぎて気づかなかつたけど、よく見ると写真には龍騎くんの他にもう1人写つっていた。

：可愛い女の子だけど誰だろう？

龍騎「…昔、近所に住んでいた子だ。まあ幼馴染といつたところだな」

中村「なるほどなるほど。

…どどのつまり”好きな子”なんでしょう？」

桃花「!??」

莉桜の仰天発言に驚きで私の心臓は激しく動悸する。

桃花「好きな子…好キな子…好キナ子…」

片岡「お、落ち着いて桃花！まだ決まつたわけじゃないから!!」

カルマ「いやああなたがち間違いじやないと思うよ。

ただの幼馴染の写真をわざわざ写真立てに入れて飾らないよね？」

中村「あつ、私も同じ事思つてたんだよねえ」

どうしよう…

もし本当にそうだつたら私は…

龍騎「いや、その子は…」

中村「おやおやあ、その顔は何か隠してゐみたいだねえ」

龍騎「…止めてくれ」

中村「照れなさんなつてえ、あつ！もしかして既に付き合つているとk…」

龍騎「中村!!」

全員「「!?」「」」

突然大声を張り上げた龍騎くんに私たちは雷に打たれたように驚いた。

龍騎くんの顔は悲しみとも怒りともつかない表情だつた。

龍騎「頼む…これ以上は…聞くな…」

中村「あつ…うん…ごめん…」

普段はお調子者の莉桜もこの時ばかりは萎縮していた。

龍騎「…いや…俺も悪かつた。急に大声出して…悪い」

何だろう…

いま龍騎くんの”心の闇”が見えた気が…

片岡「ま、まあ話はここまでにしてリビングに戻ろう。
勉強もしなくちゃいけないし…」

前原「そ、そうだな！気持ち入れ替えて頑張るぞ」

岡野「が、頑張ろー！」

ピロリーン！

突如として前原くんの携帯が鳴った。

前原「んつ、誰だ？…磯貝か。

そういえば日本校舎の図書室で勉強してゐんだつけか？

なになに……はつ？」

磯貝くんからのメールを要約すると…

- ・A組と期末試験の結果で勝負することとなつた。
- ・5教科で取つたトップの人数が多い方が勝利。
- ・負けた方は勝つた方の言うことを何でも出来る。というものだつた。

——◇◇◇——

——龍騎 side——

俺の家での勉強会も終わり夜も更けてきた。

皆はすでに帰宅の途につき、家には桃花と2人だけとなつた。

龍騎「悪いな、でも洗い物くらい俺が後でやつとくのに」

桃花「ううん。流石にそのままにして帰るのも悪いし、それに龍騎くんが家まで送つてくれるんでしょ？」

そう言う桃花は台所で皆の使つたコップを洗つている。

龍騎「俺には『送つていけ』って言つてるよう聞こえるんだが？」

桃花「あつ、バレちゃつた?♪」

龍騎「まったく……んじや後片付けも大方済んだし、行くか？」

桃花「うん♪」

片付けを終えた俺は桃花を家に送るため家を出る。

その道中では期末試験の話や磯貝から送られてきたA組との対決についての話が大半を占めた。

そうこうしている間に桃花の家の前まで到着した。

桃花「送つてくれありがとう！また明日ね」

龍騎「ああ、…………なあ桃花」

そのまま自宅の玄関に向かおうとした桃花を俺は呼び止める。

桃花「どうしたの？」

龍騎「さっき俺が怒鳴った事だけど……なんて言うか……すまなかつた。

ついカツとなつてしまつてな。

だから皆にもすまなかつたつて言つといてくれ。

それと……俺が言うのもなんだが……お前は気にならないのか？俺が

急に怒鳴つた事……」

桃花「……」

玄関の扉に手を掛けていた桃花はその手を離し、一步また一步と龍騎に歩み寄り……

ピトッ……

両方の手を龍騎の頬に当て優しく包み込む。

龍騎「桃花……」

桃花「気になるよ……すつごい気になる。

でも怒鳴つてた時の龍騎くん、怒つてたと言うよりも哀しそうな顔してた。

私はあんな哀しそうな顔をした人に何で？なんて聞けない。

莉桜だつてきつと悪い事したつて思つてるだろうし。

だから今は聞かない。

でもいつかは……

いつかは聞きたい。

それが龍騎くんの救いになるなら私はどんな話だつて聞いてあげられる。

龍騎くんの救いになるならね。

因みに今の言葉は誰かさんの受け売りだよ♪
桃花は恥ずかしそうにはにかむ。

龍騎 「……ありがとう。

じやあお言葉に甘えて待つてくれ。

きつといつか……な

龍騎は少女のようにくすぐつたそうに笑った。

桃花 「うん♪

でもその前に期末テストだよ。

絶対にA組に勝とうね！」

龍騎 「おう！ 気合い入れねえとな」

桃花 「その意気だよ♪

じやあ今度こそまた明日ね…バイバイ♪

桃花は頬から手を離すと手を振る。

龍騎 「また明日」

龍騎もそれに応えるように手を振る。

桃花は軽快な歩みで扉を開け徐々に閉まる隙間から消えていく。

龍騎 「……頑張らねえとな」

まだ手の暖かさの残る頬を叩くと来た道を歩いていった。

一方、玄関をくぐり家へと帰ってきた桃花は「…

桃花 「ただいま」

桃花母 「おかえりなさい。さつき玄関の前に一緒にいた男の子って誰誰？」

頬っぺたに手なんて当たりしてラブラブだつたじやない♪」

桃花 「はうあつつ!? // /
見られていました：」

そして期末試験当日の朝を迎える。